

357-310



1200501411168

357

310



始









32-36  
136

童子軍



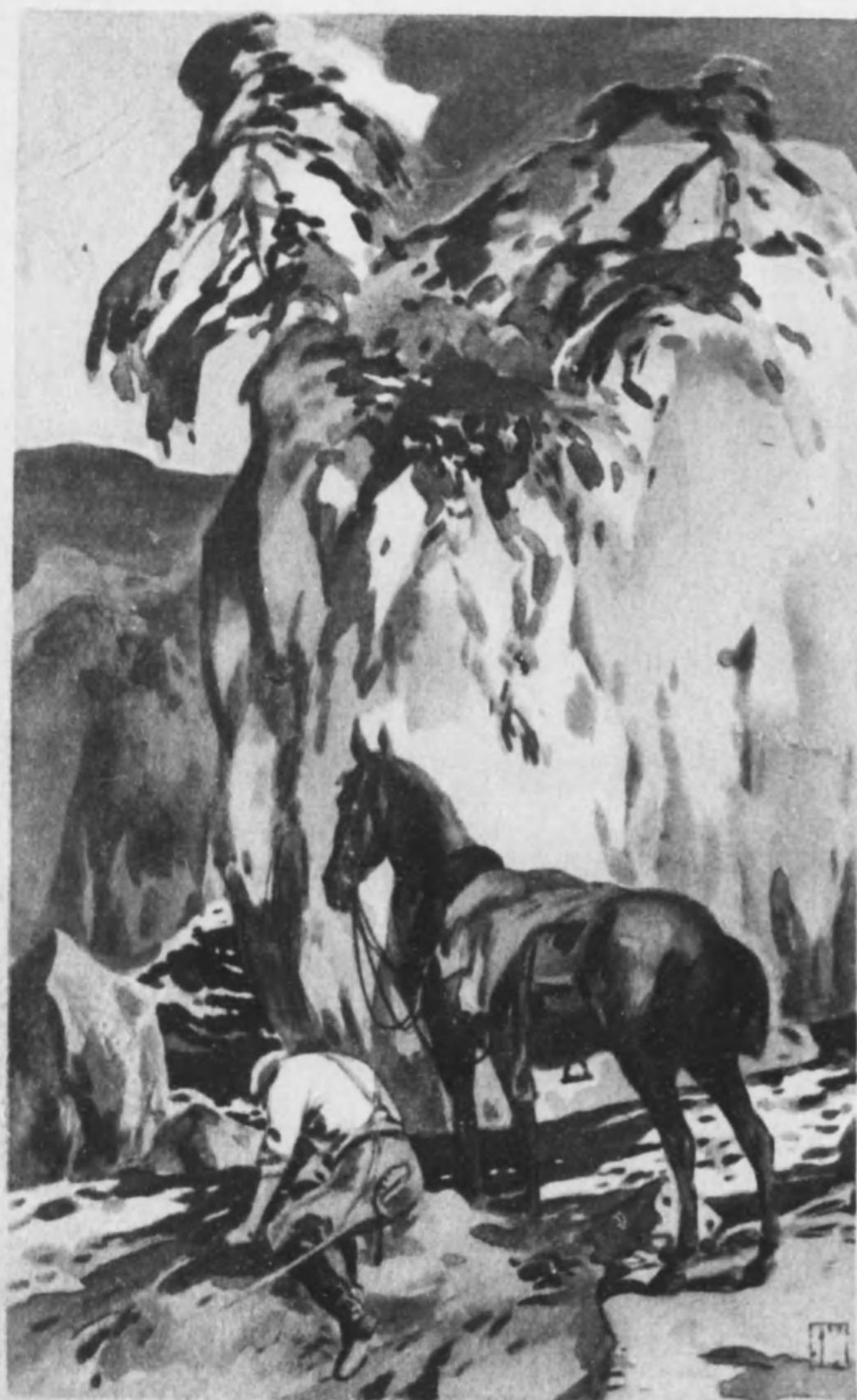
孫毓棠作













357-310

## 序

今から二十餘年前、予の東京市長時代、報知新聞に頗る予の注意を惹いた一青年記者があつた。眉目清秀、氣宇精悍、いかにもその職務に對して、熱誠であり、眞劍であつて、何か問題が起ると、飽くまでその眞相を究明せすには措かないといふ風であり、文章また雄勁潤達、よく人の肺腑をうつものがあつた。

この青年記者こそは、即ち今日の佐藤紅綠君である。其の後、君は小説家として噴々たる名聲を擡にするに至つたが、元來讀書に遅く、とりわけ日本の小説に縁遠い予は、久しく君の作品をも細く機會を持たなかつた。然るに、偶々、君の「町の人々」を讀んで大いに敬服した。君は世の中のあらゆる事象に對して、實に精細に研究してゐる。そして之に對する見識は高く、思想は正しい。加ふるに、以前よりは一層圓熟せる筆致を以て、之を活かしてゐる。而して、この感は今また「富士に題す」を一瞥するに及んで、一段と深いものがある。予は始めて日本の文藝家も筆を以て社會を指導することが出來ると信するやうになつた。

この「富士に題す」は、主として日露戰爭を背景とする、その時代の思想や生活を描寫したのであるらしい。篇中にはそれと窺はれる幾多の政治家や實業家が出てゐる。日露戰爭、



誰しも日本が大勝を博したものと思つてゐる。然し、果して日本はこの戦争によつて何を得たか。紅緑君は之に對して、極めて明快な觀察を試みてゐる。君には眞に日本を愛する熱がある。凜平として犯すべからざる氣魄がある。君は日本男子たることを以て本懐とする。そして、日本精神の確立を高唱する。思ふに、靈峰富士をもつて本書に題したのも、日本精神を表徴し、讚美する意味に於てなされたものであらう。

時代の思潮は急速に流れてゐる。この潮流の本質を見究め、その方向を直視することは、凡庸な政治家のよくするところではない。紅緑君はこの點に於て政治家以上の政治家である。日本は今思想に、經濟に、非常な難局に際會してゐる。此の書を読む者は、それがいかにして萌芽し來つたかを知るであらう。更にまた之を現状と對照する時に、明日の日本が何處へ行くか、ある暗示を受けるであらうと思ふ。

之を以て序とする。

昭和五年盛夏

尾崎行雄

## 序

佐藤紅緑君の小説に就いては、僕はこの二十年に垂んとする間、終始變らぬ愛讀者の一人を以て任じてゐる。君の小説に最初觸れたのは、大正の初め、君の出世作と目すべき「虎公」であつたと記憶するが、爾來新作に接する毎に通讀し、通讀し了へると共に所感とするものを録して君の許に呈してゐる。大震災に遭遇して書庫を焼失し、この所感の備忘、草稿たりしものを悉く灰燼に委し、記憶を辿るよしも今はないのであるが、中には随分詳細にわたつて論評した長文のものもあつた筈である。僕は元來他の小説家のものも時に讀まぬではない。しかし君のもの、如く胸裡を強く動かす、深い感銘を與ふるものは殆ど稀である。

僕の見るところでは、君の小説には他に比肩を容さぬ三個の大なる特點があると信じる。先づ第一の特點はその扱はれる世界が社會の各方面にわたつて廣く、これに伴つて人物の多種多様なことである。僕は平常君の小説を目して社會讀本となしてゐるものであるが、この名稱に適當する資格は先づこの第一の特點に據ると考へる。その世界の廣き事、例へば議場あり、株式取引所あり、細民窟あり、公判廷あり、競技場あり、農村あり、眼前直ちに目にする如く光景は躍如と描かれ、



人物も之れに伴ひ上は社會上層に奢る貴族から、下はドン底に喘ぐ窮民に至るまで、個々によく生活の姿態を捉へ、各自の人情の機微を穿ち、この結果一篇の小説は常に宛として大社會の縮寫たるの面影を有する。この廣大無邊、縱横自在、君の小説に對し先づ僕の衷心から満足し、敬服する點は此處に存在する。

第二は其の諷刺である。君はその昔如何なる動機から政治記者たりし境涯を棄て、小説家に轉じられたか知らないが、政治を初め各社會の内部に精通し、その暗黒面を衝き、秘密を暴露する絶妙な手腕に至つては、唯感嘆するの他はない。讀者によつては之れがために慚汗背を濕し、その作中の人物なるものが吾れをモデルにして描出されたるものに非ざるかを疑ふ者が頻出する如く、極く最近にも政界知名の甲氏財界知名の乙氏が君の近作「町の人々」「麗人」を讀んで、これは自分の事を書いたのではないかと思ふと云つて居つた程である。君は此の甲氏乙氏をモデルとして書く筈は無いのであらうが、廣く現代の世相を見廻し君の犀利なる眼光によつて暗黒面を洞見し、これを社會の事實として筆端にのほせば、作品中の孰れかの人物が特に自分に促進したるを讀者は感じ、慚汗背に透るの感を起すのである。諷刺の鋭利、巧妙は斯くして君の作品に於て獨特で、讀者は之れによつて各自その心核に觸れしめられ、良心を呼び覺まし、反省する痛

切な機會に接するであらう。君の小説の社會讀本と云ふ意義は之れを以て最も顯著たる面目を發現する。

第三の特點として云ひたい事は其の文章である。これまた君獨特のもので、それは如何にも讀みよく且つしつかりしてゐる。一點の滯留も留めず、一粒の餘滓も残さず、最後まで息もつかせず讀過させてゆく不思議な力がある。他の小説家のものになると、これだけの力がない。讀んでゆくうちに肩の凝る思ひがし、途中で投げ出して仕舞ふことが多い。しかも君のこの文章は單にそれだけかと云ふとさうではない。其の讀みよきが中に含蓄深く意義精到し、一言以て云へば、實にしつかりした文章である事を仔細に内部を驗する事によつて發見する。即ち輕妙にして精確、平易にして堅實、誠に堂に入つた文章である。君の小説の特點の第三に算へたいものは、實にこれである。

以上の三個の特點は君の作品を見る毎に、僕のつねに感嘆し敬服措かざるところである。然るにこの三點を貫いて更に君には、烈々たる人道觀、正義觀が作品の根底に横たはつてゐる。何人にせよ君の作品に接し、その根底に潜む高邁な精神に打たれ、感奮せぬものが無いのも之れに據るのである。この點、諷刺の鋭利、材料の多趣、文章の巧妙も、必竟はこの根本精神を發動せし



むるが爲めの用具であつて、君が小説執筆の大目的も實は此處に存するので無いかを覺ゆ。

今回、公けにされる長篇「富士に題す」も、君が吾が國の現下の状態に深憂を發し、國民を奮起覺醒せしめんがために、日露戰役當時、吾が國民が協同一致して強敵露西亞に當つた時代を描寫したる規模雄大なる小説であり、君のこの精神を最もよく表現したる一大雄篇である。日露戰役當時の日本、これに關しては僕輩も現在の國內に於ける世道人心の弛廢を見る毎に、近年來回想する事が頗に痛切である。それは今日の時世に對し確かに偉大なる教訓を齎らすに足る。君の從來の人道觀、正義觀に照らし、今この好箇の大舞臺を探り、大題材を扱つたとて何人が怪しむものがあらう。

實に期せずして一致した事であるが、最近、僕も「訟庭論草」に當時講和條約の成立に激して起りたる日比谷事件の辯論を收めて排印した(訟庭論草・國民大會事件篇)。

宣戰の大詔煥發せられてより國民の奮勵努力當に一年有半、國內壯丁の半を擧げて外征に従ひ、人命を損すること十幾萬、財を糜すこと十數億、後年に到り世界大戰なるものがあつて、交戰諸國の蕩盡せるものが之れ以上であるとは云へ、吾が日本にありては誠に國家ありて以來の大なる事業であつた。況や世界大戰の各交戰國にあつては元これ聯合國と云ひ同盟軍と云ひ互ひに掩護

し協助する味方があるに反し、當時の吾が國は敗北を以て最初から局外各國から豫想されたるに拘らず、敢然と起つて猛斷し、世界も怖る、強大なる敵に抗したのである。その犠牲の甚大、打撃の痛烈、決して同一に見るべきではないのである。云ふまでもなく吾が國はこの大なる犠牲に堪ふる如く富み且つ大なるのでは無かつた。従つて敗北を豫想したる局外各國の觀測したるもの以外に、何ものか無かりしならんには、戰ひに勝つと敗る、との如何に關せず、唯だこの大なる犠牲のために滅亡するのであつた。然るに此の犠牲に些かの愁訴の聲を擧げざるは勿論、つねに戦ひを終局まで遂行せんとするの強い意向を保ち、このため時の軟弱なる政府當路者の外交によつてポーツマスの平和條約成るや、その屈辱的處置に激怒し國を擧げて國民は猛然と起つたのである。即ち、既述日比谷事件は斯くして現れたものであつた。國民は彼の際、戰つて露國を大いに屈しなければ、國家前途全く絶望すべきものがある事、及び戦ひに勝つて國運が大に興るべき時機に際會してゐる事を自覺し、祖國擁護の意氣冲天に燃え、その究極に到るまでの健闘を辭せなかつたのである。この強烈にして眞摯なる自覺が彼等の中に横溢し、瀾漫し、相打つて一丸たらしめ、熱火と迷つて外に對したればこそ、各國の豫想をも痛快に破つて強敵を倒し得たのである。



君の「富士に題す」は日露戦役當時の吾が日本に溯り、この旺盛な國民の精神状態を極大な筆を揮つて描寫したものである。當時の臺閣に列した諸公の面影、議會の光景、國內到る處の目醒しき戰時的風景、さては硝煙迷ひ、劍尖閃く大戰場の狀況等宛として二十幾年の往時が大バノラマの如く眼前に回轉し來たるを覺える。そこでは國民が躍動してゐる。生氣充滿してゐる。暗黒なる政界の裏面が稍ともすれば前途を纏繞閉塞せんとするに際して、志氣燃ゆる國民の何等かの舉が之れを打開する因となり、赫奕たる新行路が再び照らされる。人心は微妙である。また今日に見る危険思想の萌芽は、既にこの時に社會の一隅に生えだしてゐる。作者は篇中の人物を借りて之れに反省せしめ、深奥なる祖國愛の自覺、及び高邁なる道義精神のもとに處理すべき事と諄々と説く。實に其の源を正して今日の國民に大教訓を授けるのである。この銳利なる着眼、深大なる用意、一篇の結構中には到るところ此の種の讚嘆に堪へぬものが多い。

作者佐藤君は國民を愛し、理解し、その大なる力を知る。露西亞に勝つた當時の日本は、この大なる力を國民統一の自覺のもとに所有してゐたものである事を溢る、ばかり知つて居る。凡そ自覺は國家の精神である。精神傷けらるれば國家亡ぶ、今日の時世の悪化せるは恐らく此の種の壯烈強大なる自覺を喪失せる事より起因してゐるのである。この意味に於て「富士に題す」全篇

は、今日の時世に凡百の覺醒の機を與へる快心の文學である。想ひ起す、大正十二年二月、歐米視察に赴く君のために帝國ホテルに送別宴を催したる席上に於て、君の盟友五來欣造君に次いで吾輩起ち、海外にあつても祖國を斷じて忘れざる事を以て第一義とするといふ趣旨を述べ、君の行を送る辭とした事があるが、今此の如き雄篇を得て君に對する吾が本懐の眞に究極まで到達したるを覺える。こゝに所感を述べてこの大作に饒する。

昭和五年八月

花井卓藏



## 緒言

一個の人間が大きな刺戟に觸れると性格が一變する如く、一國が大戦争を終ると思想が激變する。其れは古今の歴史が證明する處である。此の故に最も細心な政治家は戦争の勝敗に肝腦を碎くと共に戦後の來るべき思想に注意する。

日露戦争は日本に取つて凡ての意味に於ける劃時代的な一線である。明治天皇及び其の臣民が東海の孤嶋を世界的に進出せしめた尊き歴史の事實である。

此の驚くべき事實に遭遇した私は當時漸く三十歳を過ぎたばかりであつた、曾て北清事變の時報知新聞記者として従軍した私は砲煙彈雨の中に世界各國の兵を面たり見た、さうして最も無智であり残忍である露國兵と武士道精神に鍛へられたる日本兵との優劣に就いて極めて明らかに判斷する事が出来た。

日露の戦端が開かれても私は毎も微笑して居た、必ず日本が勝つといふ自信は如何なる時にも動かなかつた。果して日本は海に陸に驚歎すべき勝利を占めた。

併し私は戦争の勝敗よりも國民の間に醜醜しつゝ、ある思想の傾向に多大の杞憂を懐いた、凡

てが新らしくならんとして居る、戦争前に於て先づ幸徳、堺、内村等の諸氏は非戦論を唱へた、彼等は國家主義の城壁に其の新らしき鶴嘴を打ち込んだ。一方に於て巨商は臆面なく暴力を振つた、相場師が廟堂の樞機を窺つた、三越は新築に取掛り、帝劇が起り、ウキスキーと平野水が流行し、婦人の頭に二百三高地が聳えた。

勇敢なる日本兵が猛虎の群羊を驅る如く奉天の露兵を驅逐しつゝ、ある間に、日本の内地は海の彼方から新思想の襲撃を受けた、凡てが内部から動搖した、變化した、戀愛が神聖視された、姦通が流行した、翻譯ものが流行した、銀座にカフェが現れた、女優なるものが出た、政治家は富豪の飼犬になつた、さうして若い人達に肺病が流行つた。

其れと對抗して日本の國粹論者は爰を先途と戦つた、古い思想と新しい思想は渦を巻いて押し合つた。

當時私は一政黨陣笠であつたり、又政治外交専門の記者であつたり、又宗教に依つて靈の安定を求めたりした一浮浪人であつた。私は古き日本を見、同時に新らしき日本を見た。

私は此の過渡期に於ける日本の動搖時代に於て幾多の犠牲者を見た、屍を滿洲の野に曝した十萬の兵は勿論の事、あらゆる家庭に於て亦死傷者が續出した。



私は帝國議會に於て露探の嫌疑のために涙を呑んで隠退した一代議士を見た、彼が此の奇禍を買ふに至つた徑路も知つて居る。私は善良なる華族が藩閥に制せられて最愛の娘を富豪に賣つた事實に接した、丁度其の時「成功」と題する雑誌は非常な勢を以て賣れた、成功々々！ 成功は萬人の唯一の希望であつた、成功のためには如何なる手段をも擇ぶ必要がないと萬人は信じた。戦争前の日本と戦争後の日本と異つた事は歐洲大戦前後の其れよりも甚だしい、此の著るしき變化を記録する事は到底凡庸の筆では不可能である。

明治四十二年の頃である、私は初めて長篇小説に指を染めた、當時「日本」新聞社からの需に應じて「地上」と題するものを書初めた、これは三十七八年と題する積であつた、だが此の小説は二十回位で内務省から續載禁止の命を受けた。其の理由は「風教を害す」といふのであつた。地上は日露戦争前後の思想過渡期を描寫せんとしたものである、だが篇中の人物は餘りに實在に近いのと當時某重大事件のために當局者が神經過敏であつたために、私の此の作は天死せざるを得なかつた。

小説を禁止する、而も今後斷じて繼續する事も罷りならぬといふ命令は實に前代未聞の事である、大隈伯爵は二日に互つて當局の不法を詰責した文（談話筆記）を日本新聞に發表した。其の

他多くの學者達は口を揃へて私に同情の語を寄せた。

私は日露戦争前後の思潮及び國民の生活、政治、軍事、經濟、家庭、戀愛を描寫して讀者の反省を求め、日本精神の確立を高唱したいと思つたのである、だが當局は私を危険人物視し、私の左右に探偵を尾行せしめた。これほど間違つた話はないと友人等は毎も笑つた。私も笑つた。

私は其れから此の作に就ては全く斷念した。二十回分の切抜は何處かへ消えてしまつた、其れからもう二十年の月日は流れた。だが私の腹稿は依然として残つて居る。偶々講談俱樂部から小説を書けといふ依頼があつた、私は二十年前を憶ひ出した。

時代は過去を一掃した、當局者と雖も私を誤解するものは一人もなからう、私の他の作物を讀んだ事のある人は私を危険思想者視する様な事はない筈だ。此の大きな時代の記録を完成するには此の機會を逸してはならぬ、私は慙う思つた。

私は往年の「地上」と全然構想を異にした、私は富士山が好きである、富士山は何時見ても新しい、山の中で最も古い富士山は見る度毎に最も新しい靈魂を私の頭に吹込む、富士山は我國に於ける最も莊嚴で且つ有意義な存在である。如何なる舶來思想者と雖も富士山の存在を無視する事は出来ない。同時に日本精神をも無視する事は出来ない。私は此の小説を以て富士に題し



たい。

講談倶楽部は二ヶ年半の長日月に亙つて其の貴重な紙面を私に許した。私に取つてはこれほど骨の折れた作は未だ曾て一度もない。私はこれを以て完結した物語とは思はない、更に此の續きものとして第二の富士に題すを書くかも知らぬ、私は此の次に世界大戦後の日本を書きたい、さうして又溯つて日清戦争當時の日本と維新の日本とを書きたい、慙くして私は日本の四大時期の記録を完成したいと思ふ。

私は生きて居る限り富士を讚美したい。さうして富士を仰いで最も善き物語を書きたい。

昭和五年孟夏

於鳴尾村老松林

紅 綠 識

# 目次

出發の日……………二

大砲——畠山伯爵——騎兵中尉淺見一郎——妹節子——上原雅子の眼と内閣會議——偉大なる腹  
——品位の等差——軍曹工藤三吉——母と妹お夏——餡パン——富塚惣兵衛東京市を瞰下す——  
八萬圓の雄辯——長州人！

貴族……………三七

椅子の敷——政黨の負債——バザール準備會——三人の親友——小柴敬三——フロックコート  
の泥——曲者——三重人格——庭球の客——節子敬三を悪む——小南文學士——華族の悲哀——元老  
の干涉——子爵の涙と來客の笑——平和な少女

婦人の集り……………五〇

梅園伯爵夫人——揃はぬ洋盃——テニヲハの刀自——女優の出現——望月浪路——王冠——蛇は  
黙か虫か——幡ヶ谷の行者——上流社會悉く行者を信ず——お喋舌夫人——屏邊の黒子——幸福  
と災難——日英同盟論——藏鏡の自慢——雅子の狼狽——伯爵と雅子——節子の幻滅——偶像の  
破壊——兄の手紙——小南の苦悶——敬三の苦悶



最後の晩餐

友情——銀行から銀行へ——紹介の譲り合——五萬圓と六十五萬圓——忘れた帽子——ブランド  
—— 崑山伯の盆景——一寸の乃木將軍——政治は悪病——本當の貴族——二人の職人——酌婦  
の唄——赤犬——貴金屬を潰せ——淺見子爵の昂奮——向ふの室——節子の承諾——夾竹桃の花

七三

近衛騎兵

野營——棗の木——洗濯——雨の掩留——高粱酒——淺見一郎——節子の消息——兄は國の爲妹  
は家の爲——天を仰ぐ聯隊長——勳章は屍の上へ——工藤軍曹大いに酔ふ——三人の捕虜——跛  
と酔漢——フイトサ節——落日——黒木大將——詩も作らず田も作らぬ——華族の使命——三吉  
の葉書——タイムス記者と奥國武官——擔架卒——日本婦人の丸嚙——山上の湖水——戦争の醜  
陋味

九六

岩清水

日本軍の作戦——靴で描く圖——淺見中尉の使命——擔架卒——負傷兵の軍歌——砲兵陣地——  
ミルク色の煙——誰が退却と言つたか——逃げ様のまづい日本兵——格闘——敵兵に感心する——  
鉢巻形の丘——突撃の請願——砲身の血痕——軍曹の戦争論——二度び工藤軍曹に逢ふ——聯  
隊長の沈黙——人を斬る味——一郎負傷す——溪の清水——仙境——大自然——死生觀——青い  
鳥——蟹

一一九

新聞記者

一四四

暗潮

潮

電車の濫觴——車上の紳士——永井鳴眠——酒脱過る男——紅葉館——箒さん——明治新聞——  
高峰素之——露探事件——警視廳の復讐——佛國人ボーリユー——籠のない桶——秘密の貴婦人——  
—— 商賣敵——梅園伯の遊び振——踊りと密談——佳人必らずしも佳ならず——膝枕——敬三の  
露探事件觀——編輯局の立廻り——疑問の女中——探偵

一六九

情火

火

流眇亂射——假花道——美男と醜女——肥つた幽霊——侯伯確執——政黨嫌ひ——御挨拶——淺  
見子爵の笑顔——節子夫人——繪葉書——アメリカン型——女優と女役者——シニュークリム——  
—— 雅子浪路に菓子を贈る——賣笑女學校——瓜生實——二つのヴェール——高土間の視線——變  
性男子——御覽——眞琴の膝——遼陽陷落——兩雄の握手——兄の負傷——白髪頭

一九四

輿論

論

木像を斬る人——敬三の奔走——浪路の良人壽一——立廻りの稽古——一泊の金策——松の家——  
—— 梅園伯の揮毫——犠牲——端唄——裏面の複雑を知る——九州の代議士——ブランドーが雄辯

二二八



衆議院の食堂——群集——新聞記者詰所——和服の動物——得意の倉平——愚論——決議案  
——床屋と按摩と諸葛孔明——睡眠

### 黒い煙

高峰の辯疏——國賊——地獄極樂の人形——金モールの閻魔——犬と猫——衆議院の決議——喧嘩がしたい——手拭と石鹼——犠牲——號外——蕎麥屋——非戦論者——敬三大いに論ず——戦争は正義の保護なり——祖先の墓——人を撲る淋しみ——時代が變つた——思想の侵掠——砲兵工廠の黒煙——酔臥——中形の寢巻——駄菓子屋——若い娘——工藤軍曹

### 小南子爵家

眞面目な人小南浩——工藤軍曹の母——ロスケの馬——小南の敬三觀——敬三の小南觀——一郎の手紙——小南の妹環と桃子——薄倅な令嬢澄江——敬三婦人に好かれる——久子夫人——キヤベツの切り方——性急な母——同年十八歳——久子、義理の娘を愛さうとして愛し得ぬ——賣市——洋装と振袖——丸顔の高島田——御茶——小南子爵——悲憤居士——敬三の軍談——環の發作的憤慨——節子を罵る——戀の被害——怨と戀——小南の苦惱——間に合せの妻——戀が解らない人

### 誕生祝

沙河占領——淺見家の有福振——行者の占筮——令嬢達の不如歸論——ポトランドを煽動せよ——恒子夫人——篤彌の得意——節子良人を耻づ——人間と動物——疊と寢臺——飯とパン——洋

### 父と子

食に箸——一郎の歸宅——提灯行列——母心——三吉の運命觀——死なゝい男——熱烈なる正義觀——不正な義務——私愛して居ます  
犠牲——寢巻——胸痕——學者の書架——澄江の幸福——環の休憩——友情——他人の生活に觸るな——淺見は滅亡するぞ——環、兄を罵る——一郎再び軍役に就く——停車場——豫後備兵——微笑——妹も許してくれ——親父の傍に居るのが苦しい——涙——湖に石を投げると——富塚母子

### 酒

旅順開城——梅園伯の酒——富塚の鼻——人に怖ぢぬ法——伯爵の黒子——桃花片々——早稻田伯の感想——春木侯——一武弁のみ——武の戦と文の戦——親露は征露——不滅の提灯——敬三の自負——藤堂小使守——内職——田舎代議士——肉陣——母

### 日本兵

雪の黎明——三月三日——雀と鴉——生者の苦難——師團司令部——華族砲兵隊——クロバトキンの作戦——唐家臺——パンを煮る參謀長——蟹の鉄——菓子足リンスキー——工藤軍曹又々失敗す——一郎死を思ふ——聯隊本部——白い煙——斷崖の日本兵——惡戦——彈藥缺乏——生死は一路なり



背

後

奉天停車場——クロバトキンの苦衷——軍將の不和——命令の取消——サハロフの罷——露軍優勢——宮中の確執——社會主義——水を飲む日本兵——亂調子な音楽——舞踏——漫畫の骸骨——農馬——愛國心は損ななものだ——クロバトキンの決戦——大山總司令官——兒玉總參謀長の卓子——戦争論——日本には外務省がある——國民を信ぜよ——特志看護婦——眼鏡の曇

追

撃

夜營——一郎の死生觀——工藤軍曹の殊勳——敵の退却——一郎の傳令——大山大將と兒玉大將——互の沈黙——戦況不振——巻いた時計——劍が峰——長靴形の戦線——巾着の紐——兒玉大將の戦法——大將の性格は全軍の性格——智者の迷ひ——一郎と大山將軍——追撃命令——退却命令——奉天の混亂——彈藥が傷病兵よりも貴重である——樂隊入りの退却——不眠不休——赤い笑——狂風——迷惑な捕虜——潰走の光景——追撃の緩慢——日本の弱點

捕虜の夕べ

追撃法と退却法——三方か四方か——日本は苦めり——退却の名人、家康と正成——露國の虎の巻——ナポレオンと大山元帥——我が死傷七萬人——樂隊——砂糖車——日光美——何をしてるんだらう——順境の恐怖——捕虜に困る——露兵の七つ道具——釜——モノロフ大尉——名譽——握飯の食ひ方——一郎の演説——非戦論者——個人主義——戦敗國には革命が起る——モノロフ廣言

妻

痔瘻——晴雨計——接吻と握手——篤彌——盲目的な愛——ネクタイ六十本——理想の良人——平民主義——男の髪——襟足を刺る男——愛國劇——モンナ・ゾナ——軍旗——畠山老伯の涙——役者は教育家だ——鶴巻伯——モスコイ萬歳——大法螺の必要——バルチツク艦隊——節子とゾナ——恍惚——良人の手——老伯の憤怒——妻の義務——生か死か——階段の上と下——小南兄妹！

浴

室

戀人の姿——貧乏揺り——結婚前の秘密——紳士の體面——肉の勝利者——浴室——癩癩と未練——篤彌の自己解剖——オートミル——接吻の吹聴——手紙の訊問——吸取紙と虫眼鏡——左向きの文字——金で買った娘——節子の忍耐——水白粉——父！あゝ父！——淺見家の新築費用——三臺の馬車——婦人記者山城京子——バザー——青年は男性か女性か——和睦の計略——晚餐連夜——トランプと花札——栗津邸の遊興——外交官夫人の祕事——蛙の聲——明と暗——節子姦通を思ふ

バ

ザ

日本海々戦——有栖川宮殿下と獨逸皇帝——佛國諸新聞の論調——クレマンソー——英國の輿論——日本の勝利は文明の凱旋である——米國の輿論——敬三の早起——砲兵工廠——工藤三吉の妹お夏ちゃん——母の心——女工通用門——戀？否？——髭の男——高峰の復讐——進軍か休戦



爆

か——内閣倒壊？——梅園伯と富塚の提携——最後のバザー——べらんめえ——合鑿達の奮闘振  
——日英同盟軒——富塚一攫五百萬金——電話  
發……………  
敬三の追蹶——死活問題——媾和反對——政黨費の調達？——緑のカーテン——歪んだ髪——浪  
路と瓜生實——上原雅子と幡ヶ谷の行者——淫慾の巷——外は明るい内は暗い——梅園伯の洋盃  
——砲兵工廠の爆發——バザーの混亂——伯爵の顔色——お夏！——惣兵衛の大相場——工廠の  
慘狀——僕の妹です——お夏の負傷——工廠内の警戒——露探——社會主義者——戦争不可能——  
——敬三の憤怒

五二四

家

出……………  
惣兵衛の慧眼——爆發の責任——新聞の人氣取策——コレラと社會主義——ローマ字の看板——  
節子の家出——老子爵の電話——小南の戀愛觀——眞琴を娶る——節さんの心が落着くだらう——  
——痴氣と蕎麥——酔中の曲乗り——日の丸の提灯——米國大統領の仲裁——媾和風——節子歸る  
——篤彌の夫婦觀——徹底は困難——節子の告白——道ならぬ事——良人と妥協する方法——女  
の氣持を誰か知る

五三六

媾

和……………  
小村男爵——梅園伯の卑怯——英國の嫉妬——一日二百萬圓の軍費——小村男の孤忠——尊とき  
犧牲——男爵の風采——市民の期待——私設公使——僕の妻だ——小南の眼——凡てが行った——

五六二

親

と子……………  
——節子の情人——姦通の理由——芹澤夫人の夫婦觀——立派になつて頂戴——上流婦人の素行——  
——馬車中の着替——祕密は甘い——名譽の鍵——冒險の樂み——幸福の絶頂——皮肉な歡樂  
イブの悩み——新思想——釣瓶——影法師——妖術修行——指の黒子——縋帶して置け——切つ  
てしまへ——上品な母——鶴と家鴨——新築の客室——母の心づかひ——子爵夫人のベッド論——  
——栗津家の御蔭——節子始めて父を知る——向日葵——心機一轉——黄金の環——妊娠？——誰  
の子？

五六〇

燒

打……………  
敬三の戀——高杉東行——詩吟——ポーツマス條約——社會主義者——國民の公憤——九月五日  
——國民大會——警視廳の無能——群集心理——サイダー屋の小僧——飴屋の太鼓——殺氣横溢  
——數旋の大飾——日比谷の防備——帽子——腕と腕——拳と拳——惡鬼と暴民——窮鼠猫を囓  
む——電車破壊——島山伯爵盲を論ず——小村は喜ぶだらう

五九九

新

生 活……………  
暴民——國民新聞社前——劍舞師——多數は惡化す——社會主義者——敬三の負傷——退社の宣  
言——新聞屋と新聞記者——輿論は愚論なり——片方の靴——讚美歌——別天地——葡萄酒——  
現實とは何ぞや——増上寺——基督教と佛教——新たなるもの

六三三



平

和

暴動の結果——責任——大隈伯、西園寺侯、澁澤男——葛城首相の苦惱——高峰の復讐——平和  
 ——内閣更迭の噂——英國大使館の舞踏會——篤彌のシルクハット——淺見子爵の英語——歡樂  
 の巷——開放された婦人達——各國公使の顔——ウアレー伯と畠山伯の應答——戦後の潮流——  
 雅子と浪路——東郷大將——敬三感激の涙——社會主義者の捕縛——罪惡の鏡——戀人と良人と  
 情人——篤彌踊る——節子の自白——日本はどうなるか？

六五三

凱旋の日

六五五

篤彌の煩悶——我儘な女——兄の手紙——精神的の姦通と肉體の姦通——ヒステリー——芦澤夫  
 人の窮迫——節子の冷淡——妙計——節子若澤夫人を蔑すむ——お夏——凱旋門内外——敬三の  
 感懐——潮流——薔薇の花束——三人——バンザイ——兄を恐るゝ節子——數々の矛盾——茶  
 色の壺——電話

装幀 木村 莊八

口繪・挿畫 渡部 審也



富士に題す

佐藤 紅緑



出發の日

明治三十七年七月の某日、新橋停車場前の廣場に數百の人が群がつて居た、此の群集の真中に一門の野砲が長い砲身を澄み渡る天に向けて突立つて居た。眞夏の太陽は眼に痛いほど其の灼熱を澄びせるので、群集は帽子を前のめりにして其れを見詰めた、砲身の長さは七八尺もあらう、黒鐵造りの胴體は海の怪物が綿積の雲を目蒐けて吼えてる様にも見えた、處々に窪んだ傷口がある、傷口から厚い鐵の肉がぎざ／＼した岩の様に露れた、車はひしやけて太い鐵の鎖は中風病みの脚の様になぶらりと暗い處に垂れて居る、これは金州の戦ひに分捕した露軍の野砲である。初め人々がこれを見た時に其の犖猛な巨軀に驚いたが、總て敵愾心が一種の鯨波となつて爆發した。

『これで以て日本兵が四千人もやられたんだ』

丁度二三日前の號外に敵兵が慘忍酷薄で死傷者の屍を斬りさいなみ、首を泥に埋めたり、身に付けた時計や金品を奪るなどの事が掲載された。人々の憤怒は此の大砲に向つていやが上にも昂まつた。だが大砲は一向平氣である、誰が何と言はうとも聞えぬもの、如く沈黙して居る。中には大砲の知識を少し位有つて居るものがある。

『砲身は七尺だ、口径は十二三センチもあるだらう、日本のは大抵十センチだ、砲身も五尺だ、露助のは六千メートルも飛ぶが、日本のは三千メートルしきや届かない』  
人々はこれに反對した。

『そんな事があるもんか』といふ者もある。

『届かなくなつて届く様にするんだ。そこが日本人だ』と言ふものもある。

『造れば可いんだらう、なあに日本中の鐘を潰せばこんなものは百も千も出來らあ』といふものもある。

だが實際の處、人々は露國の武器が日本に優つて居る事を認めないわけには行かなかつた。日本が機關砲や機關銃にどれだけ惱まされつゝある事も、鐵條網といふ新式な防備のために惡戦しつゝある事も知つて居る、其れから加農砲の恐ろしい威力にも内々憚れて居る、今此の野砲を見てさへ出征軍の困難を考へずには居られなかつた。

『旅順は未だかな』

誰か、怒う言つた時今まで高聲に罵り合つて居た人々は急に沈黙した。もう大砲を見る人もなくなつた、太陽はきら／＼輝いて居る、人々は詰らない様な顔をして散り／＼に分れた。が突然けたたましい鈴の音と號外屋の叫び聲が聞えた。其れは何處から出たといふ事もなしに、一人現れ二人



現れ、瞬く間に五六人の號外屋が現れた。彼等は印絆纏を着て頭に捻鉢巻をして居る。

群集は雲霞の如く號外屋を包圍する。

「橋木城占領！ 萬歳！ もう直き遼陽だ、萬歳！」  
申合した様に群集は叫んだ。

「バンザイ！」

萬歳の聲と號外の聲とは燃ゆる様な暑熱の町々を狂的に昂奮させる。早くも家々の軒に日章旗が輝やいた。人々は黙として居られないもの、如く只夢中に走つたり廻つたりした。

「號外を一枚くれ！」

黃帷の紋付に緞の袴を穿いて太い鼻緒の雪駄を穿いた上品な老人は今大砲の前に立つて號外を買つた。そして其れを讀まうとしたが日射が眩しいのでヘルメット型の帽子を脱いで號外に影を落した時、銀の如き白い髪が現はれた。彼は瞬きもせず其れを讀んだ、而して其れを丁寧に四角に疊んで懐に入れ、其れから又大砲を凝と見詰めた。如何なる人と雖も此の老紳士ほど精密に大砲を見たらはなからう、彼は其の砲身から照準機から、砲架や、車や、車輪に附着して居る油や、油と泥と混濁して居る點までも見た、其れから例の裂け口のぎざぎざした斷片までも見た。丁度其れは戦死した我が子の血汐が一滴でも附着して居はせぬかと吟味するもの、如くであつた。

彼はもの、一時間も悠う大砲を見て居たが、總て帽子を被り直して停車場の入口へと歩み出した。入口は今普通旅客や出征軍人の見送り次第に雑沓を極めつゝある、綺麗びやかに装うた者は一人もないが、若い婦人の群が特に多かつた、出征兵見送の人達は停車場近くの町々に溢れて居た、元來新橋停車場はこれ等の人々を容るゝべく餘りに小さかつた、町内の代表者や、何々會の委員や、何々團體の連中は新橋の橋側から川に添うて塵芥運搬所の邊まで整列して居た。出發時間のほんの一時間前には身動きの出来ない程押掛ける。町や團體の名を書いた赤や白の旗は源平の舟合戦の如く翻へる。

萬歳、萬歳の聲に送られて汽車は間斷なしに出發する、見送り終つたもの、これから見送るものが混濁して渦を巻く。

「勝つて来いよ！」

「死んで来いよ！」

「俺も直き行くぞ！」

男同士が腕と腕とを確乎と組み合つて涙を恸へくして居るものがある、婦人ですら涙を見せる者は一人もない、若し手巾を顔に當て、居る女があるとすれば其れは既に見送を終つた歸るさの女である。



何の事はない、萬歳と慰問袋と激勵の言葉で出征者を中毒さしてしまふ。歩廊は新たに建て増したが其れは焼石に水であつた。

老紳士は静かにく人波を潜つて停車場へ入つた、彼はいろいろな階級の人達が商賣を休んで出征者のために盡くしてくれるかと思つた時涙が止め度なく零れた、彼はいかにも感謝の眼を以て群集を眺めた。其處の壁の隅に十人許の職人風の男共が蹲んで居た。

『やあ来たよ、あの御爺さんが又やつて来た』と一人が言つた。

『あれか、あれは島山さんだ』と一人が言つた。

『お前知つてるのか』

『伯爵だよ』

皆黙つた、伯爵は静かに人々の前を通つた。其處には一團の人々に取圍まれて居る若き騎兵中尉が居た。彼は丈がすらりと高く、帽子の廂の下から漆の様な黒い眼が輝いて、剃り立ての顔はつやくとして八字髭が上の方へ跳ね返つて居た。彼の周圍には若き婦人達が交じつて居たが、何れもく白粉氣なしの地味な單衣を着て居るが、大きな聲も出さず、凡てに肅しやかな處を以て見ると上流の一團である事が解る。

『やあ伯父さん』

騎兵中尉は人々を押分けて進み出た。

『おう一郎、愈々行くか』

島山伯爵は皺だらけの手を出して甥に握らせた。

『白骨になつて参ります、と言つた處で骨も失くなるかも知れませんが』

中尉は笑つた。

『愈々行くか』

伯爵は同じ事を繰返して居た、其れは恰らこれ以外には言ふべき言葉がないかの如く見えた。

『はい、伯父さんはどうか御身體を大切に』

『私はな、日本軍が莫斯科まで進撃するのを見ない中は死なんよ』

『亮雄さんと戦地で會ふ約束でしたが……』

中尉は慙う言つて急に口を噤んだ。亮雄といふのは二月前に南山で戦死した、子を失つた伯父さんの心の中はどんなだらうと思はぬ日はない、が伯父さんは涙一滴も零さなかつた。遺骨到着の日に彼は我が子の白骨を上壇に置き、疊に両手を突いて御辭儀した。

『御苦勞様でした』

これには一郎も他の人々も感激した。戦争が初まつて以來今日まで、たゞの一日も停車場へ來な



い日はない、彼は知ると知らざるに限らず、出征者を見送るのであつた。人々が萬歳を唱へる時に彼は只恚ういふ。

「御苦勞様です」

中尉が、飛んだ事を言ひ出して伯父さんの痛い傷に觸つたと氣が付いたが、扱てどうして可いか解らなかつた、丁度其の時妹の節子と父子爵が見えた。

「伯父さま、いらつしてゐるのね、私負けましたわ」

節子は、十九にもなるが小柄だから十七位に見える、一郎とは兄妹でありながら一人は五尺五寸も長く、節子は五尺に足りない。

「御母さまが悪いんですわ」

彼女は兄に身丈の事を言はれると毎も恚う答へるのであつた。彼は頭を真中から分けて後にふりはりと高く結んで居た。其れはいかにも上品で、瓜實顔に似つかはしく見えた、白地の荒い緋の帷子にオリブ色の袴を穿いて居た。

「年は老つても女には負けんぞ、それにお前は脚が短いのぢや」

伯父はにこ／＼して恚う言つた。

「あら、伯父さま酷い事を仰有るわ、今にもつと長くなりますわよ」

人々は笑つた、父の淺見子爵は只笑つて伯父と娘との問答を聞いて居た、彼は今朝から來客の應接に充分疲れて居た。伯父も其れを察して居た、其れよりも今まさに戦地へ行かんとする息子を見送る時の心持を察して居た。彼は一郎を激勵するよりも寧ろ父子爵を激勵しようと思つた。だが彼は直ぐ横を向いて黙つた。今富塚夫人が娘の眞琴を連れて團扇の中に侵入して來たからである。富塚夫人といふは日頃東京の婦人界にいろ／＼な點に於て有名になつた人である、婦人會や慈善會、赤十字社、諸種の賣市、あらゆる集會の席に彼女の顔が見えない事はない、今一つは彼女がいかなる會に於ても幹事とか委員とかの肩書を欲しがらる事で、其のためには巨額の運動費も吝まさない。其の次には彼女の肥大な容貌である、何人も彼女を一見する者は、彼女の二重にくびれた頤よりも、第一に幅廣の帯を巻き付けた腹を見るでせう、其の腹は胸よりすつと前に突き出して居るために、腰から下の着物は恰ら手桶に風呂敷を引掛けた様に筒状になつて居る、而も其の帯揚から帯の左側にだらりと垂れた黄金の鎖は一層彼女の腹を引立て、見せる。此の偉大なる腹に驚いた人々は直ぐに其れと同伴の令嬢眞琴の偉大にも驚くのであつた、無論眞琴は未だ二十歳位なので連も母には及びも付かぬが、併し何から何まで母に似て居る彼女は、當然其の偉大さを繼承すべき未來を有して居る。此の偉大な母はいかなる公の場所にも必ず娘を伴れて行く、世間の評判に依ると、其れは娘に相應しい婿を探し廻るのだと言ふが、目下飛ぶ鳥を落す富豪が婿に不自由する筈がない、



して見ると彼女は普通の階級からでなく華族に目を着けて居るのだらうと揣摩するものがある。多くの人は木綿緋で、どんなに若い令嬢でも地味な帷子位を着て居るに拘らず、眞琴は絹の裾模様、白絹に墨繪の波を畫いた帯を締め、頭には黄金色の飾り、白い鶯鳥の羽根を突差して居る。其れが例の偉大だけに特に目立つ。元々瓜實であるべき顔の質なのだが、偉大のために頬が兩方に擴大されて背後から見ても頬だけが見える、其のために左まで低からぬ管の鼻も非常に小さく見えるのは常人のために深く同情せざるを得ない、猶其の上に頗る大きな口が豊熟した顔の上に横はつて居る、無論此の口が若しこれよりも小さかつたら、非常な力を以て張り切つて居る兩方の頬のため、皮膚の伸縮が窮屈を感じるに違ひない。

「又か」と言はぬばかりに婦人達は眼を唳しくして此の母子を見やつた、そして國家多難の際に遠慮もなく華美な装をして恥とも思はない其の心根を輕蔑せずには居られなかつた。

「愈々御立ちださうでございますね、御芽出度うございます」

富塚夫人は恚う丁寧に淺見子爵に言つた。

「娘でございます、眞琴と申します不束者で」

偉大第一世と第二世は竝んで其の大きな腰を前に曲けた。

「はい、難有う」

子爵は疲れきつた聲で恚う言つた、そして令嬢の節子を見返つた、其れは恰ら加勢を乞ふが如く見えた、だが節子は見向きもしなかつた。母子は手持無沙汰に見えた、夫人は左右の婦人連に何か言葉を掛けた、そして御世辭笑ひをした。だが貴婦人連は笑はなかつた、其れは恚ういふかの如く見えた。

「此の人は何の必要があつて笑ふんでせう」

人々が冷淡なので富塚夫人は笑つた顔を眞面目に引戻すのが中々骨が折れた。眞琴はもう泣き出しさうな顔をして首垂れて居た、彼女は年が若い、相應の學問もした身である、自分の滿艦飾に對して他の人々がどういふ感情を有つて居るかは早くも胸に響いた、で彼女は人々のすつと背後に離れ、草履で敷石をこしく擦つて居た。

「伴れて來なければ可かつた」

母も漸と其れに氣付いた、華族といふものは恚くまで自分等と隔たりがあるかと思ふと、河となく情なくなつた。世の中には金の力以外に亦極めて大きな力があるものだといふ事を判然ではなかが不圖頭に浮べた。そして黙つて娘の方へ引退がつた、と此の時彼女は今入口の方から急ぎ足でやつて來る洋装の婦人を見た。

其の婦人が團樂の方へ來ると同時に、凡ての人々が動き出した。若い令嬢達や夫人連は



て出迎へた。

「先生！」

「先生！」

「御暑い事ですね」

洋装夫人は小さな扇子を以て喉元を煽ぎながら人々の挨拶を受けた、いろ／＼な陽氣な聲が急に色めき渡つた。

「あらまあ御早い事」

洋装夫人は直ぐに富塚母子を目付けて其の方へ足を運んだ。

「先刻ほどは失禮を致しました、まあ御暑いぢやありませんか、眞琴さん、手巾を御持ちですか、私の扇子を御貸し致しませうか」

「難有うございます、扇子は持参致しました」

眞琴は帯の間から象牙の扇子を出した。

「おや、私のよりも小さい、私の方が風が能く出ますよ」

先生は扇子を眞琴のと交換した、母子は吻と息を吐いた、蔑まれた彼女等は先生に依つて面目を施した。

先生といふのは奇妙な點で有名な女性である、上原雅子といへば日本の津々浦々に至るまで其名は轟いて居る、其れは和歌を善くする事と文字が巧みである事と、貴婦人間に勢力がある事と、十六歳にして良人に別れ、其れから三十六歳の今日まで獨身で居るといふ事と、女子教育に全力を盡くして居るといふ事とであるが、従つて其の若々しさと、豊かな明るい燃焼性に富んだ美貌とはいろ／＼な浮名を世間に唄はれて居る。

今では雅子を上原未亡人と稱ぶ人もなければ無論令嬢とは稱ばない、只漫然と上原雅子と稱ぶ、其處に雅子の濃艶があり魅力があり人氣の生ずる所以であるが、實際引込思案の京人形式に育てられた日本の古來習慣から蟬脱して活潑々地に交際場に立ち、浮名も立てられるが其の代りに婦人に關する一切の公共事業や政治の機關にまで立入つて曲りなりにも婦人問題を舊式な日本人の頭に浸み込ませる様にしたのは雅子が第一人者だと言つて可いのだ。

三十六歳とは言ふもの、血色がみづ／＼と櫻色に輝き、小肥りに肥つた肉付と其の何とも言へぬ程艶やかな光を有つて居る眼は、あらゆる男性の骨を溶かすだけの力があつた、曾て内閣會議が終つた後、大臣や次官達が雅子の眼に就いて大討論があつた。

「あれはもう五十を過ぎてるよ、僕等が書生時代に上原雅子の艶名を聞いたもんだ」と一人の大臣が言ふ。



「いや、あの容貌を見給へ、未だ二十代の顔だ、三十にはなるまい」と他の一人が言ふ。

「併し経歴から起算すると確かに四十以上だ、洋行したのも二十年前だ」

「併しあの眼を見ると青春の光がある」

「非凡の士は絶倫の精力を有するんだ」

實際雅子は其の艶やかな顔の色が衰へざる如く諸種の仕事に就いても決して疲勞しない力を揮つて居た。婦人界の驚異！ 若き令嬢達の尊敬の的！ 其の人が今狎れしく富塚母子に言葉を掛けただけでも母子の面目は充分に回復された。

此の華やかな群から少し離れて軍曹の服を着た一人の男が立つて居た、其と並んで五十許りの婆さんと、十六七の娘が立つて居る、前者は母のおせんで後者は妹のお夏である、お夏は幾度も洗ひ晒らした紺紺の單衣に繩の様に縋れくになつたためりんすの帯を締めて居る、最初此の三人は丁度歩廊の真中頃に立つて居たのだが、綺羅びやかな人達が来た爲に一間ばかり退却した、すると次に浅見一家の見送人が来たので更に二間ばかり退却した、お夏は娘心に華族達の鷹揚な態度や、禮儀正しい挨拶振に感服して居た、彼は身丈こそ小さいが節子姫のいかにも愛らしく美しいのを見惚れた、其れから富塚真琴嬢の立派な着物に驚愕した、そして此の世の中には自分共が住んでる世界と全然異つた世界に住んでる人があるのだと思つたりした。





絶えず集まり来る軍人には必ず何十人かの見送人があつた、勇ましい詞、萬歳の叫び、澤山の贈り物、其れは殆ど目まぐるしき許りである、だが三吉親子三人は全く三人限りであつた、無論町内の有志者が来て居るけれども、其等は他の出征者の方へ群がって居る。

彼の母は今朝からもう何にも言へなかつた、彼女は息子の三吉に言ひたい事は山の如くあるが、扱どれを先に言つて可いか、其を選択して胸に考へてゐる中に時間がすんすん経つてしまつた。そして停車場へ来てからは一層胸が硬くなつて只次第々々に鼓動が烈しくなるばかりであつた。彼はこれが我子の見納めだと思ふと涙が果しなく流れた、そして涙は水漬と混同して口の中へ注ぎ込む、そこで慌て、手拭を懐から出して顔を拭くのであつた、着物は汚なく鹽垂れて居るが手拭だけは新らしかつた。

母の心中を察して三吉も亦獨り涙を怵へて居た。

『なあお夏、御母さんの事はくれぐれも頼むぜ』

『可いわ兄さん、心配しないで行つて頂戴、私も御母さんも大丈夫だから』

お夏は決然と言つた。三吉は妹の健氣な言葉を凝と聞きながら、未だ十六や十七で慙う長せた事を言ふのに感服しながらも不思議に思つて居た。

おせんは矢張り何か最後の別れの言葉を言ひたいと考へて居たが、彼女は汽車の乗客は大抵ラム

ネを持つて居るのに氣が付いたので急いでラムネを二本買つて来た、と次に多數の人が夏蜜柑を持つて居るのを見たので、夏蜜柑を買つて来た、ラムネと夏蜜柑だけでは物足りないので笛パンを買はうと思つた。彼女は齒の禿びた日和下駄を穿いて居る、其れが歩く度にきい〜と音がする、其の度毎に例の華族の人達が不思議さうに彼女の足元を見る、其れがお夏に取つて何より恥かしかつた、彼女はお母さんが餘り歩いてくれなければ可いと思つた。

突然として親子三人が立つて居る處へ突然淺見一郎が聲を掛けた。

『やあ工藤君ぢやないか』

『はい、工藤軍曹であります、淺見中尉殿でありますか』

『一緒なんだね、可い具合だ』

『はいッ』

『來給へ、僕の父と妹を紹介しよう』

一郎は先に立つて三吉を人々の中へ伴れ込んだ。人々は丁寧に挨拶した、三吉は生れてから慙いふ上流の人々の前へ出た事はないのである、彼の心臓は鼓動した、其の謙遜な、眞面目な態度は華族連の氣に入つた。交るゝ人々は彼を激励した。三吉は何を言はれたか聞えなかつた。只彼は恐ろしい美しく上品な姫君が、いかにも同情の籠つた眼を以て自分を見詰めて居たのに氣が付



いた。

「私の兄が御一緒ださうですから、よろしく御願ひ申しますわ」

「はいッ」

彼は初めてこれが中尉の妹君だと知つた。

「叔父さん」と中尉は最後に畠山伯に言つた。

「僕の友人工藤軍曹です……これは僕の叔父畠山伯爵」

「さうか、其れは〜」と伯爵は親しげに三吉に進み寄つた。

「御苦勞様です」

母のおせんと妹のお夏は最前から此の光景を見やりながら涙を一ばい眼に溜めて居た。

「華族様が言葉をかけて下さつた」

其れだけで母の胸は躍つた。

振鈴が鳴つた、軍人は悉く汽車に乗つた、見送人は悉く窓の下に集まつた。おせんは到頭、何ん

にも言はずに終つた、彼は人々を押分けてラムネの壺を三吉に差し出した。次に新聞に包んだ夏蜜

柑、最後に鮎パンを差出した時三吉は言つた。

「もう可いよお母さん」

「でも御腹が空くと不可ないから」

「横濱までだよ御母さん」

問答の中に群集に押されて鮎パンは下に落ちた、母は慌て、其を拾うた。

汽笛が鳴つた。

「萬歳！」

天地も裂くるばかり熱狂の鯨波が起つた。汽車が動き出した、おせんは終りの一眼で三吉の顔を

群がる兵士の中に明瞭と見た、もう一度見ようとした時涙が零れた、摺硝子の奥を汽車が走つて去

つた。

富めるも貧しきも貴きも卑しきも、凡て一様に停車場の口から雪崩れ出した、そして例の大砲の

前でちり〜になつた。停車場は空虚になつた、其れは恰ら大掃除の後の様に淋しかつた。

丁度其の頃、富塚惣兵衛は日本橋の事務所の上を歩いて居た、日清戦役以來十年

の間に數百萬の財産を造り上げた彼の名を聞くものは大抵大兵肥満の不撓不屈の風采を想像するの

だが、實際は瘦せ形のいかにも弱さうな無髯の男である。只彼の風采中で特筆すべきものは、其の

大きな驚の 嘴の様な鼻である。更に特筆すべきは機嫌の可い時には右手を擧げて鼻をひと廻りく

るりと撫でるが機嫌の悪い時には右の肩を癲癩患者の様にピリ〜揺り上げる事である。彼の店の



者は其れに依つて晴雨を卜する事にして居る。

『今日は鼻か、肩か』

此日は鼻でもなければ肩でもなく、平凡な曇り日であつた。彼は今展望臺に上つて四方を見廻して居るが別にこれと言つて眼を据ゑる程のものもなかつた、どんな炎天でも彼は此の展望臺に上る事を休めない。半ば禿けかけた頭にじり／＼日が照り付けければ照り付ける程、名案名作大計畫が湧いて来るのである。

今彼の眼界に擴がる東京の市街はきら／＼光る白日の下に大活動をしつゝある、高低に起伏する幾十萬の葺、其中に目立つて數へ得べき大きな建物は幾らもない、三越は普請中である、帝劇も普請中である、廣漠として五里四方の屋根の石河原、其れは烈しい日光に呼吸を吐いて居る。淺草や本所や深川は、はつきりとして居るが、品川方面は曇つて居る、青い一帯の樹木の間に蜿蜒として南から北へ走る山の手の町々、上野の山に添うた恐ろしく不揃ひな細々した下谷の町々、其等は雲と日の加減で、遠くなつたり近くなつたりする。

『まるで反吐の様だ』

彼は恚う獨りで言つた。其れから彼は取引所の方を見やつた。

『ふうむ、皆んな狼狽へてるだらう』

彼は初めて右手を舉げて鼻を撫でた。此の日頃彼は連戦連勝である、だが旅順の抄々しからぬことは相場界の活氣を滅殺した、今日の板木城の占領も左までに相場に影響はないだらう、此の際、此の情氣を一掃すべく米の買占めをやつて人々の意表に出てやらう。これが彼の胸算である、彼は此の確信を以て四方に號令を傳へた。

『一擧に！ 一擧に！』

彼は再び鼻を撫でた、今恚うしてる中に取引所には幾千となき死骸が横たはりつゝあるのだ、激戦だ、南山の戦だ、いや其れよりも激しからう。

彼は倒れさうな仲買や、其れに附隨する將軍達が將棊倒しになりつゝある狀況を想像した。彼は生れながらにして戦好きである。人を倒す時の快感！ 其れが彼の唯一の道樂である。彼は此の快感を得るためには決して手段を選ばない。利己、貪慾、下劣、薄情、あらゆる罵詈雑言を受けながら平氣で押通す。

『憎まれるものは勝つよ』

これが彼の第一のモットーである、彼の説に依ると人に好かれる者は弱者だ、強者は必らず嫌はれるものだ。

彼はいかにも愉快らしく展望臺を歩き續けた。と彼は今しも階段を上り來る秘書の姿を見た。



「何の用だね、岡本君」

「はッ」

岡本は急いで階段を上つて御辭儀をしながら極めて敏捷に鼻か肩かを窺つた。

「只今電話がありました、鶴巻伯から」

「解つた」と惣兵衛は直ぐ言つた、「十萬圓ほど使ひに持たしてやつてくれ」

「十萬圓ですか」

「うむ、小田原の別荘を買つたんだ」

「鶴巻伯の？」

「うむ、安いだらう？」

「社長、あの別荘は精々二萬圓です」

「安いだらうと言つてるんだよ」と惣兵衛は肩を揺つた。

「はい」

「直ぐ届けてくれ」

「受取か何かを貰つて參るんですか」

「馬鹿だね君は……二萬圓の別荘を十萬圓で買つたんだよ、受取が要るかッ」

「はいッ」

岡本は首を縮めて階段を降りた。惣兵衛は籐椅子に腰を下ろして昨日鶴巻伯と會見した時の事を回想した。鶴巻伯は政界の英雄である、長閑と薩関に政權を占領された此の二十年間、彼はいつも逆境の在野黨として悪戦苦闘を續けて居る。此の逆境にありながら、宏大な邸宅、世界の珍奇を蒐めた温室、贅を極めた菊花壇の所有者であり且つ三百人を容るだけの客室をも有つて居る。此の豪壯な生活振は明治政界の大きな謎として噂されて居る、どれだけの財産があるかは何人も知らない、某實業家が後見をして居るとも言はれ、伯爵が大藏卿たりし時代に貯へたものだとも言はれて居る。

召喚に應じて行つて見ると伯爵は温室の卓子の前に腰を下して惣兵衛に言つた。

「貴公は別荘を有つて居るか」

「小さいのを二つ三つ」と惣兵衛は答へた。

「別荘は小田原が最も可い」と伯爵は言つた、そして空氣の健康に適する事、背後に箱根の絶景を負ひ、前に碧海を扼し、足柄の山、酒匂の激流……。

「憚う小田原の讚辭を並べる事約二時間に及んだ、彼は有名なる長廣舌である、談論熱し來ると片手を以て物を斬る様に振り下けるのが癖である。彼が瑞西の風景を説きヴェニス風景を説き、



「コモの湖水を説き、そして小田原に及んだ時、惣兵衛は早くも察した。」

「別荘を賣りたいんだな」

惣兵衛は一時間の意屈を漸と怵へた、彼は一言も言はなかつた、そして長廣舌が終ると共に言つた。

「御前、手前は一生の名譽として御前にあやかりたうございます」

「恚う言つて十萬圓に賣つてくれと申込んだ。」

「二萬圓で譲らう」と伯爵が言つた。

「どう致しまして二十萬圓の價値でございます」

話が決まつた。二萬圓で賣らうとした伯爵は十萬圓に賣れたのを見て心中に微笑した。

「乃公の辯舌が八萬圓の價値がある」

二萬圓でも高過ると思ひながら十萬圓に買つた惣兵衛も亦微笑した。

「これが何十倍になつて懐に返るかな」

惣兵衛は堪らなく可笑しくなつた、たつた二萬圓のものを賣るために、日本第一の政治家が二時間も饒舌りつゝけた。

「はッくくく」

彼は聲を出して笑つた。と此の時階段の中段から鳥の様な帽子がひよつくりと現はれた、一段つ上り來るに従つて婦人の姿が判然した。其れは上原雅子であつた。

「おや先生！」

惣兵衛は起ち上つた。雅子は嫣然して身體を眞直になし、

「まあ可い阱めですこと」

「此方へ御掛けなさい」

惣兵衛は天幕の下へ椅子を移した。

「いかゞでしたらうか」

「其の事で伺ひましたが、まあ涼しい風」

雅子は眼を細めて恍惚とさせながら、

「今日、奥様と御嬢様に停車場で御目にかゝりましたが」

「はあ、さうですか」

惣兵衛は雅子の顔色を讀む様に見詰めた。

「あの一件は？」

「其れですがね、大概さんでは大變に乘氣になつていらつたのですよ、眞琴さんなら大變に學問



が御出来になるし、御儀も完全でいらつしやるんですから、是非御賞ひ申したいと申しましてね」  
 「其れは承はりました、そこで最後の御返事は如何でございませう、あの通りの顔ですからな」  
 「い、え富塚さん、大槻伯爵家では凡ての點に於て喜んでいらつしやるですよ、そこでね、鬼も  
 角目白の春木侯爵に御伺ひしなければなりませんので」

「いかにもな」

「御伺ひなさいました處が……でございませう、侯爵が御承知なさいません」

「手前共の娘風情は不可いと仰有るんですね、御尤もです。平民ですからな、あんな顔ですからな、御尤もです」

惣兵衛はいかにも打萎れて言つた。剛愎倨傲を以て名ある彼も、娘の失望する顔を思ひ浮べると、口惜しさと可愛さが胸に溢れて来る。

「い、え、さういふ理由ではございません」

雅子は氣の毒さうに云つた。

「ではどんな理由で」

「侯爵の仰有るには、富塚は長州人でないぢやないかと……」

「長州人！」と惣兵衛は飛上る様に驚いて言つた。そして烈しく肩を揺つたが、直ぐ靜かに言つた。

「能く解りました、先生！ 御蔭様で富塚は日本一の果報者になりますよ」  
 彼は右手を高く舉げて其れを鼻に當てた。

貴族

浅見一郎が出發してから十日目の午後、浅見家の大廣間に主人浅見武文子爵が客椅子と卓子とを數へて居た、瘠せて長い胴に太い鼠色の兵子帯を巻き付けて居るのは恰ら、二つに折れさうな胴を繋ぎ留めて居る様に見える、彼は右手を顔の眞直の處へ持つて来て、一三三四と廊下に近い右の方から數へる、だが彼は其れを數へきらぬ中に他の妄想に驅られるので又數へ直さねばならなかつた。

「黒い方が二十四、腕椅子が六つ」

彼は恚う言つた。其れから其處の隅に積んだ二つの大きな箱に目を付けて珍らしさうに中を覗き

込んだが直ぐ向き直つて再び椅子を數へ初めた。

「矢張り二十四だ」

彼は新調の時には三十脚もあつたのが、何時の間にか六脚も減つて居るので妙に淋しさを感じた。其れから彼は卓子を數へた、長卓子には冬の卓子掛が掛けてある、青い輪廓の總がところ／＼千切れて居るのを夫人の努力で漸と絲で縫ひ留めたものの隠さうとしてるだけ特に目立つ様な氣が



する、敷物も冬の絨毯で扉口やベランダの入口の方は病氣の犬の背中のように毛並が脱けて地肌が露はれる。どれもこれも昔の贅澤が偲ばれる高貴なものであるが、其れが却つて今の惨めさを物語るかの如くである。

元來恠ういふ事は氣に掛けなければ其れで済むのだが、淺見子爵は見るもの毎に氣に掛けるのであつた、彼の考では、今日の來客のために涼しさうな夏向の敷物や卓子掛が欲しいのであつた。二十四の皮の椅子に補助として安樂椅子や籐椅子を置くのも不本意である。特に今日は婦人客ばかりである、細かい處に眼が届く婦人達は、この有様を見て何と言ふだらう。

「節子！ 節子！」

彼は窓の下で美しくい聲で唄ふ節子の方を向いて言つた。

「なあに？ 御父様！」

「花を切つて来てくれ、ダリヤをどつさりな、どつさりだよ」

「御活けになりますの？」

「卓子が淋しいから」

「はい、かしこまりました」

子爵は隅々の小さな丸卓子の位置を少しばかり變へて見た、それから腕椅子に腰を落して暫らく

考へた。彼は近々に起るべき遼陽の大戦を想像したのである、そして此の大戦には一人息子の一郎が必らず戦死するだらうと考へた。戦死は元より覺悟の前だが、併し彼には未だ嫁も持たさずになせるといふのは餘りに可哀さうだ、いや嫁を持たないから可いのだ……だがもう少しは生かして置きたい……其れとも。

● 妻の前や娘の前、元より他人の前では國家のためだから一人息子は惜しくないと公言して居るもの、孤影悄然ともの淋しき折には腹の底から涙が湧き出る、一郎が出發してから十日、只の一日も獨りで泣かない事はなかつた、獨りで苦しむ事は多數と共に苦しむよりも苦しい。

此の苦しみと共に更に彼を苦しめる一つの問題があつた、其れは彼の借財である、豪壯な邸宅を構へた華族の裏面にも普通の人と異ならざる煩はしき事件がある。其れも彼自身の借財なら未だ諦めやうもあらう、借財の大部分は他人の義理で判を捺した連帯のものである、而も其の費途は大方政黨の運動費に使はれたり、怪しげな炭鐵の古穴に投げ込まれたのである。無論子爵にも多少の慾が無いでもなかつた。

抑々の最初は彼が長州系の内閣の時選信大臣に推薦されたのが病付であつた、此の内閣は僅か半年で瓦解した、だが瓦解しただけでは済まない、後の始末から、同志の挽回運動、一味の黨勢擴張其れには彼も回避する事が出来ない、實を言ふと、善人で正直で氣が弱くて義理堅い淺見子爵は政



治の舞臺に立ち得る人ではないのだ、だが總辭職後の大命が乾侯爵に直下したので、半日の中に顔觸を揃へねばならぬ場合ではあり、子爵その人は政黨政派に關係がなく、左まで手腕を認められない代りに、左まで敵を持たない温厚の君子なので、恚ういふ人は貴族院を牽制するために必要であつたかも知れぬ。

兎も角乾内閣のために政界へ引張り出された彼は其れが腐れ縁で今桂公の内閣になつても、何かと昔の同志の相談に預からねばならなかつた、そして或時人々が集まつて、今後の政治は政黨内閣でなければならぬといふ議論が出た、そして其の準備をしよう、だが何を言つても金が先だ、其れには天草の炭礦を手に入れて軍資の根據にしようぢやないかといふ事になつた。此の炭礦に費やせる資金は八十萬圓、其れが全然駄目であると解つた時には五十萬圓の負擔が子爵の肩に乗つて來た。漸やく其れを始末したものゝ、扱て腐れ縁が蓮の絲の如く何處までも引く、五萬、十萬の連帶は何時も絶ゆる事がない、人の好い子爵は根氣能く其れを引受けた、實際人にもものを頼まれ、ば厭と言へない性分である、執事に一任して自分は成るべく立觸らない様にして居るものゝ、政界を馳驅して三寸の舌で飯を食つてゐる人々は其位の障壁は何でもない、子爵を擧にするには直接面談に限ると何人も能く言つたものだ。

今差當つて困つて居るのは僅かに五萬圓の借財であつた、だが殆んど賣り盡した彼には五萬圓を調達するには世襲財産に手を着けるより他に策がないのであつた。さういふ事は第一、陛下に對して申譯がない、第二に世間に對して面目がない、第三に華族の體面を損ずる。

彼は立つて室をぐる／＼歩き出した、そして再び例の大きな箱を覗いた。箱の中には赤い帽子を被つた黒ン坊が白い目を剥き出したり、頬冠りした猫が扇を持つて踊つたりして居る、其れと並んで指で弾けば十間も飛ぶ兎が居たり、柿の木に登りかけて居る猿が居たりした、人形や御殿や竹馬や汽車や、あらゆる玩具がぎつしり詰まつて赤や緑や黄や金色や銀色をきら／＼させて居る。彼はそつと覗いたまゝ、ベランダへ歩み出た。其處には夫人の恒子が今古い簾を日向に擴けて居た。

「一體、私の家でこんな事をやるのは無理だつたな」と子爵は言つた。  
 「えい、私もさう思ひましたけれど」と夫人は其の小柄な身體を階段から半分昇せかけて子爵の方を向いた時、眩ゆさうに眼を細めた。

「折角梅園さんの御言葉でしたから……一郎が出征して私達が淋しからうと思つて梅園さんの夫人が、賣市の準備に私の家を貸してくれと仰有つたんでせう、あの方はなか／＼思ひやりが深くて被居るから」

「さう言へばさうだが併し客室も大分古くなつたしな、其れに柵が無くとも多少食事の準備もしなけりやならんからな」



『でも貴方』と恒子夫人は微笑して言つた。『私の考へでは時節柄ですから大して御構ひしない積りでございますよ』

『さうかね、敷物や卓子掛も時節柄だからこれで可いかね』

『可うございませうとも』

二人は顔を見合せて笑つた。何かにつけて大袈裟に考へるのは子爵の癖であつた。出征軍人慰問のための賣市を開くべく、今日から三日間、貴婦人達が此處に集會していろ／＼な製作をやる事になつて居る、花々しい仕事だけに子爵は自分の體面を損ぜない様に優待してやりたいと思つた。

『菓子に果物に珈琲、其れで可いか』

『宜しうございます』

『其れから晩の食事は？』

『軽い洋食で……五品位で』

『其れで可いのか』

『宜しうございます』

『器は』

『三十人分位なら揃ひます』

『其れは可かつた』と子爵は言つた。暫らく沈黙の後再び、

『其れは可かつた』

子爵は上履の儘庭へ降りた。照り付ける日が暑いので彼は廊下に踏み戻つて裏庭へ出ようとする

と其處に節子が胸一ぱいにダリヤを抱いて入つて來た。

『日中に切ると駄目ですわ』と彼女は言つた。

『今晚だけは保つよ』と子爵は言つた。節子は自分の抱へたダリヤを下目に見やつた、ピオニー種の大輪の白は彼の口元まで届いて居た、カクタスやボン／＼、紫や赤、黄と赤の絢れ咲き、濃厚な色彩が彼女の肩から胸に輝いて居る、彼女はいかにも後生大事に肩に力を入れて両手を柔はりとさせて居た。

彼女が去つてから子爵は急に又何事かを思ひ出したので聲を掛けた。

『節子！』

『はい』

『電話を掛けてね、小柴さんと呼んでくれ』

『小柴さん？ 新聞社へ？』

節子は花を抱へながら振向いた。



「あ、直ぐ来て下さいってね」

「いやね御父様」と節子は言った。

「何がいやだ」

「だって、あの方は兄さんが出發の時に見送りにも来ないんですもの」

「用事があつたらう」

「でもね、あの人は曾日緋の羽織を裏返しに着て来た事よ」

「氣が付かないんだ」

「言葉が悪くて、行儀が悪くて、お酒を飲むから厭よ」

「はッ／＼／＼酷く嫌はれたもんだね、電話はいやか」

「いやぢやないけれども……何新聞でしたっけ」

「東洋新聞だ」

「お崎に掛けさせますわ」

「不可い、秘密なんだからね」

「ぢや私掛けますわ」

節子はふり／＼して去つた、子爵は獨り笑つて居た。彼は何といふ事なしに小柴といふ青年が好き

であつた。無論小柴は彼の遠き親戚であつた、小柴の祖父は維新の際の洋學者で子爵は其に就いて洋學を學んだ、其の子の啓明といふ人も學識があり、曾て地方の縣令をした事もあるが、憲法發布の際天下擧つて自由民權を謳歌した時、獨り斷々乎として君主獨裁政治を主張した、そして一生不遇で死んだ、其の子は小柴敬三である。

節子が電話を掛けた時小柴敬三は未だ出社しなかつた、彼は芝山内の自分の宅で漸と目を覺ましたばかりであつた。

彼は眼を覺ますと蚊帳が既に外され、縁側に日が満ちて簾が風に動いて居た。

「何時ですか御母さん」と彼が聲を掛けた。

「もう二時ですよ」

「今日も休まうか」

「不可ません、お前は此の頃怠け過ぎますよ」

母は屹と怒う言つた。敬三はにやりと笑つて尻を捲つたま、兩脚を二本天井へ向けて直立させ、其の反動で以て蒲團の上に後向きに坐つた。そして壁の方を見やると其處にフロックコートが吊されてある。

「やあ、しまつた」



彼は思はずも憊う言つた。今日は春木侯爵を訪問して露佛同盟の効果に就いて質問しなければならぬのであつた、佛蘭西が頻りに露西亞を聲援して居る、其れに對する牽制運動として日本は英國の手を藉りて何か難題を吹掛けさせる必要がありはしまいか。

彼はもう一度フロックコートを見やつてにやりと笑つた。

「乾きましたかね御母さん」

「まだ乾かないよ、乾く間がありやしないぢやないか」

「なるほど」

親友淺見中尉の送別會で眼にものが見えぬほど飲んでの歸るさに道路普請の穴に陥り込んで泥の中に其の儘朝まで寝込んでしまひ、漸やく扶け起されて家へ歸つたもの、腰の打撲傷に起つ事が出来ず、遂に停車場へ見送りにも行かなかつた。千載の不義理だと思つたもの、驕馬も及ばざる悔であつた。フロックコートは母が丁寧に洗つてくれた、漸やく乾かして出社すると其の夜又々大酔して泥だらけになつた、昨夜の泥酔は第三回目で、勿論毎度の事ではあり、昏くもあつたのでフロックは裏を剥がして夏向きにしてしまつた、其れでも母の苦心は一方ならずである。不遇に終つた彼の父は、満腔の不平を酒に漏らして朝から醜然として居たものだ、其の世話だけでも容易でなかつたのが、今又一人息子が父に劣らぬ豪酒なので母はいつも溜息を吐いて言つた。

「私は前の世で酒倉の鼠であつたに違ひない、其の罰で以て今二代とも酒飲みで苦勞するのだ」  
敬三は今二十七歳である。

「三十になつたら禁酒しませう」と彼は言つた。母は彼が三十になるのを待つて居る。

「さあ早く行かないと晩くなるよ」と母は次の室から聲を掛けた。

「はアやく起きねば晩くなる、着物を着かへ帯を締め……」と敬三は唄ひ出した。毎もの事とて母は相手にならぬ、そこで敬三は、再びころりと寢轉んだ、何だか頭が重く胸がむか／＼する、一合でも迎酒を飲まないと生きた氣がしない。

「御母さん、どうも頭が變だ」

「社へ行くと癒ります」

「胸がむか／＼してね」

「社へ行くと癒ります」

「朝飯は食ひたくありませんよ」

「食はずに置く方が可いでせう」

「何か其の流動物が欲しいですな」

「麥湯が冷やしてあります」



「話せねえな」

「社へ行つて御話しなさい」

「猛烈だなあ」

敬三はけらけら笑つて起き上つた。女中のお八重も臺所で笑つて居る。敬三は顔を洗ひ、澁々ながら飯を済まして家を出た。母の幹子は吻と安心した様な顔で見送つた。毎晩酔うて歸る息子を介抱する事と、朝には無事に出勤させる事が彼女の義務だと信じて居る。其の頃新聞記者間に自轉車が流行つた、自轉車が日本へ實用向として用ひられてから間もない時である。車夫を抱へて置くよりも此の方が經濟向きである。いつも酔うて自轉車に乗るんだから堪らない。

敬三が自轉車を飛ばして社へ行くと、社では彼を待ち受けて居た。編輯にある者は毎も彼を歓迎するのであつた、彼の突飛な露骨な談話はいつも室内を賑はした。實際彼は天衣無縫であつた。取留めのない馬鹿氣た話をして人々を笑はせるが、併し彼の心は別に働いて居た。

「彼奴は曲者だぞ」

恚ういふ人もあつた、錐を獲中に織むるものだといふ人もあつた。彼は毎も高聲で話し、笑ふ時には大きな口を開いて天を仰ぐのであつた。最も彼を知つて居る者が二人あつた、一人は騎兵中尉の淺見一郎で今一人は文學士子爵小南浩であつた。軍人と文學者、其れが政治専門の新聞記者の

親友である。

或日淺見中尉が彼に恚う言つた。

「大政治家にならうとしたらお前は不得要領術を學ばなきやならん、お前は鋭過ぎるぞ、もつと馬鹿になれ」

だが小南文學士は恚う言つた。

「其んな事は不可ん、鋭いものは益々鋭くなれ」

二人の説は衝突した、敬三は笑つた。

「詰り俺は鋭くもなければ馬鹿でもない中途半端の人間だからお前達がそんな事を言ふんだらう」  
だが彼は兩友の言は二つとも眞理だと思つた。實際彼は自分の性格の中に二つの異なるものがある事を知つて居た。彼は非常に雄大なるものを好むと共に非常に繊細なものを好んだ、一面には豪傑肌の磊落な性質であるが一面には極めて神經質であり、一面には道德心が堅固であるが一面には享樂主義者であつた、政治家でありながら哲學者や軍人を友としてのものも此のためかも知らぬ。彼は折りく此の矛盾した性格に驚き、恐れもし反省もした。哲學者の小南は屢々彼に言つた。「酒を飲むなよ、酒は第二の性格を造るぞ、酔ふ時の人格、醒めた時の人格、其ればかりでは濟まない、其の中間にぐらくして居る人格が新たに出来る、そこで三重底の人間が出来るぞ」



敬三は多くの先輩に依つて自己を改造しようとして企てた。新聞記者としての彼は其等の名士に接觸すべく最も都合が好かつた。彼の父の名は亦先輩の間に知られて居たので彼は名士の子として待遇された。

彼は春畝伯に屢と會つた、そして其の精悍な氣を尊敬した、丁度其れは織田信長に似て居ると思つた、早稻田伯邸へも屢と訪問した、奔放自由で大量な氣宇は恰ら信玄の如き人だと思つた、彼は學堂の譁巖に打たれ、木堂の辛辣に驚き磐洲の混沌に服し星亨の親分氣質を愛し、青洲の温厚に傾倒した、西郷木戸大久保岩倉等の英傑の歿後、日本を荷うて立つた是等の諸先輩に接近し得ただけでも彼は幸福を感じた。政治記者たる彼には政治以外の偉傑が見えなかつた、文學、宗教、實業、科學の方面にも恐らくは彼等に劣らざる偉傑があつたに違ひない、だが彼は其れを知らうともしなかつた。

多くの英傑に接近しながらも彼の腹の底に敢然として容れ難きものがあつた。

『もつと立派な人物がありさうなものだ』

彼は何人にも直ぐ感服するが、又何人にも感服しないのであつた。彼は身丈が高い方ではなかつたが剣道や柔道で鍛へた骨格は逞しく發達して足踏がいかにも確乎として居た、面長で眉と眉の間が狭くて氣短かさうに見えると共に其の眼には子供の様な無邪氣さがあつた。其れが多くの人に好





かれる點である。

彼は電話の傳言を聞いて直ぐ淺見子爵邸へ向つた。一郎を訪問する時には彼は毎も裏門から庭を通つて洋風の書齋に入るのであつた、庭の徑の兩側は花島で四季ともに花が絶えなかつた。彼が書齋の窓の下を通る時其處で節子が一人の男と庭球をやつて居た。

「やあ〜」と彼は聲を掛けた。「やつてらね、御轉變さん」

節子は汗ばんだ額の下から睨む様に敬三を一瞥した。相手の紳士は今ラケットに球を載せて其れを打ち出さうとせす、此の不意の鬨入者を見やつた。

「御無沙汰をしました、兄さんから手紙がありましたか」

「いゝえ」と節子は出發の際に見送りもせぬ者が、故意らしく消息を聞く権利がないと思ひながら黙つた。

「さあ、ゼロワンでしたね」と若い紳士が促す様に言つた。新らしい麥藁帽に、きちんと身に付いた白い洋服の上衣を脱いで、細い洋袴は脚を長々と見せ、白い靴を穿いて居た、白い靴は頗る珍らしかつた。色は淺黒いが、願が長く額が廣くて耳から上の髪を短く刈つて長い毛は額の上に美しく波を織つて居る、其れはいかにも新式な貴公子である事を表す。

節子は其れに一寸會釋したま、矢張りテニスを續けようと思はせすに敬三の顔を見成つた。彼女は

兄が最早や戦線に入つたか否かを敬三に訊きたいのであつた、それから彼女は兄に何を送つたら一番喜ぶだらうといふ事も訊きたかつた、更に一步を進めて兄の一郎と敬三と小南文學士と自分と四人で此の庭で撮影した寫眞の焼増を強請りたいのであつた。だが彼女はどうしても其れを言ふ事は出来なかつた、秋草模様のメリンスの單衣の元祿袖で彼女は額の汗をちよいと拭きながら再び敬三を見詰めた。

何といふ事なしに敬三が嫌ひである、其の不遠慮で粗暴で人を子供扱ひにするのを見ると、一分間でも同席する事が出来ないのであつた。今彼女は劈頭第一に御轉變と言はれた事が頗る自尊心を傷つけられた、彼女は到頭我慢して敬三には何も言ふまいと決心した。で彼女は袴の裾をさつと擴けて紳士の方へ向き直つた。

「ゼロワンでしたね」

「さうです」

細い透明な上品な聲で紳士は言つた。そして敬三に會釋して、

「どうです、御入りになりませんか」

「三人ちや出来ませんわ」と節子が言つた。

「交代にやりませう」

細田



「此の方は御隣の垣根を越してばつかり居るから駄目よ」  
節子は憎らしげに言った。

「猛烈々々、今日は風向きが悪い」と敬三は笑ひながら其處を去つた。愆ういふ事は決して珍らしくない、節子は毎も兄の前で敬三を罵倒した、二人が寄ると喧嘩をする、敬三はいつも子供扱ひにして押揃ふのだが、節子は真剣であつた。彼女は小南文學士を善玉と稱し、敬三を悪玉と稱して居た。

敬三は節子の烈しい氣性と飽までも貴族的な矜持の強い上品さを愛した、彼は貴族的な事や英雄的な事が好きであつた、そして節子と小南との結婚を望んで居た、小南の理性的な静かさは節子の熱情に依つて調節されると絶好の夫婦になれると思つた、小南子爵も亦日増に募る愛戀の情を胸に藏めて居た。

「僕が死んだら妹の事は頼むぜ、小南さへ厭でなければ」

これが出發の前日一郎が彼に遺した言葉であつた。

彼は今友の書齋の窓の下を通つた、不圖顔を擧げると其處に子爵の姿が見える、藤の椅子に腰を掛けて一心に壁を見詰めながら何か考へ込んで居る、十日前に比べると一層白髪が深くなり、首筋がけつそり瘦せて肩の骨が尖がつた。

「一郎君の事を考へてるんだ、無理もない」

敬三は愆う思つて扉口に廻つた、彼が扉を開いた時子爵はちらと眼を向けた、が眼だけが働いて意識が伴はない人の様に黙つて居た。

「御機嫌よろしう」と敬三は言った。

「あ、小柴さん」

子爵は漸と氣付いて椅子を薦めた。普通の挨拶が交はされたが其れは一向氣乗りのせぬ聲であつた。

「御電話でしたから……子爵、何か急用でも御出来になつたのですか」

「いや、君」

子爵は言ふべきか言ふべからざるかに迷ふもの、如く敬三の顔を見詰めた、何とも言へぬ淋しい微笑が口元に浮んで居た。

「貴方だから話すがね」と彼は漸と口を切つた。

「節子の事ぢやが、あれの縁談が急に持上つたのでな、一郎が出立の時にも妹の事は萬事小柴君に相談して下さい、僕だと思つて相談して下さいと言つたもんだからな、御迷惑でも一つ……」

「子爵、僕の様なものでも貴方の御役に立て、下さるなら僕は親友に對する義務の上からも又僕個



人としても非常に光榮に感じます』

敬三は嚴肅な氣に打たれて言った。

「難有う／＼、私も貴方はさう言つてくれるだらうと思つて居た」と子爵は首肯いて、「私も思案に餘つて居る、詰り申込は幾つもあるが差當つて急いで居るのは栗津萬藏といふ男な、さうさう實業家だ、あれの長男で篤彌といふのがある、此の春倫敦から歸つて來たんでな、其れが是非にと恣う言ふのぢや、そこでな……」

「其れは不可ません」と敬三は直ぐに言つた。「子爵、貴方は其の本人を御存知ですか」

「あゝ見た、今日も來て居る、今テニスをやつて居るぢやらう」

「あのハイカラですか」

子爵は眉根を寄せて足元を見詰めた。

「貴方は口が悪過ぎるな」

「失禮しました、だが子爵、節子さんには既に立派な良人として一郎君も僕も見立て、置いた人があるのです」

「其れは？」

「小南子爵です」

「うむ」と子爵は何か恚う頭の底に考を落着かせるかの様に首を低れたまゝ言つた。

「一郎から聞いた、だがな、何處の家庭でもいろ／＼な事情があるものでな」

「其れはどういふ事情ですか、僕に御話し下さる事が出来ないでせうか」

「話せない事はない」と子爵は漸やく顔を擧げたが苦惱の色が明晰と表れた。彼は觸るゝ事さへ恐れて居る傷に小刀を突込む様な氣持で言つた。

「小南へは與られんのぢや」

「なぜですか、なぜ、なぜ、子爵、なぜですか」

敬三は大きな石で胸を潰された様な氣がして叫んだ。さうして急に其の無様を耻ぢて黙つた。

「春木侯爵と小南子爵とは政治上の敵ぢや、侯爵は毎も金曜會に惱まされてるからな」

「春木さんが小南の御父さんと政敵だからつて其れが貴女の令嬢と何の關係があるんですか」

「其處が即ち」と子爵は長大息した。

「栗津は侯爵から紹介された人だ、小南は侯爵の敵だ、其れで御解りだらう」

「いゝえ解りません」と敬三は言つた。「政見と結婚とは別個のものぢやないでせうか」

「貴方の議論は正しい」と子爵は云つた。「だが議論は議論だ、私が娘の縁談を決めるにも先づ貴方に相談する、其れから私は侯爵にも其の他の元老や親戚にも相談した上で決めなきやならんのだ」



「其れは御間違です、貴方は貴方の一家の事に就いて他から干渉を受けるといふ法がありません」

「さうはならんのぢや」

「ならん事はありません、子爵、僕は一郎君に代つて其の事はどうしても反対申し上げます、小南は當代に得難き人物です、彼は哲學専門の文學士ですけれども彼は政治でも經濟でも科學でも凡てに通じて居ます、彼の學識よりも彼の人格、彼の高い潔い純な理智に明らかかな、そして堅忍不拔な、そして友情に篤い點は僕のみならず一郎君も常に敬服して居る處です、あの男の他には節子さんの良人とすべき人は断じてありません、僕は信じて居ます、其れでも貴方は……」

刻々に迫り来る情熱は敬三の唇から炎の如く迸り出た。

「難有う、難有う」と子爵は手を舉げて抑へる様に言つた、そして其の手を其の儘に首を一つ二つ掉つた。

「小柴さん、能く解りました、だが私の言ふ事も聞いて下さい、私は今破産しかけてるんぢや」

「子爵！」

敬三は躍り上つて椅子を離れた、彼は夢ではないかと思つた。

「破産しかけてるんぢや、一郎には言はなかつた、出征しようといふ一郎に、こんな事は聞かしたくなかつた、私は父祖から受けたものを失ひ、私の築き上げた名譽を失ひ、同族の體面を汚す事に

なると私は……」

言葉はたと止まつた。子爵の唇は結んだまゝ、顫へて居た、敬三は何か言はうとしたが何にも言へなかつた。

破産！ 其れは一郎すら知らなかつた事である、家を失ひ名譽を失はんとする子爵の身になつて考へれば何れのものをも犠牲にして此の難を逃れねばならぬ場合だ。

併し破産を救ふために、富豪の家に娘を嫁入らせるといふ事は果して正しい事であらうか。

華族！ 世の中にこれほど憐れなものはないからう、一旦の榮譽ある冠を戴いたが最後、朝に夕に心を配り、其の體面を保つために忍び難き事をも忍ばねばならぬ、特に元老と稱する人々の枝に繋がる華族は嫁を貰ふ事や婿を選ぶ事まで一々元老の指圖を仰がねばならぬ、我が家庭にして我が自由にならぬ、これは何といふ事だらう。

だが此處は子爵の踏張るべき處ではあるまいか、節子さんの一生を犠牲にしてまでも實業家の保護を仰ぎ、老侯爵の意を迎へねばならぬといふ事はないのだ。此の誤れる道から救ひ出すのは自分の義務ではあるまいか。

敬三は猛然として顔を擧げた。が、此の時彼は子爵が擬と正面の壁を見詰めて居るのを見た、壁には新たに大きな寫眞が掛けられてある、寫眞は騎兵中尉の服裝をした一郎の姿であつた、子爵は



其れを見詰めてる中に滴々として涙が膝に零れて居た。敬三は再び勇氣を失つた。

「子爵」と彼は暫らくあつて言つた。「もう少し御猶豫を願ひます、僕に考へさせて下さい、貴下も今少し……」

「御尤ぢや、私も猶考へて見よう」

子爵は慙う言つた、敬三は辭して扉を出ると向ふの座敷に婦人達の美しい聲々が聞えた、其れはいかにも陽氣に邸内に響いた、庭には日が輝いて、明け放した窓々から艶やかな髪や媚めいた襟足や、人を誘ふ様な水々とした横顔などが見えた。少しづつ間を置いて「わあつ」といふ笑聲が漲る。「子爵は負ひきれぬ負擔に苦んで居る、向ふの人達は何にも知らずに笑つて居る」

敬三は慙う思ふと人生の皮肉が此の邸内に相闘つて居る様に思はれた。彼は足を返して廣間へ行つた。

「さあ達磨さんは何誰？」

梅園侯の夫人は面白さうに箱の中から玩具を一つ／＼出して受持ちを決めて居た。

「此のニヤア／＼に日の丸の旗を持たせて下さい、其れから此の御狸さんはちよいと御差合ひの方も御座いませうけれども煩冠りをさせてやつて下さい」

笑聲はどつと起つた、敬三は婦人達の中から節子を探し當てた、節子は袂の長い矢絰の上布に付絞の帯を締めて粟津と竝んで箱根細工の黒ン坊に帽子を被せて居た、彼女は今入つて來た敬三を見てふいと横を向いた。

「何んにも知らないのだ」

敬三は慙う思つて胸苦しくなつた。

婦人の集り

淺見子爵夫妻が心配したに拘はらず賣市の準備は至極順調に運んだ。誰しも敷物に穴がある事や窓掛は冬ものである事や、又椅子が揃はない事などに氣を留めるものはなかつた。慙ういふ質素な設備は時節柄とて却つて奥床しく思はれた。無論子爵家が破産に瀕して居るなどとは誰が知り得よう。

もと／＼準備會を子爵邸にしたのは梅園侯爵夫人の思付であつた。あらゆる華族を通じて、能く下々の事情をもしり、又何かに付けて同情の深いのは梅園夫人であつた。身元を洗へば泥水の中に育つた女性だが、維新の革命時代、暗に刀刃が簇り立つ間に處して意中の人梅園孝介を助けて辛苦を共にした烈婦傳中の女性である。最早や六十にも近い身體だが顔の色は水々として頭の腦天に怪しげな束髪を載せて居る。平和の時代には外出嫌ひで専ら家庭に引込み、一錢一厘の臺所の經濟



やら訪問客の應對、今は人の妻となつて居る一人娘の教育や、凡て内輪向の用事に没頭して居たのだが、戦争が始まつてから家庭一切の事を抛つて婦人會や赤十字社、小さな町の相談會にまで勞を厭はずに駆け廻る、これには何人も驚異の眼を睜るのであつた。

淺見子爵がたつた一人の息子を戦争に出してやり、どれだけ淋しい思ひをして居るだらう、其れを慰めるために賣市の準備會をやつて少しばかり氣を紛らせる様にしよう。これは梅園夫人の考であつた。夫人は子爵夫人恒子としてみみ／＼語りたいたいと思つて居た、だが恒子夫人は勝手に夢中になつてなかく出て来ない。彼女は出征した息子及び其の他の軍人のために、人々が手づから玩具を作つたりしてくれるのを見ると感謝の念が胸に溢れた。そして何卒して人々を満足させたいものだと思ればかりを氣にして居た。最初に珈琲を出したのだが、其れに口を付けた人もあり其の儘に卓子に載せた人もあつた。そこで恒子夫人は非常に濟まない様な氣がした、此の暑いのに珈琲を出したのは失念であつた、慙う思つて彼女は急に平野水を取りにやつた。が二十幾つの洋盃が揃はないので、どうしようかと思案に暮れた、其れも漸く似つかはしいもので補充する事が出来たと思つたら、來客が今一人殖えた。其の上に節子が篤彌を伴れて群に入つたので、都合三つの洋盃が不足になつた。

慙ういふ事で彼女はひどく氣を揉んで居た。彼女は折り／＼客室へ行つて眼で以て頭數を調べて

來た、そして又途方に暮れた。

客は誰も彼も陽氣に賑はつた。梅園夫人はなるべく人々に氣兼ねをさせない様に、すつと隅の方に下つて一同の働き振を見やりながら獨りにこ／＼して居た。彼女は女ながらも慙う若い淑女達が銘々に涼しさうな單衣を着て艶々とした髪を並べて仕事をして居るのを見るのが好であつた。彼女が慙ういふ仕事に奔走したのは丁度十年前であつた。日清戦争！其れは今よりすつと凡てが不完全であり、又婦人達の運動も緩慢であつた、だが十年後の今日は殆んど一令の下に全國の婦人が活動し初めた。たつた十年、其れだけで世の中が變つて來た。彼女は慙う考へる中に維新の革命を思ひ出した。京都の町々は血腥かつた、鳥羽、伏見、薩長の軋轢、勤王と佐幕、彰義隊、物騒がしき巷から巷へと走り廻つた彼女の當時は僅かに十八、結綿に鹿の子を掛けて黄八丈の着物を着て居た自分の姿がくつきりと眼に浮ぶ、赤ら顔の土佐侍に言寄られて火鉢の灰を目潰しに二階から飛降りた時の胸の動悸が今だに脈を打つ。

若き人々の美しい手が紅黄緑紫の玩具の間に動くのを見詰めながら、侯爵夫人は恍然と自分の若い姿を描いて居た。

縁側に近く一番涼しい場所を占領して居る一團は悉く令嬢達ばかりで、たつた一人河内子爵の老刀自が交つて居るだけであつた。刀自は五十ばかりで老人といふ程でもないのだが耳が少し疎いの



で年よりも五つも老けて見える、此の人はどんな會でも決して缺席する事はない。恐しく生真面目で洒落が解らない。若い人達は彼女を綽名して『てにをは』の小母さんと稱して居る、何かに付けて『てにをはが合はない』とか『てにをはに合つて居る』といふのが刀自の癖であつた。

だが、若い人達は決して刀自を輕蔑して居るのではない、如何となれば刀自は多田親愛先生の極傳まで許されたといふ程の能書家であり、又宮中の御選歌が始まつて以來今日までの御製は無論の事、庶民の詠進まで一つも漏らさず記憶して居るからである。

『其れから其の夫人は甘い／＼言葉で以て將軍に謀反を勧めますのよ』

『まあ憎らしい事ね、將軍が背かなかつたでせうね』

『えい、最初の中は……』

鳥湯醫學博士の令嬢日出子は昨夜本郷座で見た芝居の梗概を語つて居た。此の一面は紙攤を作つて居たのである。日出子の見たのは『王冠』といふ劇で、佛國有名な作家サルドウの作である。將軍大ミツシエルが千軍萬馬を馳驅して四方の敵を征服し、凱歌を擧げて本國へ歸ると、本國では丁度國王の選舉があつた。將軍は自分の功勞から言つても自分が國王に選舉されるだらうと期待して居たに拘はらず、人民は僧正を選舉した、そこへ敵の間諜が先づ將軍の夫人を煽てる、夫人は其れに動かされて良人に謀反を勧める、生命を的に戰塵を浴びる事十年、楯は汗に濡れて白馬は血に赤

くなるまで苦勞して國家を泰山の安きに置いたものを國王とせず、御經三昧に日を暮らして安眠飽食して居る坊主を國王とする様な國民なら馬の蹄に掛けて磔殺にしても差支ない。愆う夫人が言ふのであつた。

『ぢや敵に國を賣つたの？』

將軍はいやだと言つたけれども、夫人の辯舌は其りや上手な事よ、まあ兩手を擴けて將軍に抱き付いたり、肩から顔を覗いたりして……』

『誰方ですか、そんな淫らな行爲をするのは』

河内子爵刀自は突然に咎める様に言つた。

『小母さま、芝居の御話ですよ』と誰か耳に口を近づけて言つた。

『悪い芝居ですな』

刀自は愆う言つて直ぐ又、

『其れからどうしました？』

一同わつと聲を出して笑つた。

『小母さまも御聞きになりたいの？』

刀自は黙つて、出來上つた籠を箱の中へ入れた。日出子は續けた。



「表情が大變なのよ、それに言葉がね、怒う言ふのよ、蛇は猛き獸にして……」

「てにをはが合ひません、蛇は獸でありませんが、あれは虫です」

小母さんが言った。

「お芝居ですよ、私が言ふのではありませんの」と日出子が言った。

「あ、さう〜」と刀自は首肯した。

「其れを女優がするの？」と誰か言ふ。

「えい、女優よ、望月浪路といふの」

「新聞で大變やかましいわね」

「女の事を女がするんだから本當の様に見えるでせう」

「えい、奇麗ですわ」

「外國では皆女優ですつてね」

「此の役もね、サラ・ベルナールが演つたんですつて」

「皿と鈴が鳴るんですか」と刀自が言った。一同は又笑つた、中には椅子を離れて兩脇に手を當てて笑を懐へて居るのもあつた、他の團體の人々も意味がわからずに笑つた。

刀自は自分の事と知りつゝ、矢張りにや〜笑つて居た。そして獨りで言った。

「日本にも女優なんてものが出て來ました、世の中が開けたもんですね」

「だつて日本が露西亞と戰爭して勝ち續けてるぢやありませんか」と誰か言つた。

「貴方は幸福です、こんな結構な時代に御生れになつて」

皆は笑を收めて首肯した。此の時中央に陣取つた婦人達は幡が谷の行者の事に就いて語つて居た。其の頃東京の上流社會を風靡しつゝある怪しき行者がある、何かの事件で八年間牢獄にあつた、其の間或種の靈感を得て豫言者となつた、特に彼は軍人や政治家に尊敬せられた。日露戰爭を十年前から知つて居たのは彼であつた、開戦と同時に皇軍が連戦連勝すると豫言したのも彼であつた、特に吉野と初瀬の二艦が敵に撃沈せられる事を出發前に豫言したのであつた。

「全く不思議な程能く中るのでございますよ」

杉橋中將夫人は其の最近の一例を擧げて皆を驚かした。

「昨年良人が行者に御目に掛りました時、行者は直ぐ怒う仰つたのです、貴方は明日汽車に御乗りぢやらうとね、實は良人では五日に乗る積だつたのを急に二日に繰上げたので未だ誰方にも發表しないのでございます、で良人は其の事を御話しますと、何時の汽車かと御訊ねでしたから夜行でと申しました、すると朝の汽車になさい、と怒う仰つたさうです、良人は行者にさう言はれても矢張り夜行にする積でしたが、道連れが出来ましたので朝に立つて参りました、すると其の晩でこ



ざいます、夜行の汽車が丁度鼻先の六郷の鐵橋の向ふで衝突したちやありませんか、而も一等と二等の人が皆大怪我をなすつたのですよ」

「まあ……」

人々は手を休めて杉橋夫人を見詰めた。すると其れと隣り合つてる芦澤夫人といふのが更らに興味ある話をした、尤も芦澤夫人の良人は電気事業の巨擘で、其の財力は富塚に匹敵すると稱せられて居るのだが、いろ／＼な公共事業に世話も焼くし、金放れも奇麗で、相當に學問もあるが、只だ一つの缺點は御喋舌が激しいので、始終失敗ばかりをして居る。其の度毎に自分も非常に反省して人々に謝罪し、今後は口を慎む事に決心するもの、どうも口と心とは距離が遠いので、心と相談しない中に口の方がすらく／＼と喋舌つてしまふのであつた。而も此の人の喋舌り様は抑揚も何んにもなく、只真直に平板に流すだけなので、聞く人が呼吸苦しくなる。

或人に言はせると、芦澤夫人のお喋舌は人相に能く表れて居る、夫人の唇の右側に漆の様に黒い小さな黒子がほつちりと存在して居る、あの黒子が痒くなると常人は唇を上下に動かさずには居られないのだ。

「私も行者の事は能く存じて居りますが、其れは實に不思議な事がございます、全く不思議なので、此の位の不思議な話はないと思ひます」

御喋舌の人に限つて話は下手である、話の下手な者は必らず前口上が長過るものである、人々はそろ／＼再び仕事に掛り初めた。いつもの事とてなるべくは聞くまいと椅子をかたく／＼させたり咳拂をしたり、平野水を飲んだりする。其の位の事に遠慮する様な芦澤夫人ではない。彼女は丁度向ひ合つた逓信大臣秘書官夫人を目標に置いた。若き秘書官夫人は同顔で目尻が下がつていかにも善良らしく見える。他の人達は話の腰を折つて欠伸を休へる眞似をしたりするが、秘書官夫人だけは極めて温順に聞いてくれる、尤も此の夫人は今桃太郎が鬼を踏んまへてる繪——鬼は露兵の帽子を被つて居た——を箱に張り付けるのが役目で、彼女は箱の一つ一つの隅に赤い鉛筆でSといふ字を小さく記して居た、賣市の時に自分のサインをした箱をなるべく多く買つて貰ふ様に方々に運動する積なのだ、此の周到なる用意は流石に秘書官の夫人である。

「不思議な話ですが可笑しな話でございますよ、其りや全く可笑しな話で」

芦澤夫人は又怨う言つて獨りで口に手を當て、笑つた。

「左様でございますか」

箱のサインで碌に話を聞いて居なかつた秘書官夫人が慌て、返辭をしたので聲が奇妙に高く走つてしまつた。人々はくす／＼笑つた、だが此のとんちんかんな返辭が一座の單調を破つて人々は芦澤夫人の方を見た。



「私の知合の方で、皆様も御存じの方でございますが、其の方が私共の宅で行者に御會ひになりました、すると行者は其の方を御覽になりました、貴方には幸福と災難と二つある、だが今の處で災難が幸福に負けると慙う仰有るのです、どんな災難ですかと申されますと、貴方は一生涯男の子が無いと仰有るのです、さうですかと其の方は不思議な顔をなさいました、實は奥様との間には御嬢様が御一人ですけれども、他所に御生ませになつた男の子さんが三ヶ所に一人づつ御ありなのでございます、で其の方は行者に申しました、妾腹に三人ありますと、すると行者は慙う仰有りました、其れは皆死ぬ」

芹澤夫人は此處まで言つてほつと呼吸を吐いた、石に躓いた老人が踏み止まる事も出来ずに何處までも走つて行く様に、のべたらに平板に喋舌つたので彼女と雖も舌を休息させる必要があつた。人々は次第に好奇心が動いて来た。

「ところが不思議な事があります、其の方が心服しない様な顔をなさいましたので行者が又仰有りました。貴方は貴方の財産を三分の一に減らして残る三分の二を公共事業に寄附すれば皆が助かるかも知らんと。すると其の方が申しました。皆死んでも構ひません、私はもつとく財産を殖やします」

「まあ」

二三の軽い歎息が起つた。

「いやな人ですね」

「お金の奴隷ですね」

「えい、御當人がさう仰有るのです」と芹澤夫人は續けた。

「私は金の奴隷です、金のために生きてるんですとね」

「徹底的守銭奴ですね」と誰か言つた。

「さう致しますとまあ如何でせう、其れから三年の中に妾腹の男の子が二人死に、一人は行衛不明になりました、矢張り御本妻の御嬢様御一人になつたのでございます、そこで其の方がまたく私宅へいらつしやいまして行者に御會ひになり一伍一什を御話しなさいました。すると行者は慙う仰有りました、此の次に來る災難は貴方の身の上や、貴方は今財産の三分の二を捨てなきや貴方の生命が失くるとね、すると其の方は、何時頃で御座いませうかと聞きました、行者は涙と御顔を御覽になりました十年だけ生命が縮まる、貴方は七十まで生きる人だが、六十で死ぬ、不應の災で……劍難ぢや。すると其の方は暫らく考へて六十まで生きれば澤山です、其れまでに殖える金に比べれば十年は安いものです……」

「生命と御金と取替へるのね」



若き婦人達が昂奮して言った。

「そんな人の奥さんになつたらどんなでせう」

「憚う言つた人もあつた。」

「片時も辛抱が出来ませんわ、瘦せてく骨と皮ばかりになるでせう」と誰かが言つた。

「いゝ、え肥つていらつしやいます、大變に肥つていらつしやいます、其の御嬢様も……」

芦澤夫人が言つた。

「あら、あの方？」

かういふ聲の下から、

「富塚さんく」といふ低聲が傳はり傳はつた。

「其れから、もう一つ不思議な話は……」

芦澤夫人が圖に乗つて又言ひ續けようとした時に淺見子爵夫人が廊下から現れた。

「御疲れでございませうから、御休息遊ばして其れから疎末でございませうけれども御食事を差上げたいと存じますから」

「まあ、決して御構ひ下さらずに……」

梅園侯爵夫人は氣の毒さうに言つた、一同も立つて挨拶した。

「いゝえ、一向お構ひ致しません、では御仕事の御都合で……」

恒子夫人は其の小さな身體を小股に歩み去つた。彼女は臨時出張の料理人が幾度もく鍋を掛け

たり下したりするのを見て氣が氣でなかつた、出来る事なら味が失せぬ中に一同に食べて貰ひ

たい。

恒子夫人が現はれたので、芦澤夫人の御喋舌が中止になつた事は一同に取つては天の助けであつ

た、そこで雑談の聲が張り出した。

片隅では梅園夫人が戦争の話をして居た、人々は夫人にいろく々な質問をした、だが夫人は軍機

に關する事や外交に關する事は一切避けて言はなかつた。彼女は何を言ふにも冒頭に「私は能く知

りませんけれども」と斷わるのであつた。

「私は國と國との條約などは當てにならないものだと思つて居ましたけれども、今度の英國が日本

に盡くしてくれた事を見ますとね、本當に同盟といふものが必要なものだと解りましたよ、私達は

英國に御禮を言はなきやなりません」

夫人の感情は大分激して居た、彼女の老いたる眼にきらりと涙が輝いた、一同は急に静まり返

つた。

「バルチツク艦隊が出發したけれども石炭の供給が出来ません、アフリカも印度も香港も皆英領で



す、英國は一頓だつて露國にくれてやりません、そして英國は其の途中々々の露艦の状況を一々日本に報らしてくるさうです、友情の厚い國、これこそ本當の兄弟ぢやありませんまいか。でも、英國の力を當てにしては平和の後でも日本が馬鹿にされます、當てにせず日本は日本の力で押通さなきやなりません、其れには私達女が……女でも國民です、戦争で死なれた人の奥さん達、子供を抱へて涙にくれてる奥さん達、其の人達に私共はどれだけの事をしてあげたでせう、慙う思ふと賣市や慈善會位では濟みません、私達も子供と離れて戦争に行く時が来るかも知れないので、こんな御心配を御上御一人に御掛け申して私達は……」

ほろり／＼と侯爵夫人の涙が膝に落ちた、歎泣がところ／＼に起つた。

「えらいなあ」

敬三は口の中で感歎した、彼は婦人に對しては一種侮蔑の意見を有つて居た、特に貴婦人なるものに對しては少なからぬ反感を抱いて居た。ところが今始めて侯爵夫人に會ひ、而も泥水に育つた此の博子夫人が、此の條理正しき熱烈な言葉を吐くかと思へば、敬三の耳には殆んど奇蹟の様に思はれた。

節子は眼を眞赤にして居た。彼女は博子夫人の一言一句毎に引き込まれた。彼女は兄が出征の前日に慙う言つた事を憶ひ出した。

「今度の戦争は華族が一番先に死な、きやならんのだ、平素に華族といふ待遇を受けて居る理合せをするんだ」

節子が泣くのを見て隣り合つた篤彌は途方に暮れて居た、彼は博子夫人の話よりも國家の大事よりも、節子の涙が一大事であつた。

「御兄さまの事を憶ひ出したの？」と彼は優しく寄添うて言つた。節子は首肯した。

「なあに無事で歸りますよ。彈丸がそんなに中るものぢやありません」

節子は黙つた、彼女は手巾で眼を拭いて再び黒ん坊の帽子を作り出した。

「僕がね、アメリカに居た時、獵に行きました、僕の銃は其りや新式で……」

篤彌は獵の話で節子の悲を紛らさうとしたのだが、話は銃の自慢話に脱線してしまつた、彼は奇麗に洗つた手の爪先を揃へて卓上に載せたり、又襟帶のピンを刺し直したり、窃と節子の膝の邊に自分の膝を觸らしたりした、節子は黙つてもう少し涙を流したいと思つた。

だが彼女は突然扉口から上原雅子先生が入つて来るのを見た。人々は立つて迎へた。

「先生！」

「先生！」

雅子は白地の紺の上にオリブ色の袴を穿いて居た、彼女は例の有名な光澤のある眼に優しい心



持を籠めて人々に會釋した。

『相済みません、皆さん御精が出ます事』

『悪う言つて彼女は一つくの卓子を調べ、いかにも快活な親みのある調子で、輕やかに皆の心を引立てた。』

『御美しい御手々で御作りになつた此の御人形さんを、どんな武者者が買ふ事でせう』  
人々は微笑した。

『其れに皆さんが賣子に御なりになるんですよ、へえ／＼手前の人形は特別念入の坊やでございませ、目鼻形は私にそっくりで美しうございませつてね』

人々はどつと笑ひ出した。

『其れから次は兎さんに御猿さん、鳩ほつほ』

彼女が悪う言つた時終りの卓子で、はたと侯爵夫人の眼と見合つた。

夫人は微笑して居た。だが雅子は猫に睨まれた鼠の如く立竦んだ、彼女は眼を擧げる事をせずと言つた。

『御機嫌よろしうございます、皆様も御變りがございませんか』

『雅有う』と博士夫人は鷹揚に言つた。『貴方も御元氣で結構です、まあ御掛けなさいまし』

『はい』

雅子は坐りもせず立ちもせず、中腰になつて居た。

『學校の方は如何？』

『はい、成績が大變に宜しうございます』

『教育といふものは難かしいでせうね、特に若い御嬢様方を教育なさるのは……』

『まあ、どうやら、やつて居ます』

『何時御目に掛つたきりでせうね』

『はい、昨年……』

『おや、昨年？』

夫人は首を傾けた、と其の唇が微かに顫へた、其れが殆ど何人にも見えない中に直ぐ微笑に變つた。雅子はさつと顔を染めた。夫人はいつまでも微笑して居た。

此の二人の對面の光景は何となく重々しい空氣を室内に漲らしてしまつた。中年以上の婦人達は梅園侯爵と上原雅子との怪しき關係を知つて居る、其れは昨日今日の事でなく、十年も前から斷續されて來たものである、雅子の女學校創立は一半は侯爵の後援であり他の一半は某子爵の出資であると噂せられて居る。其の上、昨年の夏、偶然にも侯爵と雅子の密會しつゝある別莊へ博士夫人が



訪ねて行つた、其れが端なくも新聞に素破抜かれた、其の記事を信じないものは女學校の生徒達のみであつた。

節子は雅子が段々自分の方へ歩み寄るのを待つて居た、彼女は世界の何人よりも雅子先生を尊敬して居た。其の陽気で快活な點は節子の靈を毎も明るくしてくれる様に思つた。彼女は先生が來たらば横合から飛出して手を握らうと考へて居た。だが彼女は今不思議なものを見た。

今日の様に狼狽し、取亂し、顔を赤め、卑屈な態度をした雅子を見た事は、今までになかつたのである。節子の一番嫌ひな事は「下品」である、彼女が敬三を蔑むのは敬三が酒を飲んで粗暴な言葉を吐いたり、着物や風采に無頓着過るからであつた。

「どうしたんだらう先生は」

節子は怨う思つた、彼女は雅子が罪人の如く眼を斜めにして博士夫人を窺み見た時、脊髄に水銀を打込まれた様に戦慄した。最も嫌ひな卑しい眼付！

節子は肩を窄めて動かなかつた。更に彼女は雅子が十分と腰を落着けずに用事に托して退場したのを見て泣き出したくなつた。

二三の人々は小聲で雅子が此の席に居堪らなくなつたのだなどと話し合つた、昨年の夏の記事は嘘ぢやなかつたなぞとも言つた。

尊敬、崇拜の的が醜惡であつたと解つた時節子の頭に大なる失望が起つた。彼女は大きな螺旋しが頭の中でぐる／＼旋轉して居ると思つた、其の類に油汗が流れて唇が乾いた、で彼女は室を出ようかと思つた時、向ひ合せの敬三と視線がぴつたりと合つた。

「御顔色が悪いですな」と敬三が言つた。

「何でもないわ」

彼女は敬三の態度がひどく癪に障つた、世の中にこれほど憎らしい人がない様に思つた、と其處へ恒子夫人が入つて來た。

「御都合で御食事がいかゞでございますか」

「我儘を致しまして相済みません」と侯爵夫人は言つた。「いかゞです皆さん、折角ですから頂戴する事に致しませう」

人々は總立ちに立つた、そして互ひに先を譲りながら食堂へと崩れ入つた。一番後れて節子と篤彌と敬三が扉口を出ようとすると、突然節子が玄關口を指して走り出した。

「いらつしやいませ、まあ、どうして……」

節子の聲が婦人達の足音の間に聞えた、婦人の群の上からぬつと頭を出して脱いだ帽子を壁に掛けて居るのは小南浩であつた。



「やあ」と敬三が歩み寄つた。

「やあ」

小南は身丈が高く、顔が長い男である、彼はいかにも鷹揚な面も無邪氣な顔をして敬三の肩を叩いた。

「京都から浅見と一緒に、広島まで見送つて来たよ」

「さうだつてね、僕は見送りを失敗してね」

「飲んだね」

「さうだ」

「浅見がさう言つて笑つてたよ、飲んで見送りに来なかつたのは、見送りに来たよりも嬉しいつて言つてたよ」

「は、は、は」と二人は笑つた。

「でも酷いわ」と節子はふりくして言つた。

「ところで節子さん、御兄さんから傳托ものがある」

浩は衣匣を探つて一通の手紙を出し其れを節子に渡した。

「あとで御読みなさいね、僕は小柴と庭を散歩しますから」

「怒う言つて小南は敬三と共に廣間を横切つて庭へ出ようとした。廣間には節子にも婦人達にも取残された篤彌が一人、詰らない顔をして腰を掛けて居た。

「僕はね君」

小南は庭へ降りてから敬三に言つた。

「結婚しようと思ふんだ」

「節子さんとか」

敬三はひやりとして言つた。

「無論だ、節子さんも異存があるまいと思ふがどうだらう」

「君はどう思ふか」

「僕は節子さんが僕の愛を信じて居ると思つて居る」

「打明けたのか」

「打明けないが、大丈夫だ、君は？」

「僕も大丈夫だと思ふけれども、併し……」

二人は沈黙のまゝ、歩き續けた。小南は毎も快活な敬三が何となく沈みがちなのに気が付いた。

「急ぐのか」と敬三が言つた。



『急ぐよ、僕は京都の大學へ行かなきゃならんのだ』  
『どうして』

『東京はいやだ、大學内の黨争には堪へられん』

『その點はさうだ、が併しだね』

『君は結婚に反対か』

『反対ぢやないよ、大賛成だ』と敬三は苦しげに言つた、彼は何んにも知らぬ小南に對して淺見家の事情を言ひ聞かす事は兄弟の首に刃を當てる様な氣持であつた。二人は同じ道へ引返した、夏の炎威は薄らいで夕風が植込を動かし池の睡蓮の間に鯉が頻りに跳ねて居た。

『僕は言はう、君、僕は君に言はなきやならん事があるのだ』

敬三は漸く思ひ定めて言つた。

『其の結婚は出来まいと思ふよ』

『なぜだ』

『子爵は借財に苦んでる、それで節子さんを富豪の處へ嫁入らせて焦眉の急を救はうといふんだ』

『何だつて？』

小南は仰天した、世間の事を知らずに善良に育つた彼には、敬三の言葉が信じられないのであつ

た。敬三はもう一度精しく繰返した。

『其れは大變な間違だ、金で娘を賣るといふのは人道上の罪惡だ、子爵の本意ではあるまい、淺見

(一郎)はそんな事は些とも言はなかつたよ』

『出征前だから、いやな話を聞かせなかつたのだ』

『淺見が節子さんに書いた手紙は多分結婚の事だらうと思ふ、淺見は僕が節子さんを愛してると聞いて非常に喜んでくれた、彼の喜んだ顔を君にも見せたかつた、妹を君に托すれば僕は思ひ残す事が無いつてね』

『俺だつて喜ぶよ』と敬三は怒鳴つた。『こんな可い話があるもんか、だが仕方がない』

『僕の家も貧乏だからなあ』

小南は暫らく沈黙の後と言つた。

『華族とは言ふもの、僕の家は淺見家を救ふ程の金が無い』

『金があつても不可ないのだ、君の父は春木侯爵と反対の土曜會だらう』

小南の眉がびり、と動いた。

『あ、さうか』

彼は再び沈黙した。



「何とかならないものかなあ」  
 敬三は恚う言つて庭の向ふを見た。丁度築山から花鳥の裏へ通する植込の檜や松の間の一本路に立つて節子は手紙を読んで居る、彼女の顔は今しも西に沈まんとする落日の残紅に照らされて、あか／＼と燃え立つ様に見えた、彼女の眼には喜びと希望が溢れて其の唇は情熱に慄へて居た、彼女は眼を擧げて二人を探して居るらしい、だが築山の岬々たる石の下に蹲んでる二人の姿は彼女の目に入るべくもない。彼女は靜かに／＼微笑した、さつと頬を染めたかと思ふと、もう一度兄の手紙を読み返した。

「おい」と敬三は小南に言つた。

「うむ」

小南も既に節子を見詰めて居た。丁度其の時婦人達の食事が済んだ。今日の料理は申分のないものであつたので子爵夫人は重荷を下ろした様な気がした。そしていそ／＼と料理番を賞めてやるべく臺所へ下りて行つた。

### 最後の晩餐

小柴敬三は今日だけ酒を飲まなかつた。彼は朝から金策に出かけて未だ晝飯も食はないのである。

實を言ふと彼は麻の背廣を着れば可かつたのだが、夜には梅園侯爵の茶話會に行かねばならないので、例の背抜きのプロックを着て来た。自轉車に乗つてる中は風が涼しく吹くが、降りるや否や汗が一度に流れて暑さが数倍する。そこで彼は銀行の前に降りるや否やプロックを脱いで暫らく汗を冷ます事にした。彼は今朝からこれで四軒目である。焦眉の急として拂はなければならぬものが五萬圓、實際の負債は六十五萬圓、淺見子爵の生死の境である。

此の金が出来なければ節子は小南と結婚する事が出来なくなる。節子一生の沈淪と親友小南の失戀！そして親友一郎の失望、そして淺見家の不名譽！

身を粉に砕いても此の危急から淺見家と小南を救ふ事が自分の義務だと考へた、だが今朝からの奔走では何んの微光も認める事が出来ない。世間一般の人は淺見家は依然として數百萬の財産を有つて居ると信じて居るが、銀行業者、金貸業、其等の者は既に／＼凡てを知つて居る。山林も地所も擔保に入れられて、而も二束三文の會社の株を負ひ込んで居る事も知つて居た。

「何とか考へさして戴きませう」

これが斷りの言葉であつた。勿論敬三が訪問したのは何れも曾ては子爵の厚い世話になつた系統のものであつたが、言葉の上は鄭重だが内心には全然好意がない事が見え透いた。金を貸してくれないのは止むを得ぬ事だが、恚ういふ忘恩や背信の心持を見せられると敬三には人間といふもの、



輕薄さを其の儘に浴びせられる様な気がした。

「數の中には話の解る奴があるだらう」

彼は恚う思つて少しも撓まなかつた。實際彼の胸算用から言ふと、どうしても十萬や二十萬の金を淺見家に寄附すべき義理合のものが未だ幾らもある。

今彼が訪問しようとするのは日出銀行の頭取で子爵が逓信大臣であつた時に非常な恩顧を受けた本橋安馬といふ人であつた。で、彼は名刺を出して面會を求めた。

本橋といふ男は最早や五十に近い斑白の頭であるが、顔は赤ら顔で肥肉で、いかにも濃厚らしい態度であつた。

「やあ久闊でした」と彼は如才なくにくくして言つた。實は敬三は二年ばかり前に一度何處かで會つただけなので、今顔を見て漸く思ひ出したのである。

「どうです、此の頃は矢張り盛んに御飲りですか」と彼は左の手を口の處へ當て、言つた。

「いや、謹慎中です。遼陽が陥落しない中は飲む氣になれません」と、敬三は言つた。

「左様々々」

本橋は恚う合槌を打ちながら敬三の用向を臆測するもの、如く、狡猾な眼の光をちらと向けた。

「實は」と敬三は言つた。彼は今朝から恚ういふ應對に慣れて居た。彼は淺見子爵の苦境を語りつ

つある間に本橋は幾度も敬辭を漏らした。

「まことに御氣の毒です。私も何とか御役に立ちたいと思つて居ました。併し私の銀行は御覽の通り手堅くやつて居りますので、只今、急に御融通を申上けるわけにも参りませんので……」

彼の言葉は次第々々に慇懃になつた。彼は暫らく黙つて何か考へて居たが又續けた。

「勸業銀行の羽室さんに御相談下さいませんか。羽室さんは、子爵の秘書官であつた関係もありま

すし、勸業銀行なら只今金が餘つて居ります、其れに低利ですから」

「何とかしてくれるでせうか」

「若し何なら私が手紙を書きますから……其れに今居るかどうか電話を掛けて見ませう」

「どうぞ」

本橋が應接室を出た後で敬三は獨り考へ込んで居た。いかにも勸業銀行なら大金も都合し得る筈

だ、其れに貸付課長の羽室は子爵と特別の関係がある。

「僕はどうして其れに氣付かなかつたのだらう」

本橋は手紙を持つてにくくして出て来た。

「只今銀行で御待ちして居るさうです」

敬三の暗い心は新たな望みに光を得た。彼は勇んで銀行を出ようとすると丁度向ふ側の扉を押し



て入つて来た老人がある。其れは浅見子爵であつた。バナマの帽子を脱いで白髪頭に風を入れ、其れから黄帷を着た懐から大きな紙入を出し、名刺を一枚抜き取る處であつた。けつそり瘠せて疲れて、眼が曇つて居る。

「本橋に會ひに来たのだ」と敬三は思つた。

彼は直ぐに外へ出た。痛ましい子爵の面影が未だ眼にちらついて居た。

「御自身で奔走なさるなんて……氣の毒だなあ」と彼は獨りで言つた。

勸業銀行の羽室といふ人は身丈は矮さいががしりした身體で磊落な政治家と言つた様な肌合であつた。彼は身體に似ぬ大きな聲を出すので有名で、其の辯事務に就いての材能が豊かであると評せられて居る。

「やあ、暑いですな」

彼は快然として慇懃叫びながら扉口に現はれ直ぐ又大きな聲で、「おい給仕御茶を持つて来い」

敬三が立つて挨拶する間もなかつた。羽室は一氣呵成に話し出す。

「本橋君から電話がありましたので御待ちして居りました。どうも暑いですな」

彼は方々の窓をがたびし音させて開き、其れから敬三の手紙を受取り、

「讀まんでも解つて居ます。何しろ子爵は無茶だから不可。善良過ぎるんですな。皆に利用される

だけで結局こんな事になりましたなあ、興信所などにあんな事を書かれては全くどうする事も出来ません。金はいくらですか」

「五萬圓と六十五萬圓」

「五萬圓と……なるほど、此際姑息な整理は不可、根本的にやらなくちや」

「さうです、そこで……」

「暑いですなあ」と、彼は又言つた。

「何とか貴方の御好意で以て子爵を救済してあける方法がありませんか」

「ありませんな」と彼は言下に言つた。「僕もいろく考へて見ましたが」

「何とかありませんか」と、敬三は再び聲に力を入れて言つた。

「駄目ですなあ」

「どうしても？」

「敬三は此の粗暴な態度に赫と逆上つた。」

「暑いですなあ」

「羽室は三度言つた、彼は話が大切の場合になると、暑いですなあ」と言ふかの如く見えた。

「若し、貴方が駄目だと言ふと、誰が子爵を救うてくれるでせう」



「其れはねえ君」と羽室は急に小聲で言った。

「春木侯か梅園侯に相談したまへ、必ず出来る。僕の知つて居るだけでも子爵は選挙の時春木侯に二十萬圓寄附した。梅園侯にも二十萬圓は取られてるからね」

「春木侯や梅園侯の事は知りません。僕は貴方に都合して貰ひたいのです」

「僕には……どうも何しろ興信所が……」

「誠意がなければ一錢の金でも惜しい、誠意があれば百萬圓でも出来ます」

「さうは不可んよ、君」と羽室は笑つた。

「僕は解りました。本橋も貴方も聯絡を取つて子爵の世話はしない事にして居るんでせう、本橋の處へ行けば貴方の處へ行けといふ。貴方の處へ来れば侯爵の處へ行けといふ。貴方方の老獪手段に釣られられたのは僕の不覺でした」

「そんな事を言ふなよ、銀行は今都合が悪いんだ」

「頼まん、僕は君の様な不眞實な人間には頼まんよ。勸業銀行が情實に依つて不毛の石河原にでも金を貸して居る事は僕も知つて居る、君の好意の有無で六十萬や百萬はどうにもなるんだ。君は侯爵の處へ行けといふのは、侯爵から天下りの命令があれば銀行はどうにもなると言ふ意味だらう、だがさうなると子爵は生涯侯爵の子分にならなきやなくなる。子爵にそんな屈從をさせるの

は子爵に對する好意だとは思へない」

「そんなに怒るものぢやないよ。君の様に單純でも困るね」

「君には頼まんと言つたぢやないか、もう可いよ。今日はこれで歸るが、何れ何處かで會つたら御禮するよ」

「敬三はすんく室を出た。」

「おい君、帽子！」

「羽室は笑つて帽子を渡した。」

「何を笑ふか、馬鹿ッ」

敬三は銀行を出た。彼は未だ帽子を驚掴みにしたまへ、自轉車を曳きすつて門を出た。と見ると日比谷の方から疲れた俣に乗つて又しても子爵がやつて來た。俣の日覆に遮られて顔は見えないが、車夫は大汗になつて、背中を龜の子の様に圓くして踏躑る様に門内に入つた。

「あ、子爵は僕と同じ系統を辿つて奔走して居るんだ」

聲を掛けようとしたが、敬三は子爵の當惑する顔を見るに忍びなかつた。父祖の財産を傾けて人の世話をしたのだが、いざ危急の場合には一人として寄付くものがない。「本橋に欺され、又羽室に敬して遠ざけられるんだ」



「どうも可いよ」と敬三は言った。彼には酒を飲む気がなかつたのである。

「今日はどうかしてね」と人々が言った。そして壘の栓を抜いた。敬三は黙つて卓上にある電話帳を無意識に弄りながら、小南の失望の顔や節子の泣き顔などを想像したり、又子爵の車上の姿を回想したりして居た。其の中に彼は不圖電話帳に畠山元資の四字を見た。

「これだ」と敬三は思った。畠山伯は浅見子爵と従兄弟同士であり、其の邸宅は子爵と背後合せの生垣を一つ隔たつたばかりである。浅見子爵が時に春木侯に煽てられて味方になり、時に又梅園侯に煽てられて政黨に關係した事を口を極めて忠告したのは畠山伯であつた。彼は今樞密院をも退いて閑雲野鶴、一人息子が南山に戦死してからは毎日停車場へ行つて出征軍人を見送る事を職務として居る。

「伯爵なら屹度ど、かしてくれろ」と敬三は一刻も猶豫が出来なくなつた。

「伯爵なら屹度ど、かしてくれろ」と敬三は一刻も猶豫が出来なくなつた。

「伯爵なら屹度ど、かしてくれろ」と敬三は一刻も猶豫が出来なくなつた。

「おい一杯くれ」

彼は大きな氷水の洋盃を差出した。人々は関の聲を擧げた。彼はなみ／＼と注いだ火酒を二口に飲み干した。不思議に精神が爽やかになり、胸元から腸までの順路に滑らかな珠が轉がる様な気がした。強烈な香は鼻から眼へかけて明るく沁み込む。彼は直ぐ外へ出た。暑さは烈しいが気分が軽い。

彼は伯爵の邸を訪れた時伯爵は在宅であつた。此の頃の出征兵は重に夜分に出發する様になつた。

「おう、よく來られたな。何か情報が來たのか」と伯爵は機嫌よく迎へた。彼は白飛白の單衣に木綿の袴を穿いて居た。

「遼陽は未だかな」

「未だです」

「旅順はどうなつたのぢや、なか／＼難攻不落ぢやからな」

敬三は何とかして浅見家の話題に移らさうと焦つたが、伯爵は戦争談に夢中で其の隙を與へなかつた。

「此處へ來給へ」

洋風の應接室に隣つた小さな室、そこに窓が一つあつて庭の木々の緑が鮮やかに敷物や卓子の上



に影を映して居る。其處の真中の卓子に大きな盆景が二つ並んで居る。一つの盆景は旅順要塞附近の鳥瞰圖を泥で造り上げたもので、港外は水を湛へ、小さな玩具の日本軍艦が其れを圍繞いて、閉塞船がいくつも横になり、敵の軍艦のマストだけが残つて沈んでるものもある。陸軍の戦線には山や砦や砲臺が幾つも並んで、盤龍山や、東鶏冠山や松樹山や二百三高地など豆の様な砲臺である。此の盆景盤の兩側に五寸四方ばかりの日章旗が立て、あり、日章旗には帝國萬歳と記されてある。敬三は銀座の店頭に憊ういふものを飾つてあるのを見た事はあるが、憊うまで精密なのを見た事はなかつた。特に彼は帝國萬歳と書いた旗には微笑せざるを得なかつた。疑もなく伯爵自身の筆である。

「これを見給へ、左は第一師團だ。中央は第十師團で右は第十一師團、乃木將軍は何處に主力を集注するかといふに中央の盤龍山だ。背後に東鶏冠山が控へて居る。さあ此の邊は全部砲臺だらけだ。そこで乃木將軍は……」

伯爵は一寸に足らぬ小さな騎馬の人形を指先に撮んで真中に立てた。

「其れが乃木さんですか」と敬三は笑つた、伯爵はにこりともしない。

「敵は金城湯池ぢや、新式の兵器がある、これをどうするか、若し旅順の陥落が長びけば遼陽の陥落は覺束ない。ねえ君遼陽はこれぢや」

伯爵は今一つの盆景を指さした。其處にも同じく遼陽への通路、要塞が細かに陳列されてある。

「橋木城はこれぢや、これは既に占領した。奥軍と、野津軍は此の路だ。此方の山や谷の路は黒木軍だ。これはなかくの難所だ。黒木軍が抄々しく進む事が出来ないのは當然の事だ。其れを世間の奴がなぜ悪口を言ふか怪しからん」

伯爵、僕を御叱りになつても困ります」

「やあ失敬、さうだつた。だが國民は餘りに氣が短か過ぎるのう、少しは當局の氣持を察しなければならんて」

「御尤もです」

「だが小柴さん、これから支那は雨が降る、行軍が自由でない、そこへ以て來て來月になるとバイカル湖の鐵道が落成して敵は日毎に兵二千、大砲八門、軍馬五百頭を輸送する事が出来る。さうなると小柴さん此の戦争は……」

伯爵は凝と盆景を見詰めた。銀の鬘が窓からの日射と葉影が揺れる度にきら／＼と光つた。其の眼は凍て付いた様に動かない。彼は戦争の長びく事を恐れ、帝國の前途を危ぶんだのである。敬三は黙つて伯爵の顔を見詰めて居た。女中が平野水を持つて來るまで二人は鑄物の如く坐つて居た。「こんな事は人に言つちや不可んよ、不安を與へるのは可くないから」



伯爵は吾に復つた様に言つた。併し憊ういふ懸念は何人の頭の上にもあつた事であつた。

「ところで君は何か用事だつたのか、私の勝手ばかり言つて済まなかつた」

伯爵は初めて快然と笑つた。敬三は審かに來意を語つた。伯爵は眉毛一つも動かさず聞いて居た。敬三は伯爵が別な空想に耽つて居るのではあるまいかと思つた。そして伯爵の返事を待つた。

「難有う、能く言つて下すつた」と伯爵は暫らくあつてから、言つた。そして何とも言へない苦しさを表情が顔の皺々に現れた。

「實はな小柴さん、私も其の事に就いて心配して居ましたが、私の財産は今幾らもないのぢや、少しばかり有つたのだが其れは皆淺見に融通してしまつた。で残る處のものは耻かしい話だが……」

「御免し下さい伯爵、僕は其れとも知らずに御願ひに参りました。實に相済みません」

敬三は驚きの餘り椅子を離れて眞赤になつて謝罪した。實際彼は伯爵が伯爵にも迷惑を掛けた事は夢にも知らなかつたのである。

「いや決して構はんよ、私の有つてるもので間に合ふなら私は何時でも貸してやるが、併し淺見にも困つたものだな、彼が政治に興味を有つのは悪い病だ。春木も長州、梅園も長州、双方長州でありながら仲が悪いのは何のためだ。春木は長州人でなければ日本人でない様に思うと、政治は長州の私すべきものぢやない。自己の權勢を張る以外に何もものもないといふのは不都合な事ぢや。」

梅園は政黨を組織したので長閑でない積りで居るが、長州と政黨と交換しただけの事ぢや、詰りは自分の私慾を圖るだけぢや、國家に盡すといふのは私利や私慾を離脱した人でなければ忠誠とは言へない。其の棒先に使はれて祖先からの財産を馬鹿共の酒食に供するといふのはどう考へても悪い事ぢや、其の位の事は解つてる男ぢやが、扱病に悪かれたものは仕方がない。私は怒りませんが可哀さうに思ふ。君も機會があつたら忠告してやつてくれ、一郎は出征中だ、子供が可愛いなら親は馬鹿な事を慎まなけりやならん。親は子供に依つて責任を感じ、子供は親に依つて責任を感じるのぢや、私も亮雄が戦死したので、今まで知らなかつた事を教へられた。亮雄は立派に御奉公をしたが私は今だに何んの御奉公もして居らん」

伯爵は憊う言つて再び凝と盆景を見詰めた。敬三は這々の體で伯爵邸を出た。何か知らん莊嚴な空氣が胸一ぱいになつた、彼は本當の貴族を見たのであつた。

「何處へ行つても評判が悪いぞ」

敬三は憊う思つた。そして次第に子爵を惡む氣になつた。

「藩閥に利用され、政黨に利用されて財産をめちゃくになし、息子や娘に迷惑かけるといふ、馬鹿があるものか」

どうともなれといふ自暴な氣分が次第に頭に擴がつて來る。彼は空腹を感じたので、町端の洋食



屋に入つた。西洋一品料理屋と書いた日覆を路傍へ斜に張つた狭い室に、卓子が二脚ある、一脚は勞働者風の男が二人ビールを飲んで居た。彼は豚の焼肉と日本酒を注文した。眼の細い鼻の平つたい蝶の様な女が頭を英吉利巻に結つて白粉をべたく塗つた顔を暖簾から出して唄つて居た。

「島田つぶして束髪結うて、看護婦姿はあれわいさのさ、國の爲めバンザイ」

「うめえな、もう一つやつてくれ」と勞働者がいかにも嬉しうな顔をして言つた。

「鐵砲片手に涙を隠し、おつ母さん左様ならあれわいさのさ、國のためバンザイ」

「全くだ」と今一人の男はしみじみとした様に言つた。

「バイオリンがあるともう少し能く唄へるわ」と女が言つた。

「なくたつて巧いよ、おい何だつけ、鐵砲片手にか……」

二人は練習を始めた。敬三はもう銃子二本を平けた。三本目の時、今夜梅園侯の茶話會へ行かねばならぬ事を思出したので、中止しようとしたが、其の儘飲んでしまつた。今朝から何んにも食べなかつたので三本の酒は非常な勢で体内を巡廻した。彼は頗る快い氣持になつた。其の時隣りの職人は喧嘩を初めた。一人は恚う言つた。

「何でえ、乃木さんも黒木さんもあるけえ、何をぐづくしてやがるんでえ、遊び半分に戦争をさせて堪るもんか」

一人は其れを咎めて言つた。

「おい手前は露探だね、誰が遊び半分には戦争をしてるかももう一遍言つて見ろ、馬鹿ッ連戦連勝は誰の御蔭だか考へて見ろ」

「考へなくたつて解つてらあ」

「手前などは日本人ぢやねえ」

「何を？」

「何を？」

「何を？」

二人は立上つた。敬三は其の間に割つて入つた。

「露西亞と戦争をして居る今日に於て日本人同士が喧嘩するといふ法があるか」

「尤もだ」と一人が言つた。

「えらい、然り」と一人が言つた。

「おい、飲んで萬歳を唱へよう」

「賛成々々」と二人が言つた。大きな三つの洋盃に冷たい酒を充たした。

「日本バンザイ」

「バンザイ」



「面白いな」と敬三は言った。「おい俺と一緒に来い、何處かへ行かう」

「賛成々々」

職人共は矢鱈に賛成した。敬三は三人分の支拂をして其處を出た。

「犬も伴れて行かう」と敬三は店先に寝轉んでる大きな赤犬を指さして言った。

「不可ないわ」と女が言った。

「黙つてろ」

職人達は赤犬を縄で自轉車の後ろに縛つた。犬は黙つて縛られて居たが、自轉車が動き出すと急に吠え出した。

「あら不可ないわ」

女共や洋食屋の亭主達は聲々に怒鳴りながら其れでも面白さうに見て居た。自轉車は一左一右した。其の度毎に犬が後足で踏張つて動くまいとするので敬三は鞍を下りねばならなかつた。

「やれ／＼バンザイ」と職人共は叫びながら後に従いて來た。時は夕暮の人の出盛りである。往來の人々は呆氣に取られて、わい／＼囁し立てた。

「バンザイ」と敬三も叫んだ。彼は自分ながら少し酔うた事を自覺したが、酔うてる割合に自轉車の操縦が、なか／＼巧いものだと思つた。實際は彼が巧いのでなかつた。四途路もどろの自轉車

が犬を曳いて見當なしに突進するのを見た往來の人は驚いて路を開き俾も荷車も凡て彼に路を譲つたのである。何處で後れたか、職人共は途中で見えなくなつた。敬三は得意になつて、驀々地に走つた。犬はへと／＼になつて曳かれて行く。

其の夜九段坂下の巡查が狙橋の河岸に犬と一緒に寝て居る敬三を發見した。自轉車は犬を縛り付けたまゝ、其の傍に倒れて居た。巡查は衣囊の名刺に依つて彼を新聞社まで俾で届けた。彼は其の夜編輯局の片隅に寝かされた。翌朝目がさめると彼の身體の上に無数の新聞綴込が載せられてあつた。

考へて見ると凡て夢の様、どういふ徑路を辿つて社の二階に昇り、綴込を着て寝るまでになつたのか解らない。彼は下へ降りて顔を洗ひ其れから入口の方へ行くと其處に自分の自轉車に繋がれた赤犬が一匹彼を見て哀を乞ふものゝ如く吠え出した。

「さうだ。此の犬だ、……あれからの事は此の犬が知つてる筈だ」

彼は怒う思つて頭を掻いた。又しても社内の人々に擲擲はれる材料を仕出來した。

「可しく、今日は缺勤だ」

彼は事務室へ行つて今朝の新聞を取り其れをさつと擴けて見た。

「貴金屬は潰してしまへ！」

怒ういふ大きな活字の下に「梅園侯の茶話會」といふ小さな見出しがあつた。



「しまった、俺が行かなかつたから誰か行つたのだらう、濟まないな」

彼は恚う思ひながら記事を読んだ。其れには重立つた來會者の名が擧げられてあつた。其の中に淺見子爵もあれば實業家の富塚や栗津などの名もあつた。軍國多事の際、朝野擧つて勤儉の實を擧げ、戦争がどんなに長引いても兵糧彈藥に困らぬ様にしなければならぬ、特に婦人達は貴金屬品を悉く潰して軍資に代へる覺悟が必要だ、これは梅園侯談話の概要であつた。

「當り前の話だ」と敬三は思つた。同時に子爵が出席したのは梅園侯に會つて負債の始末を付けて貰ふためだらうが果してうまく成功したかどうかと思つた。で彼は社を出ようとすると編輯長は非常に急いで入つて來た。彼は某新聞が油鹽艦隊が千嶋沖に現れ激戦中なりとの號外を出したので酷く狼狽して居た。其のために敬三は海軍省へ行かねばならなくなつた。其れを手初めに其の日は奇妙な上海電報が幾つも入つて來て、吉凶の流言が盛んに傳はつた。元より政治記者たる彼には關係がないのだが、人手の足らぬを坐視する事が出来ない。其れやこれやで彼は一日を多忙の中に暮らしてしまつた。未だ日が高い中に子爵から電話があつた。其れは晩飯の招待であつた。

夕暮に漸と隙を窺んで子爵邸を訪ねた。日は暮れきらないのに電燈が點つて居た。彼が例の如く自轉車を裏庭へ乗捨て、子爵の書齋へ入ると其處で子爵は恒子夫人と夢中に何か話して居た。敬三が挨拶をすると子爵は軽く受け流して直ぐ夫人に眼を戻して又續けた。

「どうしてもノ三年は戦争を續けなければならん、さうなると日本では金庫が空虚になる兵器彈藥が續かない。露國の財政は無盡藏だ、日本の外債は抄々しくない。そこでだね。我々國民は粥を啜つても戦はなきやならんのだ、私も六十に近い身を起こして戦地に行く。老來つて一劍寒しだ。お前も覺悟しなきやならん。繩帶だ、麥の飯だ、鐵瓶を潰して彈丸にするんだ」

「はい、其れはもう」

夫人は感慨に打たれて涙ぐむで居た。子爵も眼に涙を湛へて居た。濃厚な子爵が斯くまで昂奮したのを見た事はない。敬三は只驚いて二人を見成つて居た。

「なあ君、さうだらう」

子爵は昂然として敬三に言つた。

「さうです」と敬三は答へた。そこで子爵は改めて敬三に挨拶した。

「どうも失禮」

敬三は昨日炎天に疲れた俵を驅つて銀行から銀行へと哀願に歩き廻つた悄然たる子爵の姿に引替へて、今日の此の元氣はどうした事だらうと怪しんだ。多分梅園侯の方が成功したのだらう。

「ところで子爵、昨日銀行でちらと御姿を拜見しましたが」と敬三は漸と口を切つた。

「あ、さうか、昨日は馬鹿を見たよ」



「梅園さんと御相談なさいましたか」

「侯爵には昨夜會つた。だが、別に……」

「僕の考では侯爵が貴方の負債を整理してくれる義務があると思ひます。選挙の時にも随分……」

「あ、私もさう思つて侯爵に會ひに行つた。ところが何も言へんのだ」

「なぜですか」

「今家内にも言つて聞かした通りだ。舉國一致で國難に殉する場合に於て自分一個の事許りを考へて居られんぢやないか、私の負債をどうかして下さいつてね、そんな事が言へるか。國の存亡が第一だ」

「其れでは何も仰有らなかつたのですか」

「其れどころぢやないからなあ」

「敬三は呆れて何んにも言へなかつた。自分が今破産をするか、娘を賣るか、禮遇を停止されるかといふ瀬戸際に立つても國家の危急と聞いただけで何んにも言へなくなるといふ善良な心は讃歎に値するが、併し餘りに善良過ぎる。何のために炎威を犯して下司下郎に頭を下け廻つたか。」

「失禮ですが子爵、貴方は問題を混同なさりますまいか、侯爵との負債一件と國家の事とは性質が違ひます。貴方の財政が整理されたから、と言つて國家が損をする筈がないのですから」

「それだよ、うむ、それだよ」

「子爵は急に打萎れて頭を低れた。」

「私もさういふ氣がしたから一應は言つて見ようと思つたが、何しろそれだけ重大な議論があつた處へ私の借金を……と言ふのは餘りに見つともないからなあ」

「其れでは子爵今後どうなさる御積ですか」

「其れはなあ、私は何とも貴方に言ひにくいかなあ」

「子爵は急に口を噤んだ。今まで國家の大問題といふのを口實に、胸の奥へ壓へ付けくして居た苦痛が急に恐ろしい力を以て反撥して來た。」

「栗津に整理を委任したのだ」

「栗津に？」

「敬三は睨む様に子爵を見詰めた、實際彼は老人でなかつたら……親友の父でなかつたら其の横面を張り飛ばしてやるのであつた。」

「止むを得ん事だでなあ」

「敬三は黙つて居る。」

「耻かしい話だが、貴方は一郎の親友で又私の親友だから」



「其れでは御嬢様は？」

「明日家内が節子を伴れて栗津の別荘へ遊びに行く積だ。多分其の時双方の話が決まるだらう」

「明日？」と敬三は益々驚いた。「御嬢様が御承知ですか」

「うむ、其れは今御母さまが説得してらだらう、今彼室で」

敬三は凝と向ふの小座敷を見やつた、いつもピアノが響くあの瀟洒な一室、明るく涼しい、平和と美に充ちたあの一室に、今節子の鳩の様な優しい胸が寸々に碎かれて居るのだらう。血を絞る音！骨を刻む音！泣くに泣かれぬ痛さに悶ゆる苦惱の呼吸！其れが敬三の耳に聳々と應へる様な氣がする。「慘酷だなあ」と彼は叫ぼうとしたが凝と怵へた。涙が頬を傳つて果しなく流れる。突然扉の白い帷の外から夫人の姿が現れた。

「どうだつた」と子爵は顫へながら言つた。

「承知しました」と夫人は言つた。そして両手で目を隠したまゝ、大急ぎで室を出た。

敬三も直ぐ室を出た。彼は人の居ない處で思ふさまに泣きたかつた。庭へ降りてテニスコートの方へ行かうとすると、其處の中庭の垣根の前、夾竹桃が咲き崩れて居る處に節子が立つて居た。暮色迫る天の空映りに其の下膨れの子供らしい横顔がくつきりと見えた。彼女は凝と天に薄れ行く夏雲を見て居た。

「節子さん」と敬三は抱き上げてやりたい様な思をして言つた。

「あらッ」

節子は眼を敬三に向けた。其の眼はぱつちりと黒く星の様に輝いた。彼女は暫らく何か躊躇して居たが聽て兩手を舉げて敬三目蒐けて突進した。そして敬三の兩手を厳しく握つた。

「小柴さん、私貴方にあやまりますわ。私貴方が大好きになつた」

「難有う」と敬三は言つて強ひて笑つた。「なぜですか」

「あの方から聞きましたのよ、私、貴方といふ人が解らなかつたのね。貴方は私を子供扱にするから……」

「いや御嬢様、僕は貴方にも小南君にも一郎君にも何の役に立ちませんでしたね」

「もう可いのよ」と節子は晴れ々とした聲で言つた。「電話であの方を御招待して頂戴。今日は私の晩餐會だから……最後の晩餐會だから」

近衛騎兵

此の二十日間ばかりといふものは雨が降り通しに降つて全然日の目を見なかつた、八月の下旬、暑さは暑いが其れでも降るよりは可かつた。兵卒共は巢から出た鳥の様に、きら／＼する日光を顔



に受けて、何れもノ、河の邊に出た、河は恐しい音を立て、濁つた波を起しながら奔る、向岸の高梁はもう人間の丈よりも高くなつて、其れが風に揺られる度に一里も二里も續いた青い波が硝子の様に光つて見える。兵卒共は河に石を投げて深さを測つたり又向岸まで届かせる競争をしたりした、だが大部分は舍營の前に出て背中を日光に曝したり、靴を干したり、襦衣を洗つたりする事に夢中であつた。

向ふに峙つ山は弓張嶺、劍山、浪子山の峰續き、突き出た禿け頭の斜面と凹んだ深い谷々の巖が久し振で日に照られて白い煙の間から隠現出沒して見える。浪子山は一番近い山で又の名を亮甲山といふ、兵卒達は其れをリヤン／＼山と略稱した。

村はもう全く百姓の影もなかつた。司令部は黒い漆喰で堅めた箱の様な建物で、表の門には赤い紙の双聯が掲げられてあつたのが、其れが剝落して福祿とか吉祥とかいふ文字だけが微かに残つて居る。此の百姓家の前に大きな叢の木が一本あるが、叢の實は青い中に悉く平らけられて葉も大方振り落され、枝の裂け目が白い肌を露はして居る、其れに無数の襦衣や猿股などが一面に引掛けられて、其の上にも猶突き出た枝があつたら何かを乾さうと兵卒共が洗濯ものを腕に掛けて集まつて居る。其の背後は豆や西瓜の畑だつたのが、今では連日の雨に洗はれて棒杭ばかり残つて居る。村の端れの青ベンキを塗つた小舎の屋根から八方に張り渡した綱に丁度軍艦の橋を中心に飾り立

てた萬國国旗といふ風に此處にも洗濯ものが乾かれてあるが、此の周圍には一番多く兵卒が群がつて居た。彼等は少しでも乾いた地面があると其處へアンペラを敷いて坐るのであつた。其處で頭を刈合つてるものもあれば虱狩をしてるものもある。向ふの天幕では靴直しや綻びを縫ふ者や酒が飲みたさうな者や饅頭を食ひたさうな者共が何か唄つたり話したり喧嘩をしたりして居る、霖雨のためには河水が汎濫して各師團の聯絡が絶えたので將校と雖も一滴の酒も一本の煙草も飲めなかつた、其れでも彼等は陽氣であつた、彼等は酒保が雨を犯して買ひ出しに行つた事を知つて居た、さうして其れが歸れば高粱酒の一杯位には有り付けると思つて居た。酒を飲まない連中は今夜にも進軍の命令が下るだらうと楽しんで居た。

今彼等の中を勢よく駆け脱けて行つた一人の將校があつた。馬は栗毛の少し食過ではなからうかと思はせる様な妙にぶく／＼肥つた形であるが、首を眞直に立て、後足の出は特に目立つて立派であつた、將校は兵卒の敬禮には目もくれずに走り去つた。

『いよく／＼今晚らしいぜ』

磨き上げた長靴を惜むやうに草に踵を摺つて居た青年士官は、木の根に腰を下ろして葉書を書いてる今一人の青年士官に言つた。

『やるかね』と彼は言つて矢張り鉛筆を走らして居る。前者は色が白くて鼻の先と頬骨だけがいや



に黒かつた、後者は恐しく首が短かつた。

『工藤が斥候に行つて未だ歸らない』

『やられたかも知らんよ』

日暮前ではあるが炎威は中々退かなかつた、長い雨に打ち倒された草は其の儘頭も上げずに湯氣を立て、溜息を吐いて居る。と、色の白い士官は向ふを見やつて叫んだ。

『やあ何だらう』

首の短い士官は漸と葉書を書き終つて立上つた。

『酒保だ、酒保が歸つて来たのだ』

瞬く間に酒保の周圍に兵卒の黒山が築き上がった。二人の酒保は今朝から危険を犯して五里もある遠い村まで出た、さうして十羽の鶏と鶏卵と高粱酒一樽と豚の片股を漸と手に入れて歸つたのであつた。

酒の壺は首を碎かれた、兵卒の手が何十本となく其れに集まつた。

『杓をくれ』

『罎子に汲むが可い』

『いや飯盒でやらかさう』

其の聲が終らぬ中に酒はもう無くなつた、大きな土焼の壺が路傍に轉がされた、其れだけでは氣が濟まないで兵士共は靴で踏み碎いた。一人の兵卒は鶏を抱いて逃げ出すと後から五六人が従いて行つた、彼等は畑の中で焼いて食ふ積らしい。

ぞろ／＼と何百人となくやつて来たが、事既に終れりと聞いて、ぶつ／＼不平を言つたり笑つたりして引返した。

此の騒ぎの最中に淺見一郎は長靴に劍をかたく／＼させながら悠然した氣持で街道を歩いて居た。

彼は今日受取つた妹節子の手紙の事に就いて考へて居た。其れは頗る簡單なものであつた。

『御兄さま、私は今度粟津篤彌といふ人と結婚する事になりました、御兄さまが戦地で御苦勞なされるのが尊き犠牲であるなら、私の結婚も決して無意義ではないと信じます、どうか私を賞めて下さい』

今朝からいろ／＼考へたが此の手紙の意味は更に解らなかつた。何れにしても節子のために喜ばしき事ではない、第一節子に熱烈な愛を懐いて居る小南はどうなるだらう。

一郎は漠然と想う考へて一抹の憂鬱に暫らく暗い氣持を味はつて居た。さうして遠く山河を隔てた自分にはどうする事も出来ない事だと諦めようと努めた。

突然四方に散亂せる兵卒共が右往左往に走つた、嚴肅な足音がどつ／＼と波の如く響く、鳳凰城



街道を右に歩兵の一部が前進し初めたのであつた。彼等は皆恐しく眞面目な顔をして居た、彼等の服装は半黒半白であつた。

「夜襲だ」と一郎は思った。

「萬歳！」

騎兵隊や輜重隊から聲が出た、酒保の高梁酒に酔つた一人の輪卒は顔を上機嫌で鶏の片股を嚙りながら萬歳を續けて居たが、直ぐ下士に叱られて片股も奪ひ取られてしまつた。人々は笑つた。

歩兵が過ぎてから營舎は再び賑はつた。

「いよくですね、聯隊長殿」

一郎は丁度其處に差しかゝつた聯隊長に恙う聲を掛けた。

「うむ」

「今夜ですか」

「さあ」

聯隊長は長靴を繕つたり、洗濯をしたり、虱を取つたりして居る兵士等をちらりくと見やつた、さうして憐愍の情に堪へない様な表情を思ふと、直ぐ其れを隠す様に淋しい微笑を口元に浮べるのであつた。彼はどんな兵士にでも聲を掛けた。彼の心が緊張まれば緊張まるだけ彼は兵卒

共が可愛くて堪らなくなるのであつた。

「司令官閣下は今何をして居らるゝ」と彼は一郎に訊いた。

「はい、三十分前には外國武官と御話をして居られました」

「なるほど」

聯隊長は一生懸命に靴を磨いて居る一人の兵に言つた。

「そんなに靴を奇麗にして何處へ行く積か」

「はい聯隊長殿」と其の兵は直立して答へた。「地獄へ参ります」

聯隊長は天を仰いで大きな口を開いたが聲は出さなかつた。兵卒の答が餘程氣に入つたらしい。

「お前の名は何といふ」

「はい、聯隊長殿、近衛騎兵第二大隊第二中隊馬淵豊太郎と申します」

「働け！ 勳章が待つてるぞ」

「勳章は死骸の上に……聯隊長殿」

聯隊長は再び天を仰いで口を開いた、と此の時一人の小隊長が大きな聲で一人の騎兵軍曹を怒鳴つてる聲が聞えた。其處は小さな雜穀倉の前であつた。

「もう一遍言つて見ろ」



小隊長は掌でびしやりと軍曹の横面を打つた、面は右の方へぐにやりと傾いた、と第一の拳が右の頬を叩いたので、面は再び立ち直つた。其の度毎に軍曹の足が前へ出たり後へ下つたり、腰がよろ／＼したりした。

「酒に酔拂つて悪いと思はんか」と少尉が叫んだ。

「悪いと思ひません」と軍曹が言つた。

「此奴は……」

少尉は眞赤になつて剣をがちやく／＼鳴らしたが此の時聯隊長の姿を見たので黙つた。

「悪いかも知れないが悪くない」と軍曹はぶつ／＼言つた。

「何を？」

「軍曹工藤三吉は軍功を立てました」

危く踏止りながら三吉は叫んだ。

「やあ、工藤軍曹」

一郎は背後から軍曹の肩に手を置いた。

「どうしたのだ」

「淺見副官殿、此奴は泥酔をして居ります」

「どうした、工藤！」

「工藤は斥候に出ました、露助三人を生捕つて歸りました、露助は火酒を持つて居ました、工藤は其れを飲みました」

「お前一人で行つたのか」と聯隊長は横合から言つた。

「はい」

工藤はしつかりと足を踏みしめて敬禮した、其れから洋袴を揺り上げる様にして其の幅の廣い肩を動かした。

「途中で敵の斥候に狙撃をされました、馬を射たれました、逃げる事が出来ないから格闘しました、さうして三人を射ちました、捕虜を乗せて工藤は徒歩で歸りました、捕虜の有つて居る酒を皆飲みました、其れで酔ひました、酔うたのは酒の罪です、工藤の罪ではありません」

「お前は本當にさう思ふか」と聯隊長は嚴かな顔をして言つた。

「本當にさう思ひます」

「よろしい、其の話は後廻しにしてお前が生捕つた捕虜を此處へ伴れて來い」

「はい」

工藤は去つた。



「彼奴はものになるぜ」と聯隊長は言った。「兎に角罰しなきやならん」  
三吉が敵の騎兵士官を生捕つて来たといふので營舎はひどく昂奮した、兵卒共は四方から集まつて此の武運拙き敵を見物しようとした。

三吉に伴れられて真先に来たのは眼の碧い、色の白い唇の紅い騎兵士官であつた、彼は日本の大黒帽の様な帽子を着て白い服の両肩から十字に革の紐を胸へ交叉させて居た。彼は三吉よりも首だけ高かつた。彼は歩く度に跛を曳いて苦笑した、三吉に突かれた大腿部の洋袴は五寸ばかり裂けて血が生々しく滲んで居た、彼は餘程衰弱して居たが將校や兵士の群の前を通つた時には非常に緊張して青白い顔を刷と染めた。其の次のは肩幅の廣い色の黒い田舎者らしい兵卒であつた、彼は恐しく大きな鼻を持つて居た、臆病さうな狡猾らしい眼は竊む様に人々を見た。今一人の捕虜は重傷なので病院隊へ残された。

捕虜士官は聯隊長の前で立停つた、さうして敬禮した。

「勇敢なる露國士官を我軍隊に迎へた事を喜ぶ」と聯隊長は言った。副官初め將校達は笑つたが、士官は日本語が解らないのでまご／＼して益々顔を染めた。

「通譯は？」と聯隊長が言つたが通譯が居なかつた。

「君は佛蘭西語が話せますか」と一郎が言つた。

「ウイ／＼／＼」と士官は言つた、一郎は流暢な佛語で聯隊長の言葉を譯した。士官は帽子を高く捧げた。

「君は何隊に屬するか」と一郎は聯隊長の命を受けて訊問した。

「西伯利第三軍團エム・グレコフ東部狙撃兵第十二聯隊」と彼ははつきりと答へた。

「君の名は？」

「イワン・スメカローフ」

「君は？」と次の兵卒に言つた。

「クラアギン」と彼は言つた、さうして四邊の人々をちらと見やつて首を低れた、其れは何となく自分の名を言ふのが恥かしさうに見えた。

「浪子山をどれだけの兵力が守備して居るか」

「閣下！」と士官は言つた。「若し閣下の勇敢なる兵が不幸にして私と同じ運命に陥つたならば味方の機密を口外する様な卑怯な態度を取るでせうか」

「恠う言つて彼は右手を以て胸に十字を畫いた。其の手は白く上品で長く、黄金色の毛が生えて居た。聯隊長は首を伸して天を仰いだ、其れから捕虜收容規則に依つて捕虜として待遇する旨を申渡した。



三吉は二人の捕虜を伴れて其處を去る時にも未だ酒の酔が醒めなかつた、士官は腿の傷が痛むので苦しきうに跛を曳いた、三吉は彼に自分の肩を貸してやつた、一人は跛で一人は醉漢である、四の足が揃はないので右に傾き左に傾き、倒れさうになつては又踏張つた。人々は腹を抱へて笑つた。畑路の兩側には兵卒が列をなして捕虜を見物して居たが、其の中の二三が見兼ねて士官を負うた、同時に三吉をも負うたものがあつたので割れ返る様な笑が沸騰した。

捕虜が去つてから、兵卒は又難然と亂れた、もう干物を取り入れたり、虱狩を止めたりして夕方の支度を取掛つた。一郎は聯隊長に別れて一人、ぶら／＼散歩した。酒保の小舎にはごちや／＼と兵卒が集まつて居た。彼等は軒から射し込む夕日を背に受けて唄つて居る。

「四角四面の郵便函がね、フィットサ、文のやりとりしてくれる、ホーサ、イトフィットサ、フィットサ」唄つてるのは寂のある聲で他の者共は切れ目／＼にフィットサ／＼と合唱した、向ふの黍畑の前では靴の泥を高梁の莖で削り落しながら「路は六百八十里」を唄つて居た。「長門の浦を船出して」語尾を奇妙に長く曳いて其れが鼻に掛つて聞えるのは東北兵の一隊らしい。

突然凡ての兵が物に驚いた様に立上つた、其れは敏感な獣が獵夫の足音を聞いて跳び上るよりも敏捷であつた。

「氣を付けイ」

「氣を付けイ」

小聲ではあるが次から次へと傳はつた、一郎は小舎の外を見た、今や夏の日は燦くが如き炎威から冷めて、猩紅の鈍色のま、沈々として山の峽に降りつゝある、山の半面は名残の光に照られて朱色の肌を緑の間からくつきりと浮き出すと、起伏連互して南から北へ走る山々の皴は燦青になり紫になり、深き谷は眠さうな霧を深はし淺い嶺は暮れきらすに屏風の折目を見せる。其等の隙間隙間、突起した鋸の齒と背後の天の水淺黄に烈しい色彩の變化が始まる、朱になり紅になり、黒雲白雲、龍の鱗となり、ちぎれた綿となり、薄紫の前の様な黄色が走る。

街道に現れたのは黒木大將であつた。従者も伴わずに只た一人、いかにも氣持好ささうに、のつそり／＼歩いて来る、彼は急に起立して敬禮する兵卒共に一々答禮した、さうして其の兵士の顔を記憶しようとする、如く凝と顔を見詰めるのであつた。兵卒は毎も大將の此の凝視を光榮に感じた、自分の顔が大將の頭にしつかりと刻まれたと信じた。黒木大將は此の煩瑣な敬禮の矢襖から逃れて漸く十字路の静かな島へ出た時、首を擧げて山峽の落日を眺めた。彼の長方形な顔、横に出た腮の骨、細くはあれど沈毅な光を包む眼、眞直な男性的な鼻、さうして、疎に生えた銀の短い鬚、其れ等は落日の光に剗然と照らされて見えた。

身動きもせずには彼は落日を見詰めた。其處には今歸らんとする一郎が次第に近付きつゝあつた。



「夜襲の路を考へていらつしやるんだ」と一郎は思った、彼は大將を驚かさないう様に靜かに歩み寄つた。と大將は突然聲を掛けた。

「奇麗な景色ぢやなあ」

「大陸の落日は莊嚴です」と一郎は言つた。

「一絶を賦すべしぢやね」

「閣下どうぞ……」

「私は詩も作らず田も作らず、凡人ぢや」

「閣下！ 夜襲には間もなからうと推察致します、どうか私を戦線に出られる様に御願致します」

一郎が此の事を出願したのは、これで三回目であつた。大將は又かといふ様な顔をして微笑を顔はしたが何にも言はなかつた。

「閣下！」と一郎は續けた。「此方へ参りましてから一度も砲彈を浴びません、我が第一軍は閣下の武威に依り最も艱苦を嘗めて而も連戦連勝、長驅して此處まで参りました、然るに淺見一郎は……」

「戦線へ出たいか」

大將は遮る様に言つた。

「はい」

「なぜだ」

「閣下！ 淺見一郎は華族の末席に列なり、陛下の殊遇の恩に浴して居ると共に國民羨望の地位にあるものでございます、平素特殊の恩を戴いて居るものは國家非常の場合には特殊の働きをしなければならん義務があると思ひます。今度の戦に於てこそ華族は一般兵卒よりも先んじて死ななければなりません、淺見一郎は一軍人としての義務と一華族としての義務と二重の尊き義務があると思ひます」

「解つた、もう可い」

大將は恐しくむつかしい顔をしてすん／＼歩き出した、一三歩出たかと思ふと直ぐ振り返つた。

「淺見副官！」

「はい」

「私は貴公が理職に満足せんことを望む」

「はい」

一郎は大將の後姿を見やつて歎息した、なぜ司令官が戦線へ出してくれないのか、自分の怯懦を慮つての事か、但しは身華胃の子だからといふのか。

こんな事を考へながら一郎は司令部へ歸らうとしたが不圖氣が付いて工藤軍曹を訪ねる事にした。



「工藤軍曹が居るか」

彼は板倉の前で馬を乗り廻して居る上等兵に慇言つた。

「はい、居られます」

此の聲が終らぬ中に一郎は板片で柵の様で吊つた處に帽子も被らずに泥だらけの頭を仰向さまに板に凭らして眠るともなく眼を閉ぢて居る三吉を見た。

「やあ、どうした工藤軍曹」

三吉はすつかり酒が醒めて居た。彼は訪問客は誰であるかを識別しなかつた、只彼は中尉副官の肩章だけを見て急に起つて敬禮しようとした。

「まあ可いよ、その儘で可い、酒がさめたか」

と一郎は言つた。

「あ、浅見中尉殿でしたか、どうも非常に失禮をしました、どうも非常に」

彼は頭をべこ／＼下けて泣き出した様な顔をして頭をほり／＼掻いた、乾いた泥がほろ／＼落ちた。彼は泥酔中にどんな事をしたか一向記憶しなかつた。只彼は小隊長に何か叱られた事だけを知つて居た。で彼は自分が何を言つたか其れを聞きたいと一郎に言つた。

「何でもなよ」と一郎は笑つた。丁度其時一人の騎兵曹長が青色の純種の西伯利馬に騎つて、一

としやくりしやくつて廻れ右をさせ、拍車をちやり／＼と鳴らして入口で降りた。

「可い馬だ、素的な馬だ」

慇言つて入つて来た。

「やい、生なしめ、泥龜の厄介軍曹、お前はあの馬を買つたのか」

「どうだか知らねえ」と三吉は煩ささうに言つた。「其れよりも俺は先刻小隊長の前で何と言つたか教へてくれ」

「馬鹿ッ、お前は自分で言つた事を知らないのか、後で聞かせらあ」

曹長は言ひ捨て、外へ出た。三吉は二三の兵卒にも同じ事を訊いたが誰も笑つて答へなかつた。

「なぜ君は酒を飲んだのか」と一郎は言つた。

「其れが其のね」と三吉はすつかり悄氣返つて言つた。「彼奴等を馬に縛り付けては見たが何だか面倒臭くて堪らないから殺してしまはうかと思つたんです、殺してしまへば其れつきりで何の役にも立たない、だが面倒臭い、若し彼奴等がブランドーを持つて居なかつたら私はボン／＼と片付け

てしまふんでした、酒を飲んで歩いてる中に段々快い氣持になつて……だが飲んだために重營倉を

食へば世話がないや」

「心配すなよ、君には其れだけの功があつたんだから」



「功があつても聯隊長の前で私は……」

彼はがっかりして再び思ひに沈んだ。突然何處からとなく叫び聲が聞えた。

「黙呼！」

聲は各隊を渡つて擴がつたり細くなつたり聽て雜然たる物音に紛れてしまつた。

「今度こそは副官殿」と三吉は立上つて武装しながら言つた。「もう御目に掛れませんよ」

「其れは御互だ」

「では副官殿」

三吉は手を差し出さうとしたが何か思ひ出して雜糞の中から一枚の葉書を出した。

「副官殿、これに貴方の御名前を御書き下さいませんか、母親の處へ出したいのです」

「よろしい」

「今一枚は」と彼はもちくくして言つた。「貴方の御妹さんの處へあけるんですから」

「僕の妹？」と一郎は不思議さうに言つた。

「停車場で見送つていた、いた御禮に」

「さうか」

一郎は一枚の葉書に署名した。騎兵中隊は鼎の沸く如き騒ぎであつた、ほんの一瞬間に兵卒は悉

く舍前に集まつた。鹿毛、黒鹿毛、栗毛、青、いろくいな馬はすらりと竝んだ。一人の兵は馬の首を叩いて、

「しつかり頼むよ、可いか」と懇願する様に言つて居た、しばらく馬列は動揺した。薄暮の微明の中に黙々として大きな歩兵縱隊が過ぎて行つた。其の後から砲兵隊が黒い巨大なものを曳いて行つた。南の山の尖りの上に微かな新月がうつすりと懸つた。

一郎が司令部へ歸ると其處で黒木大將はロンドンタイムス記者デヴィソンと埃國從軍武官カール大佐と其れから二三の幕僚と共に食事をして居た。彼は直ぐ食卓に召ばれた、食卓は中々陽氣であつた。タイムス記者は英國人に似ず氣輕な愉快な男で、彼が若し其の首筋と鼻の先が日に煨ける事を氣にしさへしなかつたら日本人向きの紳士だと言ふ事が出来るのであつた。其れと反對に埃國武官は奇妙に傲慢な態度があつた、尤も其れは四斗樽の様な腹を抱へてる故もある、彼は大石橋で半日乗り廻して馬を倒したので有名であるだけ肥大であつた、其の聲は埃國人共通の鼻音であつた。彼は軍事上の事は一切自分に聞けば解るといふ様な素振を見せた。彼は滔々と日露兩國の兵數に就いて述べた。

「本官の考では露西亞は歩兵百八十一大隊、日本は百二十三大隊、露國の大砲は五百門以上、日本は百門以上、これだけの差異でも大變な差異です、此の際日本が奇計を用ひなければ逆も正式の



作戦では極めて損な立場にあると思ひます、無論閣下の御胸算もある事でせうか」

「騎兵はどの位ですか」とタイムス記者はにやりとして言つた。

「左様、騎兵は」と大佐はガツ／＼と指を鳴らして言つた。「露國は百五六十中隊、日本は三十中隊位でせうか」

「なか／＼精察な調査で恐れ入りました」とタイムス記者は言つた。實際彼は恐れ入たのであつたが、腹の中では何か一つ抑捺つてやらうといふ好奇心が燃えて居た。

「眼力の確かなる大佐殿に今一つ質問を御許しを願ひます。露國の擔架卒は何人ほどでせうか」

「擔架卒？」と武官は眉根を寄せて煩ささうに言つた。

「擔架卒は露軍に取つて最も必要な兵です、死骸を運ぶだけでも戦闘員と同數位は必要でせう」

一郎は堪らなくなつて笑つた。武官は棒を呑み損つた人の様に反り返つたが仕方なしに笑つた。

「敵は舟や筏を造りつゝある事を貴方は御存知ですか」

武官は慙う黒木大將に言つた。

「はい」と大將は言つた。

「それに就いての御考は？」

「結構な事と思ひます」

「併し若し樂河を下つて前後の聯絡を絶つたらば？」

「其れだけ遼陽の兵力は減じます」

大佐は又しても指をガツ／＼と鳴らした。其れから彼は旅順の陥落が抄取らぬために日本の損害は非常に大きい、而して閣下も餘計な御苦しみをせねばならぬのだと半ば御世辭の様な半ば輕蔑の様な事を言つた。

「私を見る處では」と記者は眞面目な顔をして言つた。「旅順が長びく爲に日本は非常な幸福です」

「これは意外だ」と武官が言つた。「ぐづ／＼して居ると今に露西亞本國から新銳なる第五軍團と第一軍團が到着します、其れでも貴方は……」

「敵の兵力が大であればあるだけ、日本の武力が世界を驚かします」

武官はふいと横を向いてしまつた。一郎は居堪らなくなつて座を退いた。再び歸つた時に記者は日本婦人の丸鬘に就いて意見を述べて居た。白い首筋の上に乗つて居る漆の様に黒い丸鬘ほど魅惑を感じるものはない、此の點に於て日本の男子が毎も昂奮すべく餘儀なくせられて居るに違ひない、だから日本兵は強いのだと言つた。人々は笑つた。武官も遂に笑つた、其れは好意上から笑つてやつたといふ様な笑ひ方であつた。

最初から終りまで黒木大將は怒りもしなければ笑ひもしなかつた、左りとて客に無愛想を思はせ



る様な態度でもなかつた。彼は恰ら石佛の如く沈黙で、山上の湖水の如く靜かに深かつた。どツ／＼／＼といふ足音の潮が通り過ぎた、魔の如く輻重車が去り行く影が窓から見えた。副官は時計を見た。

「九時！」

黒木大將は椅子を離れた。憂々として劍の鳴る音がした、一郎は武装して外へ出た。前軍は今樂河に沿って進みつゝある、其れは沈黙の物凄き黒團の動きであつた。新月の覺束なき光は彼等の顔を微かに白く見せた、輻重はどうかすると、きらりきらりと光つた、劍や銃や輻重の桐油や馬具などが濡色に見えた、千嶮萬壑は今霧に掩はれて白一白の間にある。

或輻重馬は舍營の前で跳り上つて首を眞直に立てたので、車が駐つた、馬上の兵は鞭をしたたかに馬にくれた。後から来る輻重車が悉く駐つた。

「やい、しつかりしろよ」

後の聲々が聞えた。聽て其れが過ぎると急に靜かになつた。

「砲が聞えた」と大將は一郎に囁いた。

「い、え閣下」

此の答と共に遠くの遠くで微かな音が聞えた。

「初まつたらしいです」

「いや、未だ本ものにはならないよ」

大將は恚う言つて耳を欬てた。何とも言へない寂寞が水の如く冷やかに流れた。其れは極めて嚴肅な一刹那であつた。

「戦争の面白味はこれぢや」と大將は言つた。

岩 清 水

淺見一郎は支度を調べて居る中に砲聲は次第に激しくなつた。

「今日は激戦だぞ」

彼は恚う思つた。彼は初めて戦線に入る事を許された、而も其の任務は中央軍との聯絡を取るべき重大な使命であつた。元來遼陽攻撃の作戰計畫は三道並進の法であつた、鐵道線路の左側に添うて奥將軍の第二軍が行く、中央は野津將軍の第四軍であり、右翼は黒木將軍の第一軍である、第二第四は比較的平坦な路であるが、第一軍は千山萬岳重疊の難地である。此のために第一軍は他の友軍と山を隔て谷を隔て、全く孤立となつてしまつた。

今我が軍は、此に全力を盡くして遼陽に肉迫するに方り、中央軍と聯絡を取る事が最も必要な事



であつた。

彼は一束の草を我が馬に與へて其の首を二つ三つ叩いた。

『おい頼むぜ有明』

彼より十歩を離れて將校連が四五人で今朝幕營の前で破裂した砲彈の破片に就いて議論して居た。

『赤城山に似て居るぜ』と一人が言つた。

『いや御嶽の天狗岩に似てる』と一人が言ふ。

『聯隊長の鼻に似てる』と他の一人が言ふ。此の議論は軍事會議よりも八釜しく沸騰した。が此の時黒木大將が聯隊長と共に出来たので一同は沈黙した。聯隊長は恐しく色の黒い人で、顔は岩を固めた様に處々角ばつて居る上に鼻が二段に盛り上つて居る、丈は低い眼が大きく精悍の氣が溢れて居る。

『これが其の……』

大將は靴の先で大きな圖を地上に描いた。さうして其の左の肩に一點を置いた。

『早飯屯ぢや』

『ロマノフ少將が此處ですな』

大將は首肯して半圓の下の左と右に二點を置いた。

『孟宗房と岔路子だ、これを破りさへすれば、可いか、これぢや』

『フンロシを締め上げますかな』と聯隊長は言つた。大將は大きな聲で笑つた。

『締め上げてくれ』

『締め上げませう』

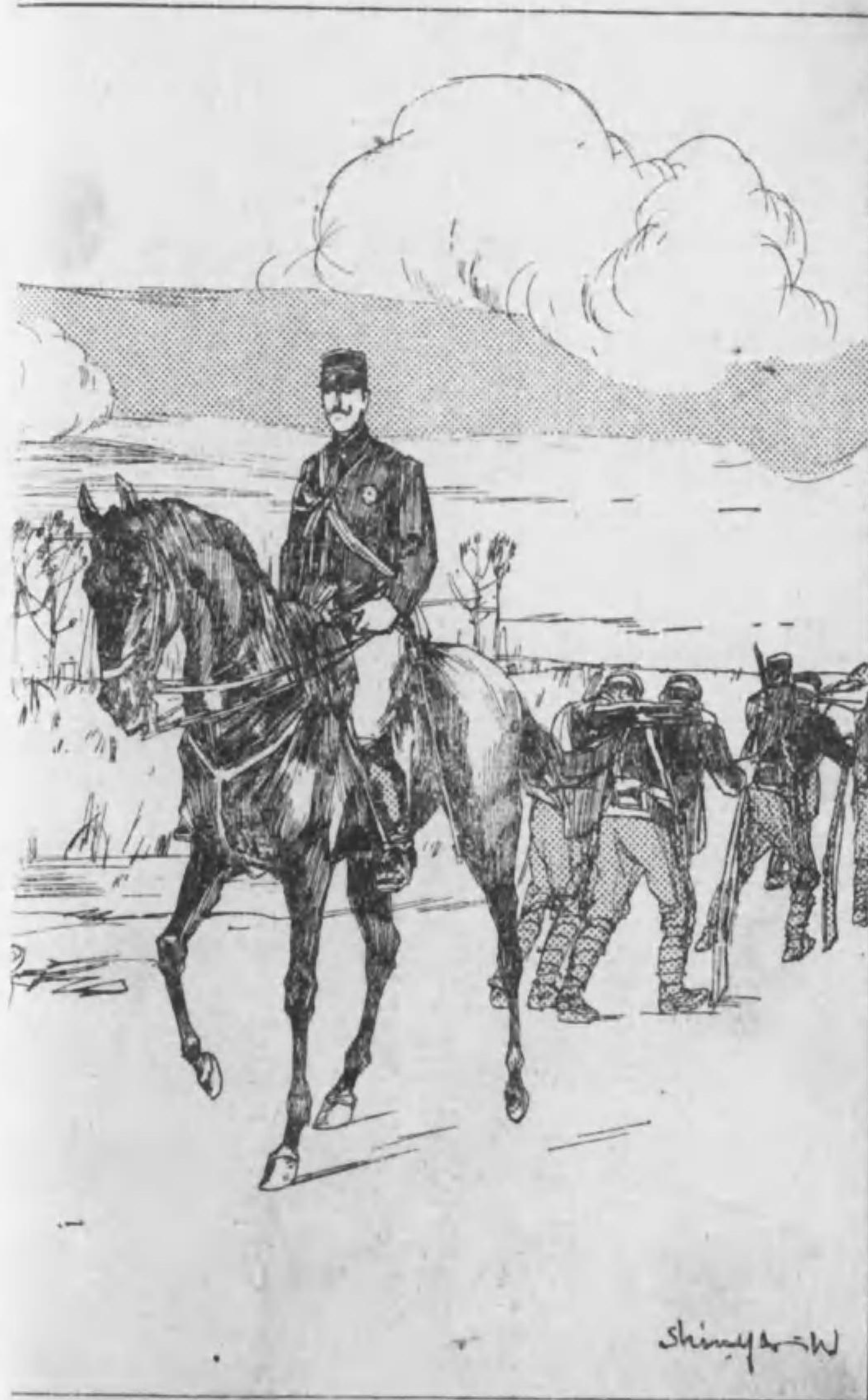
二人は堅く握手した。聯隊長は自分の洒落を此の儘に穿るのは惜しいといふ様な顔をして人々を見廻した。

一郎はそんな事を見たり聞いたりする餘裕がなかつた、彼は充分馬に水をやつてひらりと跨つた。彼は大將が自分を見詰めて居ると感じたので振返つて擧手の禮をした、大將は黙つて答禮した。

天は名残なく晴れて山の谷間々々から水蒸氣が昇つた。其れは綿の如く濃く、次第々々に薄く擴がつては山の中腹に休らひ、巔に棚引くのであつた。山々は朱と褐色に輝いて谷々に紫の巖を疊んで居る。南孟宗房から東山、磨背山、岔路子、黄家歳子、高力村に至るまで幾十の山、幾十の丘、幾十の高臺が丁度金米糖の角の様に數限りもなく連互重疊して居る、此の角と角との間の谷を縫うて我が兵は幾條の縦列となつて進み、横列を敷いて突進するのであつた。

山々、丘々から白い煙がバツと起ると、間もなく砲聲が谷々に反響して聞える、反響は近い山に強く轟いて次第に遠い山の方へ傳はつて行く、と次の煙が再びバツと立つ、右も左も、最高地







からも中腹からも、其等が一度に轟き出すと山の嶺は暫らく白煙に蔽はれて見えなくなる。

「今日はえらいぞ、なか／＼面白くなるぞ」

一人の副官が彼の背後から通り抜けて慙う言つた。其の馬は青毛で蹄は白かつた、きら／＼光る埃の中に白い蹄が紛れて見えなくなつた。一郎は其れを見送つてから又山々を見上げた、次第に山の形が變るに連れて今まで見えなかつた敵の砲臺や、彈藥を運ぶ兵や其處此處に散在する彈藥函と覺しきものなどが見えた。其等は馬の進むに従つて動いてる様にも思はれ、自分の眼界から遠くなつたり又近くなつたりした。

山裾に添うて崎嶇の路を辿り行くと砲聲が次第に衰へた、丁度帽箱を壓して屹立する大きな山のために日は全く遮られて薄暗い路が長く續いた。そこで彼は幾十人となき負傷兵を見た、擔架卒の顔は緊張して居た、ぞろ／＼／＼幾組かの擔架が過ぎた、負傷兵は大方重傷者であつた、或者は顔が砲彈の破片にやられたので蜂の巢の如く黒い穴が明いて居た、或者は繃帯が不完全なために動く度に腹から血がだぶり／＼と流れ出た。

「しつかりしろ／＼」と擔架卒が勵ます聲は何とも言へない悲壯を帯びて居た。

其等が過ぎると辛うじて徒歩の出来る負傷兵が喘ぎ／＼戰友の肩に凭れて、眼を一定の方向から動かさずに青ざめた顔を眞直に立て、歩いて行く、其の数は非常に多かつた。

「大丈夫だ、俺は引返して死ぬまで戦ふんだ」と言つて看護人を手古摺らして居る者もある。

微かな顫へる聲で、自分の弱氣を隠す様に銃を杖つきながら軍歌を唄つて行くものもある。其れから二三町も行くともう全くの修羅場であつた、無数の死骸が草原の上に横はつて居る、中にはまだ死にきれずに魚の様にびく／＼動いてるものもある、氣丈夫な者は黙つて眼を閉ぢたま、擔架の來るのを待つて居る。其處らには血が草を染めて、破れた軍服や佩劍や銃などが散亂して居た。死骸は大抵俯向に寝かしてあつた。肩に赤い肩章を着けた黒い上衣を着て帽子の紐を堅く結んだま、の背姿は又となく哀れに思はれた。

「近衛騎兵聯隊は何處か」

一郎は擔架に向つて訊いた。誰も答へるものがない、彼等は知らないのであつた。

「向ふの高臺の方であります」と一人の負傷兵がはつきりと言つた。其れは片手を取られた男であつた。

一郎は馬を其の方へ向けた、彼は數々の負傷兵や戦死者を見てすつかり昂奮して居た。

「露助の奴、覺えて居れ」  
幾度も／＼慙う言つた。彼は高臺に登り掛けた時に今まで山に隔てられて聞えなかつた砲聲が急に耳近く轟いた。面を擧げると遙かの正面の丘から濃い煙がばつと出た、同時にブーンといふ音が



空気を顛はして過ぎた。

「近いな」と彼は思った、彼は真直に丘に上つた。こはそもいかに！ 其れは我が軍の砲兵陣地であつた、彼が先づ第一に見たのは我が軍の砲がたつた六門しきやない事であつた。六門の砲は高地の上に梯字形に置かれてあつた、左の端から右の端まで四五町ばかりの此の高地はより高き敵の高地から見下されて居た。敵は塹壕があり掩堡があり、其の斜面を往來する兵の數まで讀める様に安全なものであるが、我が軍の陣地は急造の掩堡があるのみであつた。

「馬を降りなさい副官殿」

砲兵少尉が恚う注意した。其の聲が終らない中に砲弾が一つ十歩前に破裂して土煙が盛んに起つた、一郎は馬を降りた。彼は先づ一發の敵砲にどつしりと氣が落着くのを感じた、中央の砲は足元に大きな穴を明けられたので兵卒共は石を運んで穴を塞いで居た、彼等が石を運ぶ間にも砲は絶えず射ち続けられた、射つ度毎に砲が前の方へ傾きかけた。

「御辭儀をするなよ、向ふは露助だよ奴さん」と砲手が砲身を撫でて言つた。

「反つてく、うんと反つて威張つてやれ」と今一人の兵が言つた。

最左翼の砲が消魂しい音を立て、破壊された、一郎は濛々たる煙の中に舞ひ上つた一人の兵を見た、砲身は逆立ちして車は遙かに飛んだ、煙が消えると其處に死骸が二つ三つ残つた。

「米やがつたな、奴さん」

「畜生！ 生意氣な」

聲々が起つた。

最も猛烈なのは正面の一番高い山の上から絶えずやつて来る山砲であつた、其の右と左の丘にも二三門の砲が見えた、其の又後方に敵つた屏風の様な横に長い山にも三門の砲がある、すつと離れた左翼の高臺からは盛んに榴弾を發射して居る。

先づ正面の山の嶺にほつと白い煙が出る、右から左から、其等は丁度石鹼玉の様にふはくと圓く纏まつたのが一つ二つ三つ飛び出すと、きら／＼と日光に輝く、同時に左右前後の山々の煙と溶け合つて牛乳色となり天女の裳の様に軽く半天に薄れ行く。

瞬く間に十二三人が擔ひ去られた、敵の照準が次第に正確になつて来た。砲弾がヒユウ／＼鳴つて来る、破裂弾は山々を引裂く様に音たて、来る。

恚ういふ脅威や横暴が加はれば加はる程我が兵の顔は緊張した、死骸が運び去られると次の者が代り合ふ、其れもやられると又次が来る。一郎は初めて知つた。

「日本兵は強いなあ」

彼は其處を去つて最右翼の砲の後を過ぎようとした。此の時彼は其處に大隊長が屹と唇を結んで



立つて居るのを見た、彼の眼は憤怒に燃えて居た、彼は一郎の姿をちらと見やつた、さうして何のために此處へ来たかといふ様な顔をして唇を歪めた、破裂弾が益々繁くなつた、砲の周圍には負傷者を運ぶ兵や砲弾を運ぶ兵などが益々忙がしく立働いた、一郎は其處を立去らうとして丘の下を見やつた。

丘の下！

其處には一大隊の歩兵が蜿蜒長蛇の如く丘の麓を抱いて片唾を呑んで居る。彼等は突貫の命令を待つて居るのだ。彼等は既に背囊を捨てた、彼等は銃を提げたまゝ、片手に岩石を擱んで腹這になつて敵陣を睨んで居る。一郎は更に眼を向ふの谷間に放つた、其處にも一大隊の歩兵が控へて居る、其の前半は谷間の流れを遮る丘の彼方に隠れて、後半は丘の裾から街道の方まで續いて居た。

何處からとなく烈しい小銃の音が聞えた、パチ／＼／＼、ほんの一瞬間で其れが止んだ、と思ふ間もなく、向ふの山の麓から流れを決するが如く日本兵の群が現れた。彼等は退却しつつあるのだ。

「やられた」と砲兵大隊長が叫んだ。

「大隊長殿退却ですか」と大隊副官が言つた。

「いや」と大隊長は頑として頭を掉つた。さうして我が手で髯をもちやく／＼と揉み上げた。

「誰か退却と言つたか」

副官は黙つた。高臺の砲兵が依然として砲を射ち續けて居るに拘はらず、歩兵の先發隊は流を亂して退却した。彼等は四列に並んだ、路が狭いので隊形が亂れかけた、其れを中隊長が聲を囁らして制した。叱咤の聲、足音が亂雑に響いた。どツ／＼どツと足並が早くなつた、續いて突然軍樂隊の喇叭が聞えた、太鼓！ 其れは露國特有の樂隊である、ヒュウ／＼弾丸が飛んで来た、日本兵は谷を繞つて溪流の下へ／＼と退却した、もう一隊の露兵が隊を亂して追撃して来た。

「逃げ様が拙い」と砲兵大隊長が言つた。一郎は手に汗を握つた、日本兵の退却！ これ前代未聞の事である。

「大隊長殿！」と一人の士官が進んで来た。

「もう彈藥が五發しきやありません」

「五發を射て」と大隊長は言つた、さうして猶も脚下の歩兵戦を眺めた。

露軍は今や奔馬の勢を以て殺到した、其の白い軍服は谷に滿ち／＼と吾先にと日本兵を追撃した、其れは殆ど二大隊の兵であつた、彼等は一舉に日本兵を襲殺するのは此の時だと思つた。

「大隊長殿！」と一郎は夢中になつて大隊長に言つた。

「これはどうなるのですか」



大隊長が何か答へようとしたが味方の砲聲のために中止した。で彼は煙が半天に飛んでから言つた。

『どうもなりやしない、味方が勝ちや』

『併し退却は？』

大隊長は黙つて脚下に埋伏した一隊を指さした。

『突貫ちや』

聲が終らぬ中に潮の如き聲が脚下に起つた。

『バンザア』

山麓に鳴を静めて居た一大隊は突然敵の背後から一斉射撃をした。谷の間を突進して日本兵を追撃した露兵は此の背面からの伏兵に驚いて陣形を立て直す暇もなかつた、背進した日本軍は此の時悉く高地に上つて一齊に瞰射した。前も敵、後も敵、露軍は恰ら桶の中に採まる、芋の如く上を下へと渦巻くばかりであつた。

恐しい格闘が始まつた、前後を塞がれた敵は突貫より他に道がなかつた。剣と剣、銃と銃、石と石、突き合ひ投げ合ひ掴み合つた、一郎は初めて戦争の慘状を見た、彼はもう呼吸が吐けなかつた。

白兵戦が三十分も続いた後で露軍は三分の二の死傷兵を遺して退却した。一郎は丘を下らうと思つたが有明が何處へ行つたか見えなかつた、恐らくは砲弾を浴びて何處かへ走つて倒れたのだらう。で彼は徒歩で丘を下つた、二大隊の歩兵は猛烈な追撃を續けて一氣に敵の高地を占領しようとしてつある。谷間は双方の死傷者を以て流れが埋まつた、衛生隊は目覺ましい活動を初めた。

一郎が其處を通る時には日本の負傷兵がどうやら運び去られて、残るものは露國の負傷兵ばかりであつた。其等の仕事は輻重兵までが手傳つて居た。五六人の輕微な日本負傷兵が一人の露兵を圍んで罵つて居た。露兵は六尺もあらうと思はれる大兵の男で東部狙撃兵に屬するものであつた。

『此奴だよ、俺の肩を突いたのは』と一人の日本兵が言つた。

『俺の身體を振り廻して石に叩き付けやがつた、恐しい力の強い奴だな』

『馬鹿々々しい程強い奴だ』

彼等は憎さが一ばいであるが一面に於て餘りに強い此の男の力を感歎せずには居られなかつた。男は片腕を深く斬り込まれた上に脚を斬られたので動けなくなつた、彼は自分で腕や脚を繃帯しながら今にも虐殺される人の様に恐怖に満ちた顔をして人々をちらりと見やつて居た。で日本兵が笑ふと、彼も亦媚びる様に笑つた。彼は露西亞語で何やら言つたが誰も通譯する者がなかつた。で彼は自分の手を口の處へ當て、水を飲む真似をした。



「喉が渴いたんだとき、畜生糞澤を吐かしやがる」と一人の兵が言った。

「飲ましてやれよ、出血すると渴くよ」と他の兵が言った、さうして彼に水筒を貸してやつた。彼は感謝の表情をして水筒を口に付け、「と息に飲んで其れから彼の膝元に今息を引取りかけて居る重傷兵の口に注ぎ込んでやつた。其れは色の白い優しい顔で、黄金の髪が額に泥と共に粘り着いて居た、彼は水を飲んでから胸に組んだ手をばたりと下に垂れた、指に指環が輝いて居た。

「女房があるんだ」と一郎は思つた。

逆襲の露兵に押し戻されて退却した我が二大隊が、側面の谷間から突撃した友軍に救はれたのは實際作戦以上の奇功であつた。前後の我が軍は逃げる露兵を追撃して右翼の高臺を占領し、其餘勢を以て更に正面の歪頭の山に一氣に肉薄した。

一郎は其處を去つて今しも早足で以て進み行く工兵隊と共に左へ左へと進んだ、右翼からの山の尾は大第に低くなつて、こんもりとした左の森の處で盡きた高梁、畠の上に白い屋根や赤い屋根が二つ三つ浮いて見えた。左は幅の廣い街道で其れと筋違に小さな河が流れて居る、一郎は其處で工兵隊と別れて丘の上に登つた。其處は聯隊本部で四門の砲が据ゑられてあつた、其處には絶えず騎兵の斥候や、砲工輜重各種の幕僚達が往來して居た。彼等は右翼が有利なる戦闘状態となつたので作戦を轉換する必要を感じた。高聲に人々は語り合つた、彼等はもう砲聲に慣れて二十メートル前

に爆弾が破裂しても驚く者がなかつた。

「随分擴けたものだ」と聯隊長は望遠鏡を取つて山の尾の左端を見ながら參謀に言つた。さうして敵の主力陣地が何處にあるのか實際解らないと言つた。

「向ふの鉢巻形の丘です」と參謀が言つた。

「さうらしいね、えらい處に陣地を取つたものぢや」と聯隊長は笑つた。

「えらい奴ぢや」と參謀が言つた。えらいといふのは無敵砲を意味してるのか、勇敢を意味してるのか他の者には解らなかつた。だが、我が軍が右翼の山に全力を注ぐのを待つて敵は河を涉つて左翼の街道筋から強襲する計畫である事は何人も想像が出来た。

そこへ人波を押し分けて騎兵第二中隊長が恐しく昂奮した顔をして聯隊長の傍へやつて来た、彼は丈が低く痘痕のある顔で恐しく早口であつた。

「どうしても突撃をやらして下さい、聯隊長！ 敵は今必ず猛襲をやつて來ます、今砲を高臺に引上げてしまつたら必ずです、其の前に突撃を……騎兵と騎兵の勝負をやりたいです、哥薩克は我が騎兵を侮つて居ます、我が騎兵は……聯隊長！ 我が騎兵は……」

「聯隊長は其れに答へずに慙う言つた。  
「中央軍は？」



「もう連絡が取れました、小銃が聞えました、あの山の邊に」

中隊長は最左翼の山を指さした、其れから又繰返した。

「騎兵の突撃を聯隊長！ 日本騎兵の名譽のために……」

一郎は我が使命の終れるを感じた、で彼は騎兵中隊を訪ねた。丘の上の敵は俄然馬脚を露出して猛烈に發砲した、幾つもく覺み重なつた山々からも一齊に發射した。

「そら来たぞ」と聯隊長は砲身に眩を凭らして言つた。「まだくやつては不可ない、まだく」だが敵の砲弾はズシンと間近の砲車の前に落ちた。其れを手始として破壊の音、爆裂の音が土煙と共に起つた。後に控へた馬が悲鳴を擧げて身を跳らせく遠くへ走つた。

「擔架ア」と呼ぶ聲が聞えた。此の騒擾に押されて一郎は漸く騎兵中隊の營地へ入つた、形ばかりの掩堡の下に中隊は今動揺しつゝあつた。彼等は盛に怒鳴つたり笑つたり怒つたりして居た。其の後方の坂路の上り口から今一臺の砲車が曳き上げられんとして居る、砲は右翼から廻送されたもので、此處まで来る途中で二度ほど敵の破裂彈を受けたので砲身に眞黒な血がこびり付いて居た、車の片方がどうがするとガタンと傾きたがるので、其處に居る騎兵が五六人で其れを支へてやつた、馬は汗だらけになつて口から白い泡を吹き出し、坂を上らうとしては曳き戻されて足を立て直すために、前馬と後馬は重なり合つて倒れさうになる、其れを砲兵が鞭で以て一生懸命に撲り

付ける。

「後生だからもう一息踏張つてくれ、おい、味方の大事だぞ」

砲兵は泣き出しさうな顔をしてびしりと打つ、同時に「えいえい」と聲を掛ける。

「皆来い」と騎兵連が言つた。瞬く間に二十人ばかりの兵が砲兵等と力を合せて曳き出した。

「よいしよ、よいしよ」

車はする／＼と坂を上つた、六頭の馬が霧々地に走つた。

此の騒ぎのあつた坂から少し離れた斜面の崖に五六人の騎兵が話して居る聲が聞える、其處から煙草の煙がポツ／＼と出て崖端の草から離れて飛んで行く、突出た崖の赤い切斷面の下から遠く廣々とした高梁、畠と其れに連なる青空が見える。

「其れぢや貴様は何の爲に戦争をするんだ」と一人の聲が言ふ。

「死にたくないからよ」と太い聲が言ふ。

「死にたくないから戦争する奴があるか」

賛同の聲々が起つた。

「何と言つても俺は死にたくない」

「ぢや逃げるか」



「逃げやしない」

「貴様の言ふ事は解らないよ」

「貴様は頭が悪いぞ、可いか、俺はどんな場合にも死ぬまいと思つてる、死んでは不可ないと思つてる、敵を殺すのは仕方がないから殺すんだ、殺さなけりや俺が殺されるからな、只其れだけだ」

「國の爲だよ」と聞慣れない聲が言つた。

「國のためなら生きる方が可いちやないか」と太い聲が言つた。

「一體、人間が人間を殺して其れが自分の國の爲になるといふのは誰が發明した理窟だらう」

人々は笑つた。

「馬鹿だな貴様は」と太い聲が言つた。「俺達は牛や鶏や魚を殺して食つて生きてるぢやないか、強い者は弱い者を食つても可い様に神様が許してるんだ」

「さうかも知れねえ」と感服の聲が出た。

「さうだらうな」

「だから俺は死なないんだ、弱い奴は死ぬんだ、強い奴が一人残るんだ」

太い聲は工藤軍曹だと一郎は思つた、彼は崖の上から下を覗いて聲を掛けようとした時、バリバリといふ破裂弾の音が半空に轟いて、其處らは土煙に眼を開く事が出来なくなつた、喝采の聲

が起つた、煙の下から騎兵達が一目散に丘へ登つた、一番後れて工藤軍曹が二本の指で煙草を口に當てたまゝ、のそくと登つて来た。

「やあ工藤！」

「おう」

軍曹は手を差し出した、一郎は其れを握つた。と此の時急に進撃の命令が下つた、騎兵達は一瞬間に馬に騎つた、軍曹は煙草を地に捨て、上衣の釦を掛けながら走つた。

森の彼方に一點ほつと白いものが現れた、それが二點三點と殖えるかと思ふと槍がきら／＼光つてるのが見えた。

「来たぞ／＼」

聲を出すまでもなく、味方の騎兵が一度にさつと丘を降りた、丁度兩軍の衝突すべき街道の中心が横に突出た丘の根に遮られて其の附近は見えなかつた、二列の縦隊が轡を並べてやつて来た、其れが丘の根の處へ来てから先頭は姿を消した、後軍は蜿蜒と長蛇の如く小河の橋を渡つて猶森の中から續いた、彼等は途中で二手に分れた、一縦隊は左の高梁、島に添うた細い路を取つた。

哥薩克兵の列はいつまでも絶えない、白い帽、白い服は黒や褐や赤毛の馬の上に雪の如き波をうねらせて、土煙の中を霧々地に駆けて来る。



「突撃だ」

砲兵陣地はさつと色めき立つた、砲火と銃火を物ともせず飛ぶが如くに寄せて来る此の騎兵の突撃に對して味方は餘りに不防備であつた、と思ふ間もなく、丘の根方に我が騎兵の一隊が現れた、白い泡が岩の根を噛む様に露兵の大きな波が此の丘を踏み越えようとしては打ち返され、又押寄せては押戻された。

「馬を貸してくれ」

一郎は慙う言つたが最早其處に騎兵が一人も居なかつた、彼は向ふから無數の馬が逃げて来るのを見た。彼は丘を下りた、さうして一頭の青毛を捕へてひらりと騎つた。彼は此の危急を師團本隊へ報告しようと思つたのである。だが此の時左の高梁、畠から何時の間にか敵の歩兵が迂回して居たのに氣が着いた、彼は山の麓から谷路を取らねばならなかつた。彼は再び砲兵陣地へ引返した。砲兵隊は極めて静かであつた、多々良隊長は騎兵隊の衝突を知らぬもの、如くに大砲の下に立つて正面の丘を望んで居た。砲弾はドシンと大地を揺つて背後で破裂した、隊長は煙の中に立つて矢張り言續けた。

「もう一點！」

大きな砲手は砲の口へ弾を入れて、さつと身を退いた。砲がぎり／＼鳴つた、朱龍の如き炎がさ

つと砲口を出ると同時に轟然と響いた、暫らく四邊は煙に包まれた。

「隊長殿、騎兵が今苦戦中でありませう」と一郎が言つた。

「さうか」

隊長は軽く受け流して、

「二點だ、二點！」

彼は砲撃に夢中であつた、彼は戦争は大砲だけで可いのだと信じてる様に見えた。果して敵の砲臺からばつと火が燃え上つた。隊長はそこで自分の前に展開する戦線を見た、刻一刻に傳騎がやつて来た、街道の丘の我が騎兵は次第々々に谷間へ追ひ詰められつ、あつた。隊長は凡ての事は豫期した事の様に極めて平靜に命令を下した。

「今五分間だぞ」

敵の騎兵が次第々々に日本兵を谷地へ壓迫して一方の縦隊は早くも丘を越えて来た。

「後備を出せ」と隊長は言つた。

一郎はもう堪らなくなつて師團への大冒険を計畫した、彼は馬をひと廻し廻して丘を下りた。ぞろ／＼と負傷兵がやつて来るのに逢つた。一郎は剣を抜いて額にひたりと着けて念じた。

「神よ、願はくは正義の國を護り給へ」



木街道では我が騎兵が算を亂して退却した、が中隊長は其等を叱り付け、幾度も馬首を立て直した、僅かに一中隊が二大隊と戦ふのだ、勝ち得べき筈がない。

一郎は馬に鞭つて疾走した、彼はヒュー／＼唸る銃弾の音を聞いた、彼は自分の左の小河の畔で敵味方が亂闘して居るのを横目に見やりながら谷を指して走つた。と彼は自分の行手に五六騎の露兵を見た、彼等は自分と同じ方向に走りつゝ、あつたのだが、一郎を見るや否や直ぐに馬の頭を向け直した。

『しまつた』

慙う思ふと同時に彼の前にすうと馬を乗り出したものがある。其れは工藤軍曹であつた。

『御任せなさい、副官殿』

一郎は横に走つた。其處に三又の路があつた、一は橋へ、一は丘へ、一は谷へ、此の路の真中に立つて一郎は工藤軍曹いかにと背後へ振返つた。馬と馬とが躍りつ狂ひつ確とは見えぬが、敵が一人落馬した事だけが見えた。

途端に彼は一人の露兵が真直に一郎目掛けて突進して来るのを見た、彼は槍を持つて居た、一郎は屹と馬を立て直した、敵は遮二無二突進して来た、右に拂ひ左に拂ひしてる中に敵の身體が少し俯伏になつた、一郎は上段から振りかぶつて肩から胸まで斬り下ろした。其れは丁度西瓜を斬る様

であつたが、併し其の手の内に響いた一種の柔かな温い感じは彼が今まで一度も経験した事のない微妙なものであつた。露騎兵は馬の平首にぐたりと突伏したが、する／＼と滑り落ちた、さうして両手を重ねたまゝ、横向に倒れた。馬は其の周圍に二度三度躍り上つた。

一郎は再び谷間へと進んだ、突然彼の背中が棍棒に壓された様な気がしたので彼は鎧を踏みしめて平首を抱いた、不圖氣が付くと平首は點々として血に染まつて居る。

『お前やられたか』

彼は馬に慙う言はうとした時自分の胸に痛みを感じた、同時に彼はぬらくと血汐が腹の方へ流れ行くのを知つた。彼は釦を外して胸を見た、胸は眞赤になつて居る。

『貫通銃創だ』

彼は慙う思つた、が此の時彼の両手が急に倦くなつた、彼は馬を下りた、彼は馬の雜囊を檢めた、其れには慙う書いてあつた。

(近衛騎兵第二大隊第二中隊第三班馬淵豊太郎)

『馬淵といふのは曾日聯隊長の前でシヤレを言つた男だ』

慙う彼は思つた、さうして其れから繻帯や絆創膏などを出した。次に彼は靜かに／＼馬を牽いて溪の流れを溯つた、大きな岩が犬の牙の如く相食み相重なつて次第に奥深くなると共に日影が全く



届かなくなつた。一郎は其處で上衣を脱いで胸の傷を洗ひ、清水を布に浸しては冷やし初めた。背中の傷口は左ほど大きくなかつた。

凡ての手當を終つた時彼は初めて疲勞を感じた、凝と岩の上に身體を横へて耳を蔽てると遠くの遠くで夢の様に砲聲が聞える、其れは殺伐な響ではなく、深山の木を樵る斧の様に鈍い静かな音であつた、谷の兩岸に松や楓が生え茂つて、細い葉と葉が一ばいに重なり合つて居る、折り折り小さな鳥が一番高い枝に宿まつては美しい聲を出して啼きしきると、奥の方で又其れに和して同じ様な啼聲が聞える、音といふ音は全く其れきりである、一郎は雜糞を枕にして凝と天を見た、兩側から狭められた崖に參差として茂り合ふ樹木の葉蔭を透して高い高い青天が見える。

「仙境だ」と一郎は口の中で言つた。阿鼻叫喚の修羅場に引替へて、これは何といふ静寂な世界だらう。人間は互に殺し合はうと血と血を注ぎ合つてるのに、大自然は一向無關心で何千年何萬年以來の閑寂と莊嚴とを保つて居る。

「これは何とした事だらう」

突然彼の頭の上に人の聲が聞えた、彼は起上つて馬の頭を撫でた。

「黙つて居てくれ、なあ馬淵君」

馬は耳を動かして鼻を一郎の肩に擦り付けた。

人聲は暫らくガヤ／＼と續いた、其れは露西亞語であつた、が其れも直ぐ止んだ、涼しい風がさや／＼と木々の葉を鳴らして過ぎた、一郎は再びころりと横になつた。

「若し俺が此處で死んだらどうなるだらう」

忽然として恐怖が彼の五體を襲つた、彼はがた／＼頭へ出した。

「死にたくないなあ」

若し此處で俺が死んだら……さうだ此の静かな大自然は決して死なない、松も死なない、楓も死なない、水の流れも、峨々たる岩も、而してあの葉蔭を透して高く／＼見える青天も決して死なない、死ぬものは俺ばかりだ、俺の死骸が腐つて此の清い水を汚すだらう、だが何人が……何人が其れを知るだらうか。

彼の眼にはつきりと父の顔、母の顔、妹の顔、親友小南と小柴の顔、其の他の人々の顔が浮んで來た。彼はとろ／＼と眠くなつた、眠つてはならぬと彼は思つた、で眼を溪水の流れに移した。ちよろちよろと水は音たて、石に嘯き砂を誘つて落ちて行く、其處の岩の根に二三匹の蟹が這ひ上らうとしては落ち又這ひ上らうとして居る、一郎は其れを見てる中に又眠くなつた。

「此の儘死ぬんぢやなからうか、恙う眠くては仕様がな」

恙う思ひつゝも彼の眼は磐石の如く重くなつた。青い翼の小鳥が高い枝から段々低い枝へ移り、



其れから溪の水に尾を濡らして岩の上に飛び移つた、蟹は依然として其の根元を上らうとしては續けて居る。

新 聞 記 者

九月の初めの暑い日であつた、小柴敬三は例の如く自轉車に乗つて數寄屋橋を渡り真直に進歩黨の本部へ行かうとした、當時日比谷公園は土工中なので、通路は遮断せられ、橋から右の方へ彎曲した假道を行かねばならなかつた、日本に電車の出來たのはつい二た月ばかり前で、濠洲の方を行線路は市街鐵道といふ會社の經營であつた、何しろ電車なるものが初めての事であり、車臺は凡て米國の使ひ古したものを安く買ひ入れて富塚惣兵衛が巨利を博したといふ噂があるだけに、脱線や衝突が頻發した。車臺が少いために乗客は數寄屋橋の西に一時間以上も佇立しなければならなかつた。一臺が來ると人々は殆ど喧嘩腰で争うて乗つた。此の喧騒の最中を一臺の馬車が群集に押されて進む事もならず退く事もならず、馭者は馬の手綱を引き締め頼りに鞭を當てるが、一寸も動く事が出來ない、馬は打たれる度に頭を高く擧げるだけで直ぐ背後へたじ／＼と引退る、其れを見た見物人は一齊に喝采した。車上の紳士は白いヘルメット帽を被り白緋に黒緋の羽織に袴を穿いて居た、彼は扇子を披いて自分の胸を煽いで居たが堪りかねて馭者に何か言つた、馭者は首を傾け

て苦笑した、其れはどうする事も出來ないと云ふかの如く見えた。紳士は葉巻の太い煙を漲らして反り返つた。さうして虚勢を張る如く腹を前に突き出した。

敬三は此の紳士を知つて居る、此の馬車をも知つて居る、馬車は梅園伯爵のものである、さうして紳士は伯爵の腰巾着永井鷗眠であつた。

東京には一定の職業もなく華族の様な生活をして政界に出入したり花柳界で幅を利かしたりする怪しき者がある、鷗眠は其の類である、彼は小肥りの赤ら顔で、三十五六歳、佛蘭西語が巧みでも漢詩も作り、第一の天才は梅園伯爵の質書を書く事である、實際彼の書いたものに伯爵の落款を捺せば何人も疑を挟むものがない、伯爵自身すら眞實の區別が付かぬのであつた。

其れだけの材能かといふにさうでない、彼にはいろ／＼な藝がある、中にも酒を飲む事は天下無敵と稱せられて居る、性來ののんき者で、時には百圓札の二三十枚も袂に押し込んで思へば銀座の往來で通りすがりの藝者を呼び止め、五十錢を借りて煙草を買つたといふ逸話もある。無論彼は梅園伯爵の葉巻をいつも失敬して來るので、豊かな紫の煙を匂はして居るのだが、煙草に限らず彼は何でも伯爵のものを失敬する、磊落な伯爵は決して其れを咎めなかつた、伯爵は鷗眠の恬淡寡慾を愛して居た。

『伯爵の馬車を失敬して來たな』と敬三は早くも覺つた、彼は群集に遮られて、自轉車を降り、鷗



眠がいかにかに此の混雑を切り抜けるだらうと眺めて居た。

號外が頻りに飛ぶ、鈴の音と呼ばはる聲とは人の心を絞る様に續いた、群集は號外を見て一様に「ふふん」と笑つた、戦争に勝つのは少しも珍らしくない、稀には負けないと張合がないなどと言ふものもあつた。だが凡ての荷車や人力車、自轉車が群集と共に益々混亂を極めた。群集の中には梅園伯の定紋を知つて居る者があつた、で其の男は兩手を舉げて叫んだ。

『梅園伯爵萬歳』

群集は初めて梅園伯だと知つたので一様に萬歳を浴びせた。鷗眠は頗る狼狽したが、左りとて私は伯爵の巾着であるとも言ひ兼ねた、そこで帽子を脱いで一禮した。群集の中には伯爵としては餘りに若過ると言つたものがあつた。

『賢だ』

『いかさま者だ』

恚ういふ聲が起つた、鷗眠は頗る得意になつて葉巻の煙を輪に吹いた。群集は益々ざわついた。

『賢物萬歳！』

五六人の聲が起つた。鷗眠は其の人達の方へ向いて又帽子を脱いで一禮した、群集はすつかり氣に入つてしまつた、笑聲がどつと起つた。電車路の横手は瓦斯管の工事中なので人員は益々加はつ

た、工夫等は一生懸命に土を埋めて其の上に菰と板とを渡しつゝあつた。鷗眠は此の時馬車の上から敬三を認めた。

『おうい、小柴おうい』

敬三は黙つて只にやりとした。

『乗れよ小柴、おうい』

『僕は自轉車だ』と敬三は言つた。

『自轉車も載せろ』

『うむ、載せようか』

『困ります』と馭者が言つた。

『やあい、馭者に叱られてらあ』と一人の小僧が大きな聲で言つた、皆が笑つた、馭者も笑つた。

漸く修繕が終つたので群集が崩れ出した、馬車に沿うて敬三は歩いた。

『おい來んか』と鷗眠が言ふ。

『何處へ？』

『山だ』

『行かうか、誰が居るんだ』



「伯が居る、其れから……」

「お前の御菊か？」

「なかに俺のと決つてゐるわけのものぢやない」と鵜眠は扇子をばちくと鳴らした。

二人が山と稱するのは紅葉館の事である、紅葉館は華胄統袴の遊興所として東京唯一のものであつた、松の間付の間梅の間百卉花木を以て名づけた大房小房、蜿々として連なる廻廊、其處には京都から一粒選りに選り抜いて連れて来た美人が殆ど百人近くも居る。矢絰に豎矢の字文金の高髻、日本古来の風俗を其の儘に又兵衛や歌麿の繪から脱けた様なものばかりである。

國の元勳であり政界の大御所と呼ばる、春木侯爵は紅葉館が大好きであつた、彼は決して新橋や柳橋の暗香を追ふ事をしなかつた、偏狹であり潔癖を以て甘んじて居る彼は、狹斜の巷を極めて不潔な場所だと思つて居た。彼が何等かの集會に出席するのは紅葉館と限つて居た。彼は紅葉館の女中達が凡て京都風であり、其の動作は一切純日本式の禮法であるのが氣に入つた。

其れに反して梅園伯は紅葉館を田舎者の俱樂部だと罵倒して居た、彼は毎日毎夜花柳の巷で飲み明かした、其の頃は赤坂を本陣の様にして居た、花柳界では彼を「爺さん」と綽名して居た。

紅葉館を嫌ひな梅園伯がどうして今日紅葉館に来て居るのか、其れは敬三の一疑點であつた。其の頃都下の明治新聞は筆を極めて警視廳の攻撃を續けて居た、明治新聞は敬三の東洋新聞と丁度互

角の力で學生や勞働者に人氣のある新聞である。選舉の干渉、治安警察の紊亂、贈賄收賄、官憲黨御用商人の保護、警視廳監の私行、其れ等は毎日々々二號活字濫用の極めて誇張した文章で書かれた。發行停止又停止、幾度も停止されるが決して撓まない。時の總監は長閨の大御所の股肱で縦横の策略と精悍の氣象を以て名ある人である。世間では明治新聞の警視廳攻撃は即ち長閨攻撃であり現内閣攻撃であると稱して居る、或る人々は貧乏な明治新聞が數回の停止に懲りずに益々巨砲を打ち續けるのは富塚惣兵衛が出資者であるからだと言つた、又或人々は明治新聞の背後には梅園伯がある、伯が春木侯の權勢を殺がために明治新聞を利用して居るのだと言つた。

二人が紅葉館の玄關に立つた時鵜眠は女中共に慙う訊いた。

「親父は？」

「まだいらつしやいます」

「誰か來てるのか？」

「はい」

「誰だえ」

「其れは申上げられません」

「女か」



女中は笑つた。

「ちや別室へ行かう、僕が來てる事だけ言つて置いてね。」

二人は小さな座敷へ入つた。羽織を脱いで坐るや否や鷓鴣は聲を潜めて言つた。

「實はね、君だから言ふがね、大變な事件が出來たんだよ。」

「どんな。」

「書いちゃ不可ないよ、君と僕の間だけの事だ、實際困つちまふよ、僕をね露探だといふんだよ。」

「君を？」

「敬三は吃驚して訊き返した。」

「僕がね、露國人に軍事上の秘密書類を賣つたといふんだ。」

「誰がそんな事を言ふんだ。」

「警視廳がさ、そして其の同類は明治新聞社長の高峰素之だといふのだ。」

「復讐だよ、其れは。」

「うむ、其れは解つてるさ、だが他の事と違つて此の問題は一つ間違ふと日本に居られなくなるからな。」

どんな事でも太平樂を並べて澄まして居る鷓鴣も、苦痛の色を顔に浮べていかにも悵然として

居る。

「僕が佛蘭西語が出来るだらう、佛人とは随分交際がある、不幸にして佛蘭西は露西亞を後援して居る、其のために僕は……。」

「君は佛蘭西人と交際を續けて居るのか。」

「無論、今までと異りはないよ、随分一緒に飲むさ。」

「其れが不可ないよ、此の場合其れは瓜田の履だ。」

「併し其のために僕が露探の嫌疑を受けようとは夢にだつて思へないぢやないか。」

「其れもさうだが、ちや佛蘭西人の手を経て書類を賣つたといふんだね。」

「露國生れで佛蘭西に籍を有つて居るボーリユーといふ男があるんだ。」

「君と懇意か。」

「うむ、頗る懇意だ。」

「困つたなあ、して君は其の男を高峰に紹介したのか。」

「さうだ、僕はボーリユーを此處へ連れて來て日本料理を食べさせて居た時、隣室へ高峰が來て居

たもんだから其の時に紹介した。」

「其れだけか。」



「ボーリユーの奴なかく女好きでね、僕が吉原へも案内し、藝者も韓旋してやつた」

「愈々困るな、君の品行が宜しくないよ」

「變な事を言ふなよ、君はどうだ」

「僕は飲んで暴れるだけだが、君は外人と餘り接近し過ぎるよ、酒を飲むにも女を買ふにも友達を選ばなきや不可ん、君は餘りに茫漠として何んな奴とでも握手するからこんな事になるのだ」

「親父と同じ様な事を言ふね君は」

「瞋眠はすつかり悄氣返つて、僕はな、昨夜さんく親父に叱られたよ、お前は籬のない桶だ、羽織を着ても紐を付けない人間だ、瓢箪でも締め括りがあるのに貴様はノツペラボ一の冬瓜だつてね」

「そこで君はどうする積か」

「親父は自然に任せろといふけれどもね、黙つて居るわけにも行くまいしね」

「警視廳から何とか言つて来たのか」

「今日も實は行つて来たのだ」

「取調か」

「正式ではないがね、其れにもう一つ困つた事にはボーリユーに一人の女があるんだ」

「日本人か」

「うむ」

「君が取持つたのか」

「さうぢやないが紹介しただけだがね」

「其れがどうした」

「僕とボーリユーと女と三人で熱海で落合つた事がある」

「女は何ものか、藝者か素人か」

「素人だ、貴婦人だ」

「貴婦人？」

「警視廳では貴婦人が何者であるかを僕に訊問するんだ、僕が其れを言ふとボーリユーと貴婦人の名譽を泥に打ち込む様なものだ、どうしても言へない、だから忘れたと言つて来た」

「貴婦人は誰か」

「君にも言へない、其れだけは堪忍してくれ」

「其れはさうだ、だが君は伯爵に言つたかね」

「伯にも言へないのだ、伯と貴婦人とは……」



『あゝさうか』

『併し』と敬三は力を込めて言った。

『露探の嫌疑を受けるよりは寧ろ其れを言ふ方が可いよ』

『其れだけは困る、よしんば其れを言つた處で警視廳はあゝさうかと言やしない、警視廳は理が非でも高峰を露探として社會から葬らうとして居るのだ、それに又盛に警視廳を煽動して明治新聞を潰さうとして居るものがある』

『誰だ』

『君の新聞社長石阪倉平だ』

『僕の社長？』

『うむ』

敬三は驚いて鷓眠の眼を見詰め、

『本當か』

『うむ』

『僕の社長がなぜそんな事をするのだ』

『商賣敵だからさ』

敬三は黙つた。

『併し』と彼は暫らくあつて言つた、『社長と警視總監とは仲が悪いぜ、いつか僕の新聞で攻撃した事がある』

『攻撃はしたが中止したらう、石阪は弱點を警視廳に抑へられてるんだ』

『何の弱點か』

『いつか華族攻撃の記事でね』

『さうか』

社長の石阪に就いて恚ういふ忌しい風評を聞くのは今が初めてでない、世間では彼を惡魔の如く言ひ做して居る、併し同じ室で向ひ合つて語ると彼は左までの惡人とは思へないのである。

『それで君はどうする積か』

敬三は話頭を逆戻りさせた。

『どうにかなるだらう、場合に依つたら僕は外國へ行くよ』

『其れは不可ない、露探の嫌疑を受けて外國へ行つたら猶更世間に怪しまれるぞ』

『さうか、だが僕としては方法がない』

二人は途方に暮れて酒をちびり／＼飲んだ、と廊下に二三人の足音がした。



「御危うございますよ」と女の聲。

「何處だ〜といふ聲は伯爵である、鷗眠は縁側へ出た。」

「おい早く来んか、何をしとる。」

伯爵はほんの少しばかり額際が赤くなつて居たが、足元は大分よろけて居た。彼も亦鷗眠と同じ様な白緋を着て居た。

「はい、只今」と鷗眠が父にものを言ふ時の様な眼をして言つた。

「友達か居るのか。」

「はい。」

「誰だ。」

「小柴君です、東洋新聞社の……。」

「東洋新聞？」と伯爵は女中に手を任せながら片足に力を入れ片足を浮かして踏み止まつて言つた。

彼の眉に深い皺が現れた。

「小柴君です、伯爵、小柴君で。」

「敬三は起つて御辭儀をした。」

「あ、君か、さう〜、君は東洋に居るんだつたね、君の親父さんは私と大變に仲が悪かつたよ、

はッ〜君主獨裁政治主義者でな。」

「其れは知つて居ります伯爵、父は頑固過ぎました」と敬三は言つた。

「だがえらい人物だつたよ、君などは迎も及ばん、東洋新聞記者なんてそんな小さな人間ではなかつた、まあ来い、私は親父に代つて説教してやる。」

伯爵は急に機嫌が變つて、にこやかに女共に圍まれながら元の座敷へ歸つた。其れは最も奥まつた十二疊の室で、庭の木々の緑深く泉水に映り、手水鉢に近い青桐に蟬が鳴いて居た。そこには蝶脚の御膳があつて、葡萄酒やブランデーが既に死骸を横へて居た。

「さあ踊れ、弾け、唄へ」と伯爵は言つた。

「怨ういふ命令と共に直ぐ踊らなければ落雷するので女中共は立上つた。」

「勇壯活潑にやれ。」

「御前何にいたしましたせう」と女中の一人が言つた。

「猥褻なものをやつてくれ。」

「あら。」

女共はきやつ〜と笑ひ出した。

「皆踊れ、御酌は要らん、皆向ふへ行け、酒だけを此處へ置いて。」



女共は手拭を冠つた。

『因州因幡の鳥取で……』と一人が唄つた。伯爵は其れを聞かうとも見ようともせず、敬三に向つて言つた。

『今朝の明治新聞の社説は誰が書いたのか』

『よくは知りませんが多分主筆の小島君でせう』

『さうか、あれを君はどう思ふか』

其の日の社説は戦時の財政に就いて論じたものであつた、日本は此の戦争が今年も續くと軍資が全然無くなる、其の場合に又もや増税する積であるか、人民の財力に限りがある、政府は人民を苦しめずに自ら財源を求めねばならぬと警告したのであつた。

『あれは正しいと思ひます』と敬三が言つた。

『さうか』

伯爵はひどく心配さうに考へ込んでしまつた、其れから女中共に、もつとく踊れと命令した。

伯爵は悠ういふ風に女共に騒がして置くのが好きであつた、彼はどんな秘密な話でも悠ういふ場合にすん／＼進めて行くのである。女中共は毎もこれには閉口して居た、話が終るまで悠うして三味線を弾き通しに弾き、踊り通しに踊らねばならぬのである。

『日本の軍資缺乏を表白すると敵國に内情を知らす様な事になります』と鷗眠が言つた。

『君はさう思ふか』

『はい』

『だが新聞として政府の財政に警告を與へるのは當然ぢやないか』

『僕もさう思ひます』と敬三が言つた。三人は暫らく黙つた、ヤケ氣味に弾き出す三味線はがんがんに響いた、女共は不揃ひにキイ／＼聲で唄つた。

『あの顔を見てくれ』と伯爵は呆れて一人の女の方を眼で知らした、其の女は鼻穴を天井へ向けてウハの空で唄つて居た。

『佳人必ずしも佳ならず、才子必ずしも才ならず、才子必ずしも……』

伯爵は悠う口吟んで鷗眠を顧みた。

『何か可い韻がないかね』

『さうですな』

鷗眠は首を傾けて韻を探つた、が伯爵はもう其の事は忘れて居た。彼は日本人の富は一人につき二圓餘りの財産であると言つた。一人二圓で戦争をするんだから長びいたら實際に困ると言つた。そこへ一人の女中が葡萄酒を持つて来た。伯爵はブランデーを飲みたがつたのだが鷗眠が厳しく諫



めた。

『さうか／＼』と伯爵は極めて従順に首肯いた、彼は何人を問はず自分に苦言を呈する者を好きであつた。伯爵は其れから酒の話をした。彼は非常な酒豪である。女中共は倦さうな長唄ものを踊つて居た。

『勇壯活潑にやれ』と伯爵は言つた。喜撰を踊つて居たのが急にカツボレに變つた。

『カツボレ／＼よいとな』

蜂の巢を叩いた様に亂脈な聲が湧いた。

『馬鹿な奴等だ』

伯爵は微笑して暫らく踊を見て居た。と一人の女中が靜かに次の室から出て來た、さうして鷗眠に何やら囁いて去つた。鷗眠の顔色は蒼白になつた。

『伯爵到頭やつて來ました』

『何が』

『警視廳の奴等が』

『私故此處に居るのを知つてやつて來たのか、君だけ居ると思つてやつて來たのか』  
伯爵の顔は氣色ばんだ。

『其れは解りません、僕が行つて参ります』

『行くが可い』と伯爵は言つた。『だが永井』怒う言ひかけたが急に調子を變へて『行け』と怒鳴つた、其れから女中共の踊の中止を命じた。永井が去つてから伯爵はけろりとして居た。

『誰か二人ばかり、柔かさうな膝を貸してくれ』

『御寢り遊ばしますの？』

『美人の膝を枕にして眠れるかどうか度胸試しにやつて見るのだ』

『まあ物珍しさうに御前』と女中共は笑つた。

『私では如何でございませう』と肥つたのが言つた。

『柔かさうだが、膝が高いから頭が滑る』

『御頭が滑つこくていらつしやいますからね』

『こらッ失敬な』

『私では』

『瘡せた若い女が言つた。』

『年は幾つだ』

『あら御枕に年が御入用なのですか』



『年に依つて眠り様がある』

『十九でございます』

『三割を引いたな』

『まあ』

『可し、頼む、今一人は？』

『二人要るのでございますか』

『一人は頭、一人は足を載せる』

『私は御み足を頂戴しませう』

『章魚だと思つてるな』

『私は御手の方を』

『さうやつてくると煩い、矢張り寝るには一人の方が可い』

座蒲團の上に頭を置いたかを見ると快い聲が聞えた。敬三は不思議な感じがした、冗談と眞面目とをちやんほんにして、女中共に踊らせながら國家の大事を考へるなんて、此の老政治家の心の底には測り知られぬ大きなものがある。

彼は悠々思ひつ、酔うたま、自轉車で社へ歸つた。彼は編輯局へ入ると其處に只ならぬ昂奮の雰

圍氣を見た。

『明治が禁止されましたよ』と給仕が敬三に言つた、此の給仕は非常に敏捷でまめやかで皆に愛されて居た。

『停止だらう』と敬三が言つた。

『いゝえ、禁止です』

人々の顔は喜びに溢れて居た、正面に社長の石阪倉平は詰襟の白い服を着ていかにも鹿爪らしい顔をして論説記者等と語つて言つた。

『怪しからん、日本の弱點を曝露するなんて實に怪しからん、全力を擧げてあの新聞を潰さなきやならん』

『禁止ですからもう潰れた様なものです』と誰か言つた。

『いや、新聞ばかりではない、あの一味を死刑に處すべしだ、第一に社長高峰素之の如きは軍機書類を露國に賣つてるぢやないか』

『骨を粉に砕いても飽足らん奴です』

『其れは誤解です』と敬三は叫んだ。『大變な誤解です』

人々は敬三の方を見た。社長は恐しく苦い顔をして敬三を眼鏡越しに睨んだ。



「此の事件は餘程慎重に考へなければならぬ事です、第一に、他の事と違つて、露探といふ汚名は非國民といふ事になります、社會上の生命が全く絶たれてしまふのです、これが事實であるなら無論断々乎としてやるべしですが、若し冤枉であつたらどうしますか、第二は明治新聞は我々と同業者です、同業者の禮儀として吾々は輕率に判断する事は慎まねばなりません」

敬三は急ぎ込んで言つた。人々は妙に冷い笑ひを顔に浮べて、社長の方を見やつた。

「輕率ではありません、事實です」

「證據があるのですか」

「あります」

「永井鷗眠を介して佛國人ボーリユーに賣つたといふのでせう」

「さうです」

「熱海で一緒になつたといふのでせう」

「さうです」

「だが其れは證據になりません」

「書類を賣つた時に、其れを見た者が自白したのだから仕様がないうさ」

「其れはどんな人ですか」

「婦人です」

「貴婦人ですか」

「いや、女中です」

「何處の？」

「宿屋の」

「女中？」

敬三は驚いて黙つた、彼は鷗眠が絶對秘密にして居た貴婦人なるものに対して疑惑がまだ解けないのに、今此處で貴婦人ではない女中だと聞いたので、何が何やら解らなくなつた、貴婦人と女中の間違か、但しは別々に二人の女性があるのか。

敬三が沈黙したのを見て石阪社長はぎろりと眼を光らして言つた。

「小柴さん、貴方は永井鷗眠と親密の様ですね」

「さうです」

「貴方は少しく自重なさらんと、飛んだ災難を受けますぜ」

「僕は鷗眠を信じます、あの男は心に締りがなく、酒ばかり飲んで居るが、國を賣る様な悪徒ではありません、鷗眠に限らず凡ての日本人に賣國奴があるとは思ひません」